

魔法少女リリカルなのは
はstrikers 蒼炎の剣
士

京勇樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は出来る限り、ハッピーエンドにするために戦い続けた

伝説の蒼い炎のスキルと古代魔法を受け継ぎ、幼馴染の少女たちのために

だが、ある雪の日にその少年は行方不明になってしまった

そして、数年後

予想外の形で、少年と少女たちは再会することになった

目次

プロローグ 運命の日	1
邂逅	10
奪回戦	18
決意する者達	28
目覚めと……	33
新しい交代部隊	40
地球へ	51
搜索開始	58
臨死体験	64
お風呂へ	69
温泉トラブルと蜃気楼	75
開眼	83

データドレイン	91
帰還	96
交替部隊、続	101
それぞれの一日	108
ホテル・アグスタ1	115
交戦開始	122
預言者	129
第二の開眼	134
フィドヘル戦2	142
不穩	148
欲求	155
解放と説教	164
語りかけ	172

ゴレ	策謀家	奪取戦	戦闘機人	捕縛	新たな相手	流転	確信	動	六課の休暇 フォワード陣編	六課の休暇 隊舎編	六課の休暇	対話
247	241	232	227	220	215	210	205	200	195	189	183	179

始動	一人の狙撃手	アインヘリアル	運命の地へ	誤解は解きましょう	母性	少女	歴史	会談	情報	ゴレと情報整理	ゴレ戦3	ゴレ戦2
310	305	301	296	289	285	280	276	270	266	260	255	251

予感	315
魄翼の予感	319
暗雲	323
六課陥落す	329
状況	335
決意	339
進捗状況	345
出撃と悔恨	349
再起する者	356
思考と捜査	363
対峙	368
姉妹の戦い 1	373
コピー因子と黄昏因子	377

姉妹の戦い 2	381
言葉	385
無限の欲望	392
金色の意志表示	397
ミッド上空戦	402
内部に突入	407
攻防と逮捕	414
男達	420
騎士	425
突破と怒りの鉄槌	431
優勢	438
破壊	445
最終決戦 1	449

クビア

開戦

憑神

死の恐怖

憑神・オーバーロード

アウラ

エピソード 決着の刻

453

459

464

471

475

481

487

プロローグ 運命の日

ある日のある世界

そこでは、雪が降っていた

だが、その白かった雪は

真っ赤に染まっていた

「アキ！ 戻れ！ 今のお前の怪我じゃ!!」

そう叫んでいるのは、赤いゴスロリ風の騎士甲冑を纏っている少女で、名前はヴィータという

そのヴィータの腕には、白いバリアジャケットを赤く染めている少女が抱かれている
その少女の名前は高町なのは

そのなのはは、怪我を負っていて、出血していた

だが、バリアジャケットに付着している血の大半はなのはのモノではない

その血の大半は、数m先に立っている少年

よしいあきひ
吉井明久のモノだ

明久の胸部は刃によって貫かれており、今も出血が続いている

「ヴィータ……なのはを連れて…撤退して……」

明久は自身のデバイスである剣

〈カイト〉で姿勢を維持するのがやっとなのに、そう告げた

「な!? なに言ってるやがる! お前のほうが重傷じゃねーか! そんなお前を放って撤退なんざ!!」

ヴィータがそう言うが、明久は首を振ってある方向を指差した

「あれを……」

ヴィータは明久の指差した方向を見て、そして絶句した

そこには、カマキリを彷彿させる機械の群れが大挙して向かってきていた

そう、それこそが明久に大怪我を負わせ、なのはを撃墜した敵だった

「あ、あれは……っ!」

「幾らヴィータでも……僕となのはを抱えながら撤退してたんじゃ……追いつかれちゃう……」

「だからって、お前を置いて!!」

明久の言葉に、ヴィータは食って掛かるが

「お願い……ヴィータ……なのはを……守って……」

明久は首を振ってヴィータを制止して、剣を構えた

それを見たヴィータは、唇をかみ締めて

「すぐに戻る……絶対に、生きてろよ!!」

なのはを抱えて、空を飛んでいった

「頼むよ……ヴィータ……」

明久はヴィータを見送ると、相棒のカイトを見て

「ごめんね……カイト……貧乏くじを……引かせちゃったみたいで……」

「それは言わない約束でしょ？ わかってるさ。君は守るためなら、自分も犠牲にするってことは」

インテリジエントデバイスであるカイトは苦笑交じりの声で、そう返答した

「来たね……それじゃあ、行こうか。相棒」

「ああ、行こう。蒼炎の剣士の実力を相手に見せてやろう!!」

カイトの激励の言葉に、明久はうなずくと

「蒼炎の剣士……吉井明久……行くぞ!!」

大怪我を押して、守るために、敵に突撃した……………

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「誰か！ 誰か応答してくれ!! このままじゃ、なのはも明久も死んじゃう!!」

ヴィータはなのはを抱えたまま、涙声で通信を試みていた

その背後では、爆発音が聞こえてくる

「頼む！ 誰か……誰か、応答してくれ!!」

何度目かわからないが、そう言った時

通信画面が開いた

『こちらシヤマル！ ようやく繋がったわ！ ヴィータちゃん、なにがあつたの!?!』

その声が聞こえた時、ヴィータは心底安堵した

ショートカットの金髪に優しそうな緑色の眼

その人物の名はシヤマル

通称、湖の騎士と呼ばれている現在は見習いの医務官である

「シヤマル！ 頼む、今すぐに医療班を送ってくれ！ このままじゃ、なのはと明久が死

んじまう!!」

『ちよつ、ちよつと！ 落ち着いて！ いいから、状況を!』

慌てているヴィータをシヤマルは落ち着かせようとするが、ヴィータは涙をにじませ

て

「頼むよ！ 医療班をすぐに送ってくれ!! そうしないと……なのはと明久が……」

と、シヤマルを急かした

『今、そっちにはやてちゃんとシグナムが向かつてるわ！ 私達も向かうから、待ってて

！』

「ヴィータの必死さから状況を察したのか、シャマルはそう告げた
頼む……っ！」

ヴィータがそう言うと、シャマルがうなずいて通信画面は閉じた
その数分後、ヴィータははやてとシグナムに合流

さらに数分後、シャマル率いる医療班が合流

ヴィータはなのはを医療班に預けると、シグナムとはやての二人と一緒に明久の場所
へと戻った

だが、三人が見たのは

夥しい数の機械の残骸と血痕

そして、明久が身に着けていた三個のペンダント

それだけだった………

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数十日後

場所 時空管理局次元航行艦へアースラ

「ふっざけんなっ!!」

その怒号と共に、ヴィータは拳を壁にたたきつけた

「ヴィータ、落ち着け!!」

「これが落ち着いていられるか!!」

激昂しているヴィータをシグナムが宥めようとしているが、ヴィータはシグナムの制止を振り払った

「シグナム達だつて納得いかねえだろ、こんなん!!」

ヴィータはそう言いながら、机の上の書類を突きつけた
そこには

〈報告書〉

先日行われた捜査の結果、吉井明久空曹長をM I Aと認定

さらには、吉井明久元空曹長を命令違反の咎により降格処分とする

としか、書かれていなかった

さらに、机の上には雑誌が置かれており

〈スクープ! エース・オブ・エース撃墜される!? 原因は同僚の命令違反!?〉

と、見出しに大きく書かれていた

「あれはどう考えても、なのはのミスじゃねーか! 明久はそれを守っただけだろ!」

なのに、なんで明久が処罰されるんだよ!!」

と、ヴィータが怒鳴った時、ドアが開いて女性が入ってきた

「それが、上層部の判断した結果なのよ……エース・オブ・エースが撃墜された理由として、明久くんを生贄にしたのよ……」

女性、リンデイ・ハラオウンは苦い表情でそう告げた

「なんだよそれ……ふざけんなよ!!」

ヴィータは怒鳴ると、部屋を飛び出した

「すみません、リンデイ提督……」

「仕方ないわ。ヴィータちゃん、明久くんと仲良かったものね……」

リンデイには年齢が明久に近い息子と、同い年の養子の女の子が居るために、親として複雑だった

「それで、主はやてとテストタロツサは？」

「今は二人とも、なのはさんの所に居るわ……」

「そう……ですか……」

リンデイの言葉に、シグナムは鎮痛な表情を浮かべていた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時空管理局本局 医務室

その一部屋に、なのは入院していた

その意識は回復しており、自分の容態も聞いた

重傷だが、リハビリすればすぐに空も飛べるようになる

それ自体はいい結果だろう

だが、はやてと金髪の幼馴染

フェイト・T・ハラオウンから聞いた言葉を聞いて、なのはは泣いてしまった

「私のせいで……アキくんが……」

「なのは……」

「なのはちゃん……」

はやてとフェイトの二人はなのはを慰めようとしたが、言葉が出てこなかった

「ごめん……アキくん……ごめん……っ！」

なのはは、声を大きく泣いた

フェイトとはやての二人は、そんななのはを抱きしめることしか出来なかった

この後、なのはは教導官への道を進み

はやては捜査官と指揮官としての経験を積み

フェイトは執務官になって、いろいろな事件を解決していった

そして、新暦75年

新部隊（時空管理局遺失物管理部 機動六課）がはやてによって設立されて、なのはとフェイトは分隊長として着任した

この事件で、彼女達は思わぬ再会をすることになるが、今はまだ知らない

邂逅

「よしっ！ レリックケース確保！」

と言ったのは、ショートカットにした青い髪に鉢巻を巻いた少女

スバル・ナカジマである

「周囲に敵影無し……スバル、今のうちに車両から出るわよ」

スバルにそう言ったのは、ツインテールのオレンジ色の髪に、両手に持った銃型のデバイスが特徴の少女

ティアナ・ランスターである

この二人は、八神はやて率いる時空管理局遺失物管理部機動六課の隊員である

彼女達が所属している機動六課は、今スバルが持っているケースの中に入っている口ストロギア、レリックの回収を専任にしている部隊であり、新暦75年の頭に一年間限定で稼働することになっている

そして、今日はその機動六課の初出勤となった日である

やはり、初出勤ということもあって、トラブルもあつたが目的のレリックも回収出来た

後は、本局から来るヘリにレリックケースを渡せば、今回の出動は終わる

そのはずだった

スバルがレリックケースを持って移動しようとした時、二人の耳にトーンという音が聞こえた

「なに、今の音?」

スバルは警戒した表情で周囲を見回したが、過去に軽く音楽に触れていたティアナはポツリと

「今の……ハ長調ラ音……?」

と呟いた

その時、二人から少し離れた所に蒼い炎の球が現れた

その炎の球を見て、スバルは顔を青ざめて

「まさか……人魂!?!」

「そんなわけないでしょ、この(ご)時世に……」

スバルの言葉を聞いて、ティアナは思わず突っ込んでいた

その時、ティアナのデバイス

クロスミラージュが光り

《警告、魔力反応検知!》

と警告を発した

その瞬間、炎の球は爆発的に広がった

場所は変わり、機動六課隊舎司令部

「はやてさん、現場で魔力反応を感じました！ 推定……オーバーS!」

と叫ぶように報告してきたのは、陸士を示す茶色い制服を着たメガネを掛けた茶髪が特徴の女性だった

その名はシャリオ・フィニーノ、通称シャリーノである

「なんやて!？」

シャリーノの報告を聞いて、部隊長であるはやては思わず立ち上がった

「待ってください……魔力パターンに適合有り……そんな、有り得ない!？」

シャリーノがそう言うのと、はやてはシャリーノに視線を向けて

「報告しいやー!」

と告げた

するとシャリーノは、視線をはやてに向けて

「この魔力パターンは……吉井明久上等空士の物です!」

と告げた

その報告を聞いて、はやては息を飲んだ

「有り得へん……だって、明久くんは……」

と呟いている時、メインスクリーンに通信画面が開き

『主！ 私に出撃させてください！』

と銀髪赤目の特徴の女性が言った

彼女の名前は、八神リインフォース・アインス

はやての家族であり、部下でもある

『主とて分かっている筈です！ この魔力パターンは、間違いなく明久だと！』

「せやけど……」

アインスの言葉を聞いて、はやては俯いた

その時

「スターズF、交信途絶！」

という、悲鳴混じりの報告が上がった

「なんやて!？」

「続いて、ライトニングFとも交信途絶！ スターズ1、ライトニング1、列車に急行！」

シャーリーの報告を聞いて、はやてが唇を噛んでいると

『我が主！』

とアインスが声を上げた

すると、はやてはキツと表情を改めて

「リインフォース、出撃や！」

と命じた

『了解！』

リインフォースがそう返答すると、通信画面は閉じた

再び場所が変わって、戦闘区域

「エリオ、キャロ、返事をして！」

「スバル、ティアナ!？」

必死な様子で部下の名前を呼んでいるのは、機動六課分隊長のフェイト・T・ハラオウンと高町なのである

彼女達は部下達では対処が無理だった、敵の航空戦力の殲滅を行っていた

そして、もうすぐで今回の戦闘が終わると思つた矢先に、部下達からの通信が途絶えた

それが二人にとって心配だったが、何よりも途絶える直前にそれぞれ《蒼い炎》という言葉が聞こえていた

それを聞いた二人は、気が動転していた

二人にとって蒼い炎というのは、今から数年前に行方不明になった幼なじみの少年が

使っていたからだ

継る思いで通信を試みていると

「高町、テストarroツサ！」

と、自分達を呼ぶ声がして、二人は振り向いた

「リインフォースさん！」

「リインフォース！ どうして!？」

リインフォースの姿を見て、二人は驚いた

なぜなら、彼女は本来はやての秘書官を勤めており、今回は部下達新人の初出動ということもあって、非常用戦力としてフェイト以外を運んできたヘリで待機していた筈だったのだ

しかも、出撃するにははやての許可が必要だったはずと、二人は記憶していた

「主の許可なら得た。それより二人とも、心して聞いてほしい……」

リインフォースはそこまで言うのと、一拍置いてから

「フォワード陣を襲撃したのは間違いなく……明久だ」

と告げた

「なっ……」

「そんな筈は……」

なのはは絶句し、フェイトは反論しようとしたが、リインフォースは被せ気味にして「ロングアーチで照合されて、間違いなく明久だと出たし、私も明久の魔力波を感じた。間違いはない」

と断言した

その時だった

《警告！・高魔力反応接近中！》

となのはの愛機、レイジングハートが告げた

三人が視線を列車の方に向けると、列車の方から蒼い炎を翼のようにして近づいてくるのが居た

青を基調とした、不思議な模様の入ったバリアジャケット

それは間違いなく、明久のバリアジャケットだった

だが、そんな明久の姿で一際異様な物が二つあった

一つは、顔全体を覆うように付けられている機械質な仮面だった

目に当たる部分が不規則に点滅し、どうしても異質な雰囲気を感じている

そして、もう一つはその左手に握られている武器だった

それは、明久の全長に匹敵しうる赤い十字架だった

そんな武器を明久が使う所は、三人は見たことがなかった

「やるしか……ないの……?」

「なののが悲しそうな表情で呟くようにそう言うと、フェイトとリインフォースは構えて」

「そうだよ、なのは」

「明久を、私達の手で取り戻すんだ」

と告げた

そして、彼女達の取り戻す戦いが始まった

奪回戦

「っ…………う…………」

ティアナが目を覚ますと、視界に約30センチほどのリインフォースに似た女の子が見えた

「あ、ティアナ！ 目を覚ましたですね！」

「リイン空曹長…………っ！」

女の子、リインフォースⅡ空曹長が声を掛けると、ティアナは体を起こそうとしたが、すぐに苦痛で表情を歪めた

「あ、無理はしないでください！ 今、傷を治癒してる最中です」

リインフォースⅡことリインがそう言うのと、ティアナは思い出したのか

「あいつは…………あの蒼炎はどこに!?!」

とリインに問い掛けた

すると、リインは俯いて

「今は外で、なのはさん、フェイトさん、お姉ちゃんと交戦中ですが…………」

と言った

それを聞いて、ティアナは齒噛みしてから

「このままやられっぱなしで、終わってられない……!」

と言うと、近くにあつた拳銃形態のクロスミラージュを握ると駆け出した

「あつ! 待つです、ティアナ!」

リインが止めるが、ティアナは聞かずに走り去つた

その頃、外では……

「つ……相変わらず、デタラメだね……あの蒼い炎は……」

「だね……攻防共に優れて、しかも身に纏うことで、攻撃魔法は一切効かない……」

「だが、直接攻撃なら効くな……」

戦闘開始から、僅か十数分

三人は傷だらけで、荒く息を吐いていた

それに対して、明久は傷らしい傷は見あたらなかつた

明久はリミッター付きとはいえ、三人を圧倒していた

だが、三人は突破口を見いだしていた

明久の纏っている蒼炎は、攻防共に優れており、一朝一夕ではダメージを与えるのは

難しい

だが、無敵ではない

なのはは一回深呼吸すると、グツとレイジングハートを握り締めて

「フェイトちゃん、リインフォースさん」

「うん！」

「ああ！」

なのはが呼び掛けると、二人も構えた

その直後、なのははレイジングハートを明久に向けて

「アクセルシューター・マルチシフト！」

と魔法を発動した

計30発の魔力弾による、多方向同時攻撃である

「シュート！」

なのはが放つと、30発の魔力弾が複雑な三次元軌道を描きながら明久に殺到した
放たれた魔力弾は、明久にあらゆる方向から襲いかかった

避けきれないと判断したのか、明久は蒼炎を全身に纏って防御態勢を取った

そして、魔力弾が着弾する直前に

「バースト！」

となのはが叫んで、それと同時に全ての魔力弾が爆発し、明久の周囲を煙で覆った
明久は動きを止めて、次撃に備えた

その時

「疾風迅雷！」

という、フェイトの声が聞こえて、明久は上に見上げた

そこには、バルデイツシュをプラズマザンバー形態にして振り上げたフェイトが、急降下してきていた

それを見て、明久は左手に持っていた赤い十字架を引いて迎撃態勢を取った

そして、明久が十字架を振り上げた直後、フェイトは一気に軌道を変更して攻撃せざるに離れた

フェイトのその行動が予想外だったのか、明久は僅かに動きを止めた

その時だった

「もらった！」

リインフォースが爆煙を突き破って、下方から現れた

リインフォースの右腕には、下腕部を覆うほど大きな赤い杭付きの籠手があった
それが、彼女のデバイスたるナハトである

複数形態への変形機構を有しており、彼女しか扱えないデバイスである

しかし、近接格闘が得意な彼女が扱うことで、強力な一撃を相手に放つことが可能となつている

タイミングは完璧

しかも、明久は十字架を振り切った直後なので素早い行動は不可能の筈だった

明久は左肩からまるで、ブースターのように蒼炎を吹き出して急速旋回

ラインフォースの一撃を十字架で弾くと、右手でラインフォースの首を掴んだ

「ガッ……グッ!？」

明久の指がメリメリとラインフォースの首にめり込み、ラインフォースは息を詰まらせた

「ラインフォース！」

「ラインフォースさん！」

なのはとフェイトがラインフォースを助けようと、それぞれの愛機を明久に向けた

だが、明久はラインフォースを盾にして、二人の行動を止めた

するとラインフォースは、顔を蒼白にしながらも

「私に構うな……撃て……っ！」

と懇願するが、二人には撃てなかった

その時だった

風切り音が聞こえてきて、明久は背後に振り向いた

その直後、明久の顔にオレンジ色の魔力弾が直撃した

「今のつて……!!?」

「ティアアナ!?!」

フェイトとなのはが魔力弾の来た方向に視線を向けると、止まっているリニア列車の側面の穴

恐らく、明久が破壊しただろう穴の部分にティアアナが膝立ち状態でクロスミラーージュを構えていた

そのティアアナは荒く息をすると、険しい表情で

「これで……一矢報いたわ……」

と言うと、意識を失ったらしく倒れた

そして、リインフォースは明久が魔力弾を食らった際に腕を振り解いて脱出した

そして、リインフォースが体勢を立て直して明久に体を向けた時、明久は右手を額に当てて悶絶し始めた

「あっ……グツ……アアア!」

「なに?」

「なんだ?」

「一体、何が……」

明久の様子に、三人は首を傾げた

その時、通信画面が開き

『なのはちゃん、フェイト、リインフォース！ 今がチャンスよ！』

と紫混じりの長い髪が特徴の妙齢の美女が告げた

彼女の名前はプレシア・テストアロッサ

フェイトの母親の一人である

「プレシアさん！」

「プレシア母さん！」

「どういふことだ？」

リインフォースが問い掛けると、新しく小さい通信画面が開いて

『彼の顔に付けられている、あの仮面！ 多分、あれは洗脳装置よ！』

と明久の顔部分が表示されていた

プレシアの説明を聞いて、三人は悶絶している明久に視線を向けた

そして、明久の顔に付けられている機械質な仮面に、大きなヒビが入っていた

どうやら、ティアナの魔力弾の直撃により、破損したらしい

『だから、あの仮面を破壊すれば、明久君を助けられるわ！』

プレシアがそう言うと、三人は顔を見合わせて頷いた

そして、フェイトとなのはが明久の側面に布陣すると

「アキ君、もう少しだけ待ってて！」

「今、助けるから！」

と言うと、明久の手足をバインドで拘束した

そして、リインフォースが明久の前に立つて

「すまん……少し我慢してくれ！」

と、その右拳を仮面に叩き込んだ

その数瞬後、仮面のヒビが大きくなり、仮面は真つ二つに割れた

仮面の下から現れたのは、成長してはいるが正しく、明久の顔だった

「あつ……」

明久は小さく声を漏らすと、力無くリインフォースの方に倒れて、リインフォースも

そんな明久を優しく受け止めた

「リインフォースさん！」

「明久は？」

なのはとフェイトが問い掛けると、リインフォースは自身の胸元で穏やかに寝息を立てている明久を優しい気な表情で見ながら

「大丈夫だ……眠っているだけだ」

と告げた

ラインフォースの説明を聞いて、二人が安堵していると、明久が持っていた十字架が発光し、光の球体になった

「なんだ!？」

「これは……」

「一体……」

三人が混乱していると、球体はフェイトの前に浮かんだ。その直後、フェイトは左手を頭に当てて

「死の恐怖……スケイス？」

と呟いた

すると、球体はフェイトの胸の中に消えていった

「なに……今の……？」

フェイトは混乱するが、何も起きなかった

そしてこの数十分後、地上本部から輸送用のヘリが到着。レリックケースは、地上本部へと運ばれた

そして明久は、気絶したフォワード陣と共に六課のヘリにて六課隊舎へと運ばれた

これが、黄昏の碑文を巡る戦いの始まりだった

決意する者達

リニアトレインでの戦いの翌日の朝

機動六課は隊長であるはやての判断により、一日休暇となっていた

ハードな戦いを潜り抜けた新人達は、今もベッドで眠っているだろう

しかし、隊長陣と医務官であるシャマル、プレシア女史は医務室に居た

そして、そんな彼女たちの前にあるベッドには、一人の少年が眠っていた

その少年の名前は、吉井明久

彼女たちにとって、とても大切な少年である

「それで、シャマル……結果はどうや？」

はやてが問い掛けると、シャマルは険しい表情で

「はつきり言つて、こんな事をした奴を八つ裂きにしてやりたいわね……」

彼女にしては珍しく、怒気を孕んだ声でそう言うと、ウインドウを開いた

「まず、全身から薬物反応が検出されてるし、何よりも、脳内に小さなチップがあるわ」

と告げた

シャマルの説明を聞いて、全員が一様に険しい表情を浮かべた

特に、フェイトに至っては思い当たる節があるのか、爪が食い込むほどに拳を握り締めていた

すると、シグナムがウインドウを見ながら

「そのチップとやらは、除去出来ないのか？」

と問い掛けた

すると、シャマルは首を振りながら

「無理ね……本局の設備を使っても、取れる確率は低いわ……」

と言った

シャマルはそう言うと、ウインドウに指を這わせて

「せめて出来るのは、封印術式で機能を停止させる位ね……」

と呟いた

それを聞いて全員が沈黙していると、医務室のドアが開いて

「はやてさん。このデバイス、直りましたよ」

とシャリーが入ってきた

「お、直ったんか！」

シャリーの報告を聞いて、はやては嬉しそうに振り返った

「はい、なんとかですけどね。プレシアさんが過去のデータを持って来て、助かりま

したよ……でなかったら、直せませんでしたから」

シャーリーはそう言いながら、ベッドに近づいてその手を開いた

シャーリーの手の中に有ったのは、クロスした蒼い双剣型のペンダントだった

その時、デバイスが光って

(再起動……完了。明久の負傷を確認)

と、カイトが喋り出した

(明久の負傷が規定のレベルを突破……リプメイン、発動!)

カイトがそう言った直後、明久の全身を蒼焰が包み込んだ

蒼焰は一瞬で収まり、目に見えていた傷は無くなっていた

「まさか……」

シャマルはそう呟くと、再び診察を始めた

そして、十数分後

「わかってたけど……古代魔法は凄いわね」

と感嘆したように呟いた

「どういふことだ?」

とヴィータが問い掛けると、シャマルは先ほど開いたのとは違うウィンドウを開いて

「明久君の薬物反応とか、全身にあった傷……全部治ってるわ」

と答えた

すると、なのは達は目を見開いた

だが、プレシアは冷静に

「不治の病すら治したのよ？ その位、訳ないわ」

と告げた

すると、なのはが涙を滲ませながら

「やつと……やつと、アキ君が戻ってきたよお……」

と呟いた

「なのは……」

「なのはちゃん……」

なのはの言葉を聞いて、フェイトとはやてはなのはに近寄った

気丈に振る舞っているが、なのはは明久が行方不明になった直後は酷かった

意気消沈し、何時も見せていた笑顔は消えていた

だが、任務はまるでロボットのようになした

ヴィータはそれを見て、不安に思っていた

まるで、感情を殺したように働き続けるのを見て、何時か壊れそうだと

だから、なのはと同じように明久が戻ってきて良かったと思っていた

だから……

「後は、アキを操っていたフザケた奴をぶっ叩くだけだな……」

ヴィータが決意を込めてそう言うと、全員意志の強い光を瞳に宿らせて頷いた。そして、運命の歯車は動き始めた。

目覚めと……

リニアレールの戦いから、三日後

「う……………」

明久は呻くと、ゆっくりと瞼を開いた

そして、明久の目に入ったのは白い天井だった

「こ、こは……………」

明久がボンヤリと眩くと、明久が寝ていたベッドの周囲に掛かっていたカーテンが開いて

「気が付いたかしら?」

とシヤマルが優しく微笑みかけた

「シヤマルさん……………」

明久は最初はボンヤリしていたが、少しすると目を見開いて

「なのはは、なのはは大丈夫なんですか!?!」

とシヤマルの両肩を叫ぶように問い掛けながら、シヤマルの両肩を掴んだ

それだけで、シヤマルは明久の記憶が《あの雪の日》で止まっていることを察した

シヤマルは落ち着かせるために、明久の両手を優しく離してから

「いい、明久君……落ち着いて聞いて……」

と語り掛けながら、念話で

（はやてちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、皆……明久君が目覚めたわ）
と旧知のメンバーに明久が目覚めたことを知らせた

そして数分後、明久は黙って顎に手を当てていた

「あれから、六年も……」

シヤマルの説明を聞いて、明久は頭をフル回転させていた

明久からしたら、シヤマルの話は正直言つて信じられない類だった

だが、色々と証拠が多々あった

まず、自分の声が記憶よりも低くなり、背丈も伸びていたこと

そこから判断するに、シヤマルの言ったことは本当だと分かった

見せられたカレンダーの年も、明久の記憶から六年も進んでいた

そして明久が唸っていたら、医務室のドアが勢いよく開いた

壊れんばかりに開けられて、シヤマルは顔をしかめたが、気持ちが分かるのか、注意しなかった

正確には、する暇が無かったというべきだろう

シヤマルと明久が顔を向けた直後

「アキーー！」

まるでロケットのように、ヴィータが明久目掛けて飛び込んだ

ヴィータは小柄なために予想出来ないかもしれないが、その力は大の大人ですら簡単に数メートルは吹き飛ばすのだ

そんなヴィータがそんな勢いでぶつかつたら、どうなるだろうか？

結果は推して知るべし

明久はベッドの上から落ちて、頭を強打

しかも、ヴィータが胸部に思い切り突撃したために、明久は一瞬とはいえ呼吸困難に陥った

「……っ！ ……っ!？」

明久は悶絶しているが、ヴィータは気付かずに明久に抱きついていた

すると、そんなヴィータの首根っこをリンフォース・アインスが掴んで持ち上げた
「なんだよ！ アインス！ 放せって！」

リンフォース・アインスに持ち上げられて、ヴィータは手足をバタバタしながら文句を言うが、リンフォース・アインスは悶絶している明久を指差して

「明久は病み上がりなんだが？」

と言うと、ヴィータは大人しくなつて

「悪い、アキ……大丈夫か……？」

と問い掛けるが、明久は答えられなかった

少々お待ちくださいませ。現在、シヤマル先生が治療中及び、お説教中です……

「分かった、ヴィータちゃん？　むやみやたらに、病人に飛びつかないように」

「はい……すいませんでした……」

シヤマルに説教されて、ヴィータは深々と頭を下げた

そんな二人の横では、明久をベッドに戻して、なのは達が明久に語り掛けていた

「明久……本当に良かった……良かったよ……」

「アキ君……久しぶり……」

「ごめんなあ、ヴィータが。後で注意しとくから、勘弁してな？」

「本当にすまない。大丈夫か？」

フェイトとなのはは涙ぐみ、はやとトリインフォース・アインスはヴィータのことで

謝っていた

すると、明久は手をパタパタと振りながら

「久しぶり、みんな……心配掛けたみたいだね」

と軽く頭を下げた

すると、それまで一步下がっていたシグナムと狼形態のザフィーラが近寄って

「久しいな、明久」

「無事で何よりだ」

と話し掛けた

「あ、久しぶり……なのかな？ シグナムさん、ザフィーラさん……」

明久はそう言いながら、二人と軽く握手した（ザフィーラは狼形態のまま）

その後、少し話すとなのは達はまだ仕事が残っていたらしく、医務室から出ていった

そして、夜遅く

シヤマルも居なくなり、医務室には明久だけとなった

明久は近くの机の上に置いてあった、愛機のカイトを掴むと

「カイト、起きてる？」

と問い掛けた

『起きてるよ、明久……まさか、六年も経ってたなんてね……』

カイトのその言葉に、明久は頷き

「そうなんだよね……何より驚いたのは、なのは達が凄い美人になってたことだよ……」

なにあれ、美人過ぎるでしょ？」

と驚愕混じりで言った

すると、少し間を置いてから

『明久……悪いお知らせがあるんだ』

とカイトが言うのと、明久は真剣な表情を浮かべて

「なに？」

と問い掛けた

すると、明久の目の前に一冊の本が現れた

黄昏色の背表紙に、目のような装飾が施された大きな本だった

『黄昏の碑文……再誕以外が無くなってるんだ……』

カイトがそう説明すると同時に本が独りでに開き、一番最後のページが開いた

そこには広く空白があり、一番下に《再誕・コルベニク》と書かれてあった

「なっ……」

明久が驚いていると、カイトは畳み掛けるように

『しかも……死の恐怖・スケイスが……フェイトと適合してる』

と言うと、明久は絶句した

「よりによつて……フェイトだなんて……」

『フェイトには、辛い役割ばかりがついて回るね……』

明久が頭を抱えていると、カイトが悲壮感を滲ませながらそう言った

そして、明久は数十秒間は俯くと、天井を見上げながら
「願わくば、再誕の能力が使われないことを願うよ……」
と呟いた

だが、明久のその願いは叶わなかった……

新しい交代部隊

「うーん……困ったことになったなあ……」

と言ったのは、この部屋の主たる八神はやてだ

そんなはやてが見ているのは、一つの報告書だった

その内容とは

《過日のガジェットとの戦闘行為により、隊員三名が重傷を負い、これ以上の戦闘行為は不可能である》

というものだった

それは、交代部隊が送ってきた報告書だった

機動六課は少数部隊故に、24時間態勢となると隊員の疲労が溜まる一方である

対策を講じたとしても、結果は高が知れる

今回見つけた部隊とて、はやてが苦勞して探しだした部隊である

だが、その部隊の隊員達の内、約半数が負傷

これは事実上の壊滅状態である

こうなると、新しい部隊を探した方が良いだろう

しかし、今回の部隊とてかなり苦労して見つけたのだ

交代部隊には制限は付かないが、だからと言って、実力が低い部隊を引き入れても仕方ない

しかし、実力が高い部隊は無駄にプライドが高く、交代部隊になることをヨシとしないのが多い

そういう意味では、前の部隊の隊長は非常に気さくで、はやての頼みを二つ返事で引き受けてくれたのだから、ありがたいことだった

だが、その部隊も戦力が半減

もしもう一回交戦したら、全滅する危険性すらある

しかも、少し前に知り合いから派遣の要請が来た

「うあー……ホンマにどないしよう……」

とはやてが頭を抱え込んでいた時、通信ウインドウが開き

『おい子ガラス……また私の所に、貴様宛ての書類が間違ってきているぞ。なんとかしろ』

とその声を聞いて、はやてはガバツと頭を上げた

そして、通信ウインドウに映っている人物を見ると、口をパクパクとした

『なんだ。そんなアホ面を晒して』

「居ったー！ー！」

通信ウインドウの向こうを指差しながら、はやては叫んだ
『む？』

通信ウインドウ向こうの人物は、訳が分からないと首を傾げた

翌日

はやて達は隊舎屋上にあるヘリポートに集まっていた

そんな中、フォワード陣は明久に視線を向けていた

すると、オレンジ色ツインテールの少女

ティアナが手を上げて

「あの、八神部隊長……その人は……？」

と問い掛けた

彼女達はどうかやら、明久のことが気になったらしい

それもそうだろう

明久は機動六課が稼働した時の挨拶の時には、居なかったのだから

「ああ、紹介しとくな。彼は吉井明久上等空士や。昨日付けで六課に合流したんや」

とはやてが紹介すると、明久が一步前に出て

「初めまして、僕が吉井明久上等空士だよ。皆、よろしくね」

と挨拶すると、四人は一斉に敬礼しながら

「「「よろしくお願いします!」」」

と声を揃えた

「詳しい自己紹介は、ヘリの中でお願いな」

とはやてが言うと、フエイトが心配そうに

「はやて、本当に大丈夫なの?」

と問い掛けた

「ん? なにがや?」

質問の意図が分からないのか、はやてが首を傾げていると、なのはも近寄って

「交代部隊のことだよ、はやてちゃん。部隊の半数が重傷を負ったんでしょ?」

と問い掛けると察したらしく、はやては指を鳴らしながら

「それなら大丈夫や。代わりの部隊は見つけたからな」

と答えた

「え? そうなの?」

「よく見つけたね、はやて?」

と二人が言うと、はやては両手を腰に当てて

「そら苦労したんよ? 色々と手回ししなあかんかったしな」

と言った

その時

「……………っ！」

とどこか遠くから、声が聞こえた

「ん？　なんか、声が聞こえない？」

と明久が言うと、はやてが

「お、来たみたいやね」

と言った

「こーのー！」

と声はつきり聞こえた

声はつきり聞こえたことにより、はやてはある方向に顔を向けて

「おーいこつち……………」

と言おうとしたが、その瞬間

「こーの……………っ！　阿呆があああ！」

と怒号と共に、はやての顔面に足がめり込んだ

「アガポ!!」

はやては奇妙な悲鳴を上げると、大きく吹き飛んだ

「二八神部隊長ー!?」

蹴られたはやてを見て、フワード陣は驚き、なのは達はヤレヤレと溜め息を吐き、明久は蹴った人物を見て固まった

なにせ、はやてを蹴り飛ばした人物は、そのはやてにソックリだったのだ

はやてを蹴り飛ばした人物は、ゆっくりと着地して

「このアホ子ガラスが！ 無茶を言いおつて！ なにが、今持っている案件を今日中に終わらせて、明日来てくれだ！ しかも、無駄に手回しまでしおつて！ おかげで、ユーリの睡眠時間が四時間も削れたではないか！」

とはやてに向かって怒鳴った

すると、起き上がったはやてが

「痛たたた……だからって、いきなり蹴りはないんとちゃうん、王様？」

と言った

すると、王様と呼ばれた少女は

「そもそも、なぜあんな事を言ったのか、キチンと説明せい！」

と再び怒鳴った

それを聞いて、なのはてフェイトが呆れた様子で

「はやてちゃん、説明してなかったの？」

「いくら何でも、それは怒るよ」

と注意した

そして、王様に向けて

「あのね、王様。交代部隊の隊員の内、半数が負傷しちゃったの」

「それで、はやてが探しておくって言ってたんだ」

とはやてに代わって説明した

すると、王様は腕組みしながら

「だったら、キチンとそう説明せい！ 要件だけ言ったら、サツサと切りおつて！」

と三度怒った

理解が追い付かず、フォワード陣と明久が固まっていると

「まあまあ、どうせ終わる段階だったんだから、良かったじゃん、王様！」

「そうですよ、王よ」

と続いて、フェイトに似た青髪の少女となのはに似たショートカットの少女が現れた

いよいよ理解不能になり、明久が固まっていると

「まさか………独立遊撃部隊、ダークマテリアルズ？」

とティアナが呆然とした様子で呟いた

すると、王様はニヤリと笑みを浮かべて

「ほう……我らを知っている奴が居たか……そうだ。我らこそ、時空管理局最強と名高き独立遊撃部隊、ダークマテリアルズ！ 我はその隊長、ディアーチエ・K・クローディアだ！ 王と呼べ！」

と自信満々に名乗った

そして、王様ことディアーチエに続いて青髪の少女が

「んで、カッコイイ僕が、ダークマテリアルズの斬り込み隊長のレヴィ・ラッセル！」

と元気に名乗り、最後にショートカットの少女が優雅に

「そして私が、シユテル・スタークスと申します」

と名乗った

三人が名乗ると、はやてが首を傾げて

「なあ、王様。そのユーリはどうしたんや？」

と問い掛けた

すると、ディアーチエはキツとはやてを睨んで

「貴様が無茶なオーダーをするから、夜遅くまで起きて、まだ寝ておるわ！」

と怒鳴った

「だから、悪かったってばあ。そんなに怒らんといてな」

はやてがそう謝ると、ディアーチエは憤然とした態度で

「一応、我らは先発だ。他の奴らは後日来る。引き継ぎが終わっていないからな」

と言うと、明久に気付いたようで

「む？ 貴様は……」

と眼を細めた

「あ、僕は吉井明久上等空士です」

ようやく我に帰った明久は、敬礼しながら名乗った

すると、ディアーチエは笑みを浮かべながら

「ほう……貴様がそうか。なるほど、良い眼をしているな……先ほど名乗ったが、我はディアーチエ・K・クロードイア、階級は二等空佐だ。貴様には特別に、ディアーチエと呼ぶことを許そう」

と告げた

「はへ？」

明久が間拔けな声を出すと、ディアーチエに続いて

「おお！ 王様がそう言うのって、珍しいね！ 僕はレヴィ・ラッセル一等空尉だよ！」

と名乗り、最後にシユテルが

「そうですね。私はシユテル・スタークス一等空尉と云います」

と名乗った

すると、いつの間にか寄ってきていたはやてが、ディアーチエに抱き付いて「明久君だけズルいわ！ 私にも呼ばせてえな！」

と抗議した

すると、ディアーチエははやての頭を掴んで

「ええい、やかましいわ、子ガラス！ 貴様には永遠に許可せぬわ！ それよりも、貴様の部隊は出張なのだろうが！」

と言うと、はやてを思いつ切りヘリへと投げた

そんな光景を見て、なのはとフェイトが

「ごめんね、王様。後でキツク言っておくから」

「交代部隊の件、ありがとうね」

と言うと、ヘリへと乗った

そしてなのは達がヘリに乗ると、フォワード陣と明久、シグナム、ヴィータ、シヤマール、リンフォース姉妹が乗り込み、ヘリは出発した

ヘリを見送ると、ディアーチエは

「あやつが、蒼き炎と黄昏の書の使い手か……辛い運命を背負ったな」

と呟いた

すると、シユテルが

「それが、永きに渡る蒼炎の使い手の定めですよ。王よ」

と言って、隊舎に向かいながら

「あなたは優しいですから、辛いですね」

と言った

「願わくば、再誕が目覚めることが無いように……」

ディアーチエはそう言いながら、シユテルに続いて隊舎に向かった

ただ一人、レヴィは分かんないといった表情で首を傾げた

レヴィ・ラツセルは基本的に、アホの子である

地球へ

へりに乗って、数分後

「これから向かうのは、第九十七管理外世界。現地名称、地球」

「その世界のとある島国、そのさらに小さな街に落ちたロストログアを回収するのが、今回の任務だよ」

はやてに続いてフェイトが説明すると、フォワード陣はウィンドウを開いて

「惑星名称地球、文化レベルB。魔法文化無し……って、魔法文化無いの!?!」

「無いよ。私のお父さんも地球産まれの家系でね、魔力が無いんだ」

ティアナの驚きにそう返したのは、ティアナの隣に座っていたスバルである

「どうやら彼女の父親は、地球産まれの家系らしい」

「ということは、スバルさんはお母さん似なんですね?」

「うん!」

キャロからの問い掛けに対して、スバルは嬉しそうに答えた

すると、そんな二人の会話を聞いていたティアナが

「なんでそんな星から、なのはさんや八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導師が

……」

と呟くと、なのはとはやての二人が

「たまたまーな感じかな？」

「そうだね。私もはやてちゃんも、魔法と出会ったのは偶然だから」

と笑いながら答えた

「あ、すいません」

「ええよ。それに、明久君も地球産まれやで」

「え、そうなんですか？」

はやての言葉に驚いてエリオが問い掛けると、明久は微笑みながら

「うん、そうだよ。まあ、僕は古式魔法だけどね」

と答えた

「古式……魔法？」

聞いたことが無かったのか、スバルが首を傾げた

「うん。今君たちが使ってるベルカ式やミッド式の源流。多分、今使ってるのは僕位

じゃないかな？」

「凄いですね……」

明久の説明を聞いて、キャロが呆然とした様子で呟いた

「凄くないって……話は変わるけど、はやて。任務の場所は地球のどこ？」

明久が問い掛けると、はやてはどこか意地の悪い笑みを浮かべて

「場所は日本は海鳴市や」

と言った

その直後、明久は後部ハッチの方へと駆け出したが

「シヤマル！」

「はーい！」

明久をシヤマルのバインドが捕まえた

「ぬあっ!? しかも、転移も出来ない!？」

「ふっふっふ……逃げるのは予想しとったから、転移封じを付加させたで」

「諦めて行きましよ、明久君」

「ちくせう！」

明久はジタバタ暴れるが、それはヴィータとシグナムによって担がれた

そして、転移ポートがある本局に到着すると、はやてはアインス、シグナム、ヴィー

タ、シヤマル。そして、二人に担がれた明久を伴って別ルートへと行った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はい、到着」

「到着ですうー！」

なのはとツヴァイが立て続けに言うのと、フォワード陣は軽く周囲を見回した
到着した場所は、静かな湖畔だった

そして、背後には大きなロッジがあり、それが誰かの別荘というのはすぐに分かった
「わあ……綺麗……」

「雰囲気的には、ミッドの少し田舎と変わらないわね」

「空気も澄んでます……」

「フェイトさん、ここは……？」

エリオが問い掛けると、フェイトが微笑みながら

「ここは私たちの友達が所有してる別荘地なんだ」

と答えた

その時、坂道を一台の車が走ってきた

「あ、車は有るんだ」

「文化レベルBだと、飛行機もあるよ」

ティアナの言葉になのはが答えた直後、車は少し離れた所で止まった

そして、中から現れたのはショートカットにした赤みがかつた金髪が特徴の美少女
だった

「なのは！ フェイト！」

「アリサ！」

「アリサちゃん！」

車の中から現れた美少女

アリサ・バニングスを見て、なのはとフェイトは嬉しそうに駆け寄った

「ニヤハハ！ 久しぶり、アリサちゃん！」

「アリサ、久しぶり」

「本当に久しぶりじゃない！ もっと連絡位してきなさいよー！」

三人は久しぶりの再会ゆえか、しばらくはキヤイキヤイと話し合った

その光景を見て、フォワード陣はポカーンとするが、三人は気にしないで話し合った

すると、アリサが

「で、明久はどこよ？」

と問い掛けた

すると、問い掛けられた二人は苦笑いを浮かべて

「えつと……」

「さつき別ルートで向かったから……」

と気まずそうにしていると、ツヴァイがトコトコと歩み寄ってきて

「すずかさんの所に向かったです！」

と言った

するとアリサは、どこか遠い目をしながら

「ああ……すずかの所かあ……」

と呟いた

どうやら、どうなるか予想したらしい

そして、両手を合わせると

「明久……無事で……」

と祈った

その頃、別ルートのはやて達の方は……

「ちよつ！ これはまさか、忍さん印の!？」

「明久くん……なんでいきなり逃げるのかなあ？」

そこではなぜか、明久が地中から伸びている機械に捕まっていた

しかも、その近くには腰辺りまで伸びた紫色の髪が特徴の美少女

月村すずかが、怖い笑顔を浮かべていた

その光景を見て、はやて達は苦笑いを浮かべていた

ちなみに、起きた事を書く以下通りである

1、到着。場所は猫屋敷として有名な月村家の庭

2、はやて達が到着したことに気づいて、すずかが駆け寄ってきた

3、久しぶりの再会故に、会話に華が咲く

4、すずかがはやてに、明久が何処に居るのか問い掛ける

5、はやてが指し示そうとしたら、バインドから脱出して逃走していた

6、すずかが何処から取り出したスイッチを押したら、地中から機械のアームが伸びて、明久を捕まえた

7、捕まえた明久に、怖い笑顔のすずかが迫ってる↑今ここ

「いや、なんか、嫌な予感がしてね？　なんか、とんでもない歓迎をされそうだからね、とりあえず、解放してもらえたら、大変嬉しいなあ……なんて？」

明久がそう言うと、ニコニコと笑っていたすずかが明久の頬に手を当てて

「い・や♪」

「ですよねー……………」

すずかの言葉に明久が答えた直後、明久の悲鳴が轟いたのだった

搜索開始

到着して数十分後、なのは達は幼なじみたるアリサと話し終わると、コテージに入つて会議を始めた

「今回のターゲットのロストログアの反応が確認されたのは……ここ……ここ……そして
ハハハ」

「……移動してますね」

なのはが地図を指差しながら説明すると、ティアナが顎に手を当てながら呟いた
ティアナの言葉を聞いて、なのはは頷いてから

「うん……誰かが持つてるのか、自立行動が出来るのかは分からないけど、早急に見つけよう。基本的に魔力を保持してる人は居ないけど、私みたいな人が居るかもしれないから」

と言った

「……はい！……」

フォワード陣の返事を聞いて、なのはは満足そうに頷いて

「それじゃあ、はやて達がまだ来てないけど、先に出発しよう……」

とフェイトが言いかけた時、ドアが開いて

「ごめんなあ、遅くなつたわ」

とはやて達が入ってきた

「あ、はやてちゃ……」

はやて達が入ってきたのを見て、なのは達は思わず固まった
すると、フェイトが苦笑いを浮かべながら

「えっと……明久に何があつたの？」

とリインフォース・アインスに担がれている明久を指差した

しかも、担がれている明久は、かなりグツタリとしている

「聞かないでやれ……」

「あれは、思い出させない方がマシだ」

ヴィータとシグナムが立って続けに言うと、なぜか明久がカタカタと震えていた

それを見て、なのはとフェイトの二人は無言で頷いた

そして、気を取り直して

「それじゃあ、出発するよ」

「行動は決めた通りにね」

と二人が言うと、フォワード陣は立ち上がって

「「はい！」」

と返事した

そして、戻ってきたはやて達はコテージに司令部機能を付加させるために機器類を置くことになった

なお、シグナムとヴィータの二人はそれぞれ、サーチャーを空中に散布することになった

そして気絶してる明久だが、しばらく放置が決定

とはいえ、一応アインスが近くで待機することになったが

そして、なのは達がサーチャーを街中に設置してる間に明久は復活

機器類の設置を終えたはやてと一緒に、なのは達の為に料理をすることに

尚、食材に関しては明久が気絶してる間にアリサとすずかが大量に買ってきてくれた
「しっかし、明久君。明久君の料理は相変わらず凄いなあ」

はやてと明久が料理していると、はやてが明久の料理の手際の良さを見てそう言った
「いやいや、はやてこそ凄いじゃん」

明久がそう言うのと、はやては首を振って

「いやあ、明久君に比べたら見劣りするで？ しかも、明久君は男やんか」
と言った

「いやあ、必要に駆られて覚えたんだよね。はやてだつてそうでしょ？」
明久がそう言うのと、はやては苦笑いを浮かべて

「まあ、そうやね」

と肯定した

すると、シヤマルが近づいてきて

「何か、お手伝いすることある？」

と聞くが、二人は同時に首を振りながら

「ない！」

と断言した

「そんなあ……」

シヤマルがシクシクと泣いていると、明久が

「僕が覚えてる限り、シヤマルさん、料理がダメじゃないですか」

と言った

すると、シヤマルは両手をブンブンと振りながら

「違うもん！ シヤマル先生、お料理下手なんかじゃないもん！」

シヤマルが涙ながらに抗議するが、はやては乾いた笑いしか出なかつた

その時、はやての携帯が鳴った

「ほいほい、はやてちゃんですー！」

はやてはかなり軽い調子で出た

「うん、うん……そかそか、無事に終わったんやね。なら……え、翠屋に？　お、ええんか?!　ほな、お願いなあ！」

はやては喋り終わったのか、携帯を仕舞った

「はやて、今のは誰から？」

明久が問い掛けると、はやてはニコニコと笑みを浮かべながら

「ん？　なのはちゃんからや。サーチャー仕掛け終わったんで、翠屋に寄ってお土産にケーキを買ってきてくれるって」

はやての説明を聞いて、シャマルが手をポンと叩いて

「あらー！　翠屋のケーキが食べられるんですね！」

と嬉しそうに語った

「桃子さんのケーキかあ……感覚としたら、二年振りなんだけど」

明久はそう言いながら、料理を続けた

しかし、ふと脳裏に

（あれ？　なんか、嫌な予感がするよ？）

と嫌な予感がした

そして、その予感は当たることになるのだが、明久は知らない

臨死体験

「だから、お姉ちゃんは料理しちゃダメって言ったでしょ!？」

「あ、あれー？ お母さんから、最近はマシになったって言われたんだけど……」

なのはに怒られて首を傾げているのは、眼鏡を掛けて長い茶髪を三つ編みにした若い女性だった

彼女の名前は、高町たかまち美由希みゆき

なのはの姉である

「明久！ しつかりして、明久!？」

「アカン！ 白眼剥いとる！ シヤマル！」

「は、はい！」

高町姉妹から少し離れた所では、明久が白眼を剥いてグツタリとしており、フェイトは明久に呼び掛けて、はやてはシヤマルに治療するように指示を出していた

「やべえ、シヤマルと同類が居た……」

「いや、湖の騎士よりかは幾分かマシだ」

「どつちにしろ、危険には変わらない」

と会話しているのは、少し離れた場所で新人達に離れるように指示していたヴィー
タ、アインス、シグナムの三人である

なぜ、こんなことになっているのか

理由は、少しばかり時間を遡る

今から約二時間と少し前に、新人達がコテージに帰還

その少し後に、一台の車が到着

その車から降りてきたのは、アリサとすずか

更に、美由希とフェイトの義姉のエイミー・ハラウンとフェイトの使い魔

アルフだった

そのメンバーが集まったので、全員で食事をしながら自己紹介をする流れになった

そこまでは普通だった

だが、美由希が明久に

『ちよつと味見してほしいんだけど』

と言って、手作りのクッキーを渡したのである

これに対して、明久は最初は尻込みした

何故かと言うと、美由希もかなり料理が下手なのを明久は知っていたからだ

その酷さと言うと、過去に同じようにクツキーを食べたら、一週間意識不明になったのである

それを覚えていたので、明久は躊躇った

すると、美由希が手をパタパタと振りながら

『お母さんから、最近は大分マシになったって言われたから、大丈夫だよ』

と言い、それを聞いた明久は安堵したのだ

なのはと美由希の母

高町桃子は一流のパティシエである
たかまちももこ

その桃子がマシになったと言ったのなら、大丈夫だろう

明久はそう判断して、なのはが止める暇も無くクツキーを食べた

そして意識を失い、冒頭に戻る訳である

「確かにお母さんはそう言ってたけど、お姉ちゃんは一週間に一回は爆弾を作るじゃない
！」

「いやあ、今回は大丈夫かなあって……」

「どうやら、明久はその三分の一を引いたようである

「シヤマル！ 解毒や！」

「やってます！」

「主、お湯とタオルです」

はやては指示を出し、シヤマルはその指示に従って治療
アインズがその補佐へと回っていた

「あ、お爺ちゃん？ 今そつちに……」

「行かないで！」

明久が不穏な言葉を言うのと、フェイトは思わず叫んだ

そんな光景を見て、残っていたメンバーは

「明久さん。大丈夫なんでしょうか？」

「だ、大丈夫だと思うよ？」

キャロとエリオは冷や汗を流し

「うーん……このクツキーも危ないかなあ？」

「置いときなさい」

スバルは美由希から貰ったクツキーを見て不安がり、ティアナが置くように指示

「美由希さん。相変わらなずみたいだね」

「普通に料理が出来て良かったわ」

すずかとアリサは慣れているのか、慌てていない

「ねえ、アルフ。私は大丈夫だよね？」

「エイミイのご飯は美味しいぞ！」

エイミイは不安がってアルフに問い掛けて、アルフは満面の笑みで答えた
「ガフツ！ ハツ!? 僕は一体なにを？」

「良かった……意識が戻ったわ」

「良かった……」

明久が意識を取り戻すと、はやて達は安堵して座り込んだ
こうして、食事は無事(?)に終わった

お風呂へ

「いらっしやいませ！ 海鳴スパラクーア2へようこ……団体様ですか？」

と頬をひきつらせて言ったのは、海鳴市にある温泉施設

海鳴スパラクーア2の受付嬢である

しかし、頬をひきつらせるのも仕方なしだろう

今入り口から入ってきたのは、男女合わせて約二十人の団体だったからだ

そして、その団体の責任者

機動六課隊長の八神はやては、頷いて

「はい。大人が14人の子供が……三人です」

と答えた

なぜ、はやて達がここに居るのか

はやて達は食事が終わると、お風呂に入ることにした

だが、はやて達が拠点にした別荘地には、お風呂が無いらしい

だから、海鳴市にある唯一の温泉施設

海鳴スパラクーア2に来たのだ

「お会計しとくから、先に中に入ってたな」

はやてにそう言われて、なのは達は入り口から中に入った

ドアから入ると、大きい広間に出た

どうやら自由空間らしく、マッサージ機や自動販売機やらが並んでいる

そしてその奥に、二つの入り口があつてそれぞれ、男と女、という暖簾が掛かっている

それを見て、エリオが安心した様子で

「良かった……入り口は別々だ」

と言った

すると、エリオの発言を聞いたのかキャロが

「え……エリオ君。一緒に入らないの？」

と残念そうに、エリオを見た

それに続くように、フエイトが

「そうだよ……エリオと一緒にになったの久しぶりなんだし……一緒に入りたくないなあ」

と言った

それを聞いて、エリオは顔を真っ赤にして

「い、いや！ 僕だってもう10歳だし！」

と反論を開始した

すると、キャロが入り口にある看板を指差して

「エリオ君。注意書きの一番下、読んでみて？」

と言った

それに首を傾げつつ、エリオはキャロに言われた通りに

「えっと……男女共に、お子様の混浴は11歳までとなっております……っ!?」

注意書きを読んで、顔を蒼白にした

「エリオ君、10歳♪」

そう

注意書き通りならば、エリオは混浴しても問題ないのである

それを理解したから、エリオは慌てた様子で

「だ、だって、スバルさんやティアナさん。なのはさんやアリスさんですかさん。美由希

さん達が居ますし！」

と救援を求めてか、周囲に居る女性メンバーに視線を向けた

しかし、他の女性メンバーは気にした様子もなく

「私は気にしないわよ？」

とティアナ

「というか、前々から、頭を洗ってあげようか？　って聞いたじゃん」

とはスバル

「ん？　私は気にしないよ？　カレルやリエラと一緒に入ってるし」

とはエイミー

「ん？　気にしない、気にしない」

と美由希

「私達も問題ないわよ。ねえ？」

「うん」

とアリサとすずか

「仲良く入れば、いいんじゃないかな？」

とはなのは

シヤマルを除いたボルケンリッター達は、同情の視線をエリオに向けていた

気付いたら、エリオの退路はほとんど無くなっていた

その事態に気付き、エリオはガタガタと震えた

しかしそんなエリオに、救いの手が差し伸べられた

「まあまあ、そこまでにしとこうよ……エリオ君はしっかり者だから、恥ずかしいんだと思っよう？」

苦笑いを浮かべた明久は、そう言いながらエリオの肩に手を置いた

明久の言葉を聞いて、エリオは明久を救世主を見るような目で見上げた

「それに、男湯に僕一人つてのも寂しいから、一緒にいらさせてね」

と明久が言うと、エリオはコクコクと頷いてから

「そうですね！一緒に入りましょう！」

と言つてから、明久の手を掴んで

「それでは、僕達はこれで！」

と言うと、男湯へと駆け込んだ

引つ張られていた明久は、苦笑いを浮かべながら手を振つていた

それを見送つたフェイトは不満そうにしているが、なのはがそんなフェイトの肩を叩

いて

「ほらほら、フェイトちゃん。早く入るよ。あんまり時間無いんだから」

と言つたタイミングで、はやてが合流した

「お？皆待つててくれたんか？」

はやてがそう問い掛けると、シグナムが

「結果的にそうなたただけですが……」

と答えた

シグナムの答えを聞いて、はやてはキョトンとしながら

「おろ、そうなんか？ まあ、ええわ。ほな、入ろうか」

と入ることを促した

それにリインが賛同の声を上げると、ゾロゾロ入っていった

だが、キャラは一人注意書きの書いてある看板を見ながら

「あれ、もしかして……？」

と、何かに気付いた様子だった

そして全員に遅れる形で、中に入っていった

そして、トラブルは起きる

温泉トラブルと蜃気楼

「エリオ！　なんでそんなに恥ずかしがるの!？」

「察してくださいー!」

というやりとりをしているのは、フェイト・T・ハラオウンと彼女が保護責任者となっているエリオ・モンディアルである

そしてそんな二人が居るのは、温泉施設スパクーアIIの混浴露天風呂である

ここまでの経緯を簡単に説明すると

1、明久とエリオがロッカーで服を脱いでいたら、キャロが男湯側に来た（規則上は問題なし）

2、キャロがそのまま一緒に入ることになり、明久が二人の頭を洗い慕われた（兄さん呼び）

3、体も洗い終わって入浴したら、エリオとキャロの二人が露天風呂に向かって、そこに来たフェイトに見つかった

4、エリオと一緒に入りたいフェイトに捕まり、女湯へと連れていかれそうになっている（エリオは岩に必死に捕まって耐えている）↑今ここ

なお、キャロは嬉々として女湯へと向かった

(どうしよう！ このままじゃ、フエイトさんに女湯に連れていかれる！)

エリオは岩に必死に捕まりながら、どうすれば助かるか考えた

その時、エリオの脳裏に明久の姿が浮かんだ

(そうだ！ 明久兄さんに助けを求めればいいんだ！ 明久兄さん！)

(ん？ エリオ、どうしたの？)

エリオが念話で呼び掛けると、明久から即座に返事が返ってきた

(お願いします！ 今すぐ露天風呂に来て、僕を助けてください！)

(……イマイチ何が起きてるのか分からなけど、今から行くね)

(頼みます！)

こうして念話している間にも、エリオはフエイトに引つ張られていた

それをエリオは、身体強化を使って必死に耐えていた

そして、助けを求めてから数十秒後だった

「エリオー、一体何が……」

と明久が現れた

「あ、明久兄さん！」

エリオは嬉しそうにするが、あまりにも状況が悪かった

まず、ここは温泉施設なので当然ながら裸である

しかも、フェイトはエリオを引っ張っていたので、胸元を隠してるわけがない
明久も同様に、マナーとしてタオル等は付けていない

そういった状況が重なり、明久とフェイトは固まった

「あ、明久……」

「や、やつほ……フェイト……」

フェイトが名前を呼んだので、とりあえず明久は気まずい雰囲気ながらも返事をした
だがその直後から、フェイトは顔を真っ赤にしてエリオから手を離れた

その直後、エリオは一目散に男湯へと逃げた

だがフェイトはエリオに気づかず、そのまま右手を高々と掲げた
すると、そのフェイトの右手に魔力球が精製された

その直後、明久は左手が掲げて

「よし待とう、フェイト。落ち着こう！ これは不幸な事故なんだ！」
と慌てて説得を試みるが、フェイトは恥ずかしさから顔を真っ赤にしたまま黙って

た

（あ、終わった……）

明久がそう思った直後

「明久の……エッチ……」

とフェイトは叫びながら、魔力球を明久へと全力投球した

「不幸だー！」

魔力球の直撃を受けた明久の叫び声が轟き、エリオは男湯の湯船で明久へと申し訳無さすぎて、心中で謝り続けた

なお、明久とフェイトの二人は気づいていなかったのだが、双方の露天風呂への出入り口の看板には

《この先混浴となつてますので、タオル等を巻いてご入浴ください》

という注意書きがあつたのだ

それに気づかなかつた二人にも、原因はある

この後、フェイトの声が聞こえたなのは達が駆け付け、気絶していた明久はヴィータとアルフの二人によって男湯へと戻された

そして数十分後、スパラクアIIから出た時にサーチャーが件のロストロギアの魔力を検知

封印へと向かつた

そしてフォワード陣の活躍により、確保に成功した

そして、そのロストロギアに対してフォワード陣のキャロとティアナの二人が封印作

業をしているのを、明久、なのは、フェイトの三人が見ていた

「懐かしいなあ……ジュエルシードの封印を思い出すよ」

「にやはは、そうだね」

「うん、懐かしい……」

明久の懐かしむような言葉に、なのはとフェイトは同意した

「そういえば、ユーノはどうしてるの？」

「あ、明久は知らなかったっけ。ユーノね、無限書庫の司書長になったよ」

明久の疑問に対してフェイトが答え、なのはが同意するように頷いた

すると、明久は感心した様子で

「はあー……凄いなあ……僕達の中で、一番出世してない？」

と言った

「うん。私は戦技教導隊の一等空尉だし、フェイトちゃんは執務官だもん」

「はやてが二等陸佐だけど、ユーノが一番出世してるね」

明久の疑問に二人が返したタイミングで、ティアナとキヤロの二人が封印作業を終え

たらしい

『なのはさん。封印作業終わりました！』

通信ウィンドウが開き、ティアナから報告がされた

「了解。それじゃあ、護送しよう……」

となのはが撤収を指示しようとした時、その場の全員の耳にトーン……という音が聞こえた

その音を聞いて、ティアナ、スバル、明久の三人は緊張した表情を浮かべた

〈明久、八相だ!〉

カイトのその言葉を聞いて、明久は頷いてから

「なのは、早く離脱を……!」

と離脱するように促そうとしたが次の瞬間、一瞬にして空間が変わった

先ほどまで居た河原ではなく、まるでどこかの遺跡を彷彿させる場所へと

「遅かったか……っ!」

「えっ!」

「何が起きたの!」

「なんだ!」

「何が起きやがった!」

明久は悔しそうに、なのは達を驚愕の表情を浮かべた

視線を下に向ければ、フォワード陣の四人は件のロストログアを入れた箱を守るように背中合わせで布陣している

〈適合地形、該当なし〉

〈現在地、把握不可能です〉

バルディツシユとレイジングハートが立て続けに告げるが、それはなのは達にも分かっていて

なのは達は10年という時の間に、様々な世界を巡り続けた

だが、そんな彼女たちの記憶にも、今居る遺跡には見覚えはなかった

〈黄昏空間に取り込まれた……〉

というカイトが漏らした

「黄昏空間？」

「カイト、知ってるの？」

〈八相が独自に用いる、戦闘用空間……固有結界とも呼ばれてる……来るよ！〉

カイトがそう言った直後、全員を途轍もないプレッシャーが襲った

なのは達は何とか耐えているが、フォワード陣は全員、生きた心地がしなかった

「っ！」

明久はいち早く、プレッシャーの発生源に視線を向けた

そこに居たのは、キャロと似た意匠の白い服を着た同い年位の少女だった

〈あれは……イニス！〉

カイトがその名を呼んだ直後、
戦闘は開始された

開眼

白い帽子を被った少女は、その手に禍々しい霧囲気を放つ杖を持っていた

その霧囲気に感化されて、フォワード陣は身構えた

次の瞬間、その少女の周囲に巨大な犬が三体现れた

「召喚!?」でも、魔法陣が展開されてなかったの!?」

「なんで!」

召喚術者であるキャロは驚愕し、キャロの召喚魔法を知っているエリオも驚いた声には出していなかったものの、スバルとティアナも驚いていた

ほとんどの魔法では兆候として、足下に魔法陣が展開される

それは、キャロのような召喚魔法もそうである

例外としては、長時間発動する飛行魔法や一部砲撃魔法くらいだ

だが、白い帽子を被った少女はそういった兆候も無く、三体の巨大な犬を召喚した
そして、相手の霧囲気から敵だと認識して、フォワード陣は身構えた

次の瞬間

「皆、離れて!」

と上から声が聞こえて、フォワード陣は反射的に大きく後ろに距離を取った

その直後

ランセオル・ルフ
「雷帝招来！」

と詠唱らしき言葉が聞こえて、三体の巨大な犬と少女に対して数十本もの雷が降り注いだ

犬は消えたものの、少女は無傷だった

先ほど降り注いだ雷からは、膨大な魔力を感じた

一発一発が、とてつもない威力を有しているのは容易に分かった

だが、それを少女は容易く受けきった

それだけでも、フォワード陣にとっては恐怖だった

すると、フォワード陣の前に明久が降り立って

「皆は下がって!!」

と言いながら、双剣を抜いて少女に切りかかった

「はあっ！」

気合い一閃

明久は素早く連撃を叩き込むが、少女は全て杖で防ぎきった

それでも明久は連撃を繰り返すが、少女は全て防御

そして、一瞬の隙を突いて杖で明久を突き飛ばした

明久が飛ばした直後、少女は杖で地面をトンつと叩いた

その数瞬後、明久の居た地点に十数個の岩が殺到

土煙が舞い上がった

「明久兄さん!?!」

エリオとキャロが驚いて叫ぶが、その直後に土煙は強風によって晴れた

そして、明久はその身に蒼炎を纏っていた

その姿は、あのリニアトレインで自分達を襲撃してきた敵と瓜二つだった

「なっ!?!」

「明久兄さんが、蒼炎!?!」

エリオとキャロが叫び、ティアナが絶句していると

「あー!?!」

とスバルが叫んだ

「うっさいわよ、バカスバル! いきなりなによ?」

ティアナが驚きながらも問い掛けると、スバルは

「思い出した! 吉井明久上等空士って、昔命令違反をして降格処分を受けた局員だよ

!!」

と語り出した

「ええっ!? それ本当なの?」

今居る場所が戦場だということも忘れて、ティアナはスバルに問い掛けた

「うん! かなり前だけど、雑誌にも載ってた! 確かその時に、なのはさんも怪我を負って、吉井明久上等空士はM I Aになったって書いてあった!」

「M I Aになった吉井明久上等空士が、帰ってきただけでなく、六課に配属された……?」

スバルの説明を聞いてティアナが黙考していると、フォワード陣の横に明久が転がるように現れて

「何喋ってるの! 早く下がって!!」

と怒鳴って、エリオに直撃しそうだった攻撃を弾いた

その命令に従っていいのか迷っていると、なのはが着地してきて

「皆、アキ君の言うことを聞いて!!」

と言いながら、砲撃を放った

「で、ですが……」

ティアナが言いよんどんでいると、続いてフェイトが現れて

「あれは、多分古代魔法に関係してる! 明久の判断に従って!!」

と告げた

フェイトの言葉を聞いて、フォワード陣は納得した

古代魔法は、今となっては失われた魔法だ

そして、管理局に多く所属している局員の中でも、使い手は明久だけだろう

ならば、その明久の言葉に従うのは通りだ

フォワード陣はそう判断すると、一斉に下がって物陰に隠れた

なのはとフェイトはフォワード陣が下がったのを確認すると、顔を見合わせてから

「スバルが知ってたなんて、予想外だったなあ……」

「もう、何年も前だからね……覚えてる人の方が少ない筈だけど……」

と呟いてから、明久と少女の戦いに視線を向けた

明久と少女の戦いは、傍目には五分のように見える

しかし、明久の攻撃は有効打にならず、少女はあの召喚魔法で次々と新しい召喚獣を

呼び出しては明久にけしかけている

明久はその召喚獣を倒そうとするが、その隙を突いて少女が魔法を繰り出している

手数が足りないのだ

もちろん、なのはとフェイトは手助けするが、それは召喚獣によって防がれている

しかも、二人の攻撃が直撃してようやく一体倒せる位だ

相性が悪いのか、理由は二人にも分からない

だが、このままでは明久が倒されるのも時間の問題だということは分かる

「つ……一体、どうすれば……!!」

フェイトがそう歯噛みした時だった

〈呼べ、我を……〉

と頭の中で声が聞こえた

その声を聞いて、フェイトは思わず

「バルデイツシュ、何か言った？」

と愛機に問い掛けた

だが、愛機バルデイツシュから返ってきたのは

〈いえ、何も言ってません。主〉

という、否定の言葉だった

気のせいだったのか、とフェイトが首を傾げていると

「フェイトちゃん、どうしたの？」

となのはが砲撃しながら、フェイトに問い掛けた

「ううん、なんでも……」

とフェイトが言いかけた、その時

〈呼べ、我を……!〉

という、あの声が再び聞こえた

訳が分からず、フェイトは固まった

そして、ある一つの存在が脳裏に浮かんだ

あのリニアトレインの時、自分の中に入ってきた一つの存在

その名は、確か……

「……スケイス？」

とその名前を呟いた直後、ドクンツと鼓動が跳ねて、フェイトは胸元を押さえながら体を曲げた

「かっ……はっ!？」

フェイトのその姿を見て、なのはは目を見開いて

「フェイトちゃん!? 大丈夫?! しっかりして!!」

と体を揺すりながら問い掛けるが、フェイトには答える余裕はなかった

体が熱くなり、体の中から強い衝動がほとばしった

闘争本能と破壊衝動

何よりも、自分が支配されるという恐怖が襲ってきた

必死にそれを抑え込もうとしたら、三度

〈呼べ、我を……!!〉

と催促する声が聞こえた

フェイトは直感に従って、姿勢を正しながら

「おいで……私は……ここに居る！」

と言いながら、バルディッシュを収納して右手を掲げて

「……スケイス!!」

と呼んだ

すると、その右手に一本の長い鎌が現れた

これが、フェイトの初めての開眼だった

そして、黄昏の碑文を巡る戦いは加速を始める

データドレイン

フェイトは右手に持った鎌を見て、直感的に悟った
(これなら、あの相手と互角に戦える！)

フェイトはそう思うと、鎌をクルクルと回した

なのはフェイトが持っている鎌を見て

「フェイトちゃん……その鎌はなに？」

と問い掛けた

するとフェイトは、その鎌を両手で持って構えて

「多分、古代魔法と関係がある武器なんだと思う」

と答えた

そして、今も戦っている明久を見て

「なのは、私は今から明久と一緒に戦ってくるね」

と言うと、持ち前の機動で突撃

明久に噛みつきこうとしていた犬を切り裂いた

「フェイト!？」

「明久！ 私も一緒に戦う！」

フエイトの言葉を聞いて、明久は何か言おうとしたが、フエイトの持つている鎌を見て辛そうな表情を浮かべた

（出きることなら、開眼しないではしかなかった！）

明久は、フエイトに適合した存在

《スケイス》の役割を知っていた

その役割がとも辛く、悲しいことを

「私が召喚獣を押さえるから、明久はそっちの子を！」

フエイトはそう言うと、目の敵へと斬りかかった

そして明久も、少しでも早くこの戦いを終わらせるために

フエイトに掛かる負担を、少しでも軽くするために

「ああああああ！」

明久は雄叫びを上げながら、両手に持った剣を高速で振るった

今まで複数で襲いかかっていた、明久に手傷を負わすことが出来なかったのだ

彼女一人で、明久に勝てるわけがなかった

一撃、また一撃と、明久の攻撃が少女に入っていた

それに焦りを感じたのか、少女は杖を大きく振るって、明久を遠ざけようとした

だが明久はそれを、最小限の動きで回避

そして、両手の双剣を叩き込んだ

その直後、何かが割れるような音が響き渡った

それを聞いた明久は、右手を突きだしながら

「カイト、腕輪！」

と叫んだ

すると、明久の右手手首の辺りに半透明の花弁のような物が展開した

それを見て、少女は逃げようとしたが、横合いからなのは砲撃が直撃して、バラン

スを崩した

その絶好のチャンスを、明久は見逃さなかった

「データ……ドレイン！」

明久がそう言った直後、右手手首の花弁から触手のような物が伸びて、少女を貫いた

そして数秒後、少女の姿は消えた

それに同調して、フェイトと交戦していた巨大な犬の姿が掻き消えた

伸びていた触手は一瞬にして縮み、明久の右手手首の花弁も消えた

そして気付けば、明久の右手掌の中には、あのリニアトレインの時にフェイトの中に

消えたのと同じ光の球体があった

「アキ君……終わったの?」

なのは近寄って問い掛けると、明久は頷いた

そして、戦闘が終わったのを感じたのだろう

隠れていたフォワード陣も駆け寄ってきた

そして、明久が取り出した黄昏の書にその球体を仕舞おうとした

だが、明久は眉をひそめた

「なんだ? 入らない?」

『まさかっ!?!』

明久が疑問の声を上げると、カイトが驚愕の声を上げた

その直後、光の球体が明久の右手から離れた

明久はその球体を捕まえようと手を伸ばしたが、球体は明久の手をすり抜けて飛んで

いった

そして、とある少女の前で止まった

龍を呼び操る、一人の幼い少女

キャロ・ル・ルシエの前に

最初、キャロは何が起きてるのか分からなかった

しかし、頭痛がしたのか頭を押さえて

「幻惑の蜃気楼……イニス？」

と呟いた

その数秒後、光の球体はキャロの胸部の中に消えた

最初、その場の全員が呆然としていた

しかし、いち早く復帰した明久が

「まさか、フェイト以外に適合者が現れるなんて……」

と呟いた

そして、黄昏の因子を巡る戦いは加速していく

帰還

イニススがキャロの中に消えて少しすると、黄昏空間は消えた
すると、通信画面が開いて

『良かった！ 無事だったんやな！』

とはやての声が響き渡った

「はやて……うん、なんとかね。件のロストログアも回収したよ」

フェイトがそう報告すると、はやては安心した表情で頷いて

『分かった。詳しい報告は、帰ってきてから聞くな』

と言うと、通信を切った

そして、フェイトはフォワード陣へと向いて

「それじゃあ、皆。戻ろうか」

と言った

しかし、フォワード陣はどこか納得してない様子で

「あの、吉井上等空士のことなんです……」

と明久に視線を向けた

すると、なのはが

「ごめんね。アキ君に関してはいくつか機密が関係して、今は話せないんだ」と言った

機密が関係すると言われては、フォワード陣も引き下がるしかなかった。不承不承といった感じではあるが、フォワード陣は下がった

するとフェイトが、小声で

「機密って?」

「今は、ここうするしかないと思って……それに、箝口令があるでしょ……?」
なのはの言葉を聞いて、フェイトは僅かに俯いた

あの雪の日のことで事実をねじ曲げられて報道されて、しかも降格処分

これには流石に当のなのはも納得出来ず、上層部に猛抗議した

しかしそれらは全て無視されて、箝口令が出された

命令されては、なのは達は従うしかなかった

しかし、はやてはチャンス虎視眈々と狙っているらしく、査察部のヴェロツサ・ア
コーズと独自に動いているようだ

もちろんのこと、はやてが動いたら、なのは達も協力は惜しまない

そうこうしている間に、なのは達とフォワード陣は拠点にしているペンションに帰還

はやてに報告した

「黄昏空間か……間違いないんやね、カイト？」

《うん。八相が戦うために使う異空間だよ。捕まったら最後、展開した八相を倒すしか出る方法はないね》

はやての問い掛けに対して、カイトはそう答えた

すると、それを引き継ぐように

「それと、実際に戦ったなのは達なら分かると思うけど。八相と戦えるのは、黄昏因子を有する保有者^{ホルダー}だけだよ」

と明久が説明した

すると、明久の説明を聞いたはやてが

「黄昏因子？」

と首を傾げた

「うん……八相である、スケイス、イニス、メイガス、フィドヘル、ゴレ、マハ、タル
ヴオス。そして、僕の蒼炎」

明久の説明を聞いて、はやて達は納得した様子で頷いた

その光景を見て、明久は心中で胸を撫で下ろした

明久はあえて、八相の最後の一つ

コルベニクを黙っていた

コルベニクは他の八相と違い、代々蒼炎の使い手に引き継がれる余りにも、その能力と代償が強すぎるから……

「とりあえず、件のロストログアは回収成功した……本当なら八相の事も地上本部に報告せなあかんが……八相のことは、まだ信用出きる人達だけに報告しようか」

はやてがそう言ったタイミングで、アインスがペンションの掃除が終わったことを告げにきた

それを聞いて、はやては部隊員達に帰還するために外に出るように命じた

外に出ると、そこにはペンションを貸してくれたアリサとすずか、美由希、エイミーが居た

「せめて一泊……つてわけには、いかないんだよね……」

「ごめんね、アリサ、すずか……」

「お仕事だもんね……でも、時々電話頂戴ね？」

「うん、必ずするね？」

と別れの会話をした

すると、アリサが明久に近寄ってきて

「明久。あんたは、また勝手に居なくならないでよね？　いいわね？」

と明久をビシッと、指差した

そんなアリサに、明久は苦笑を浮かべて

「うん、そうだね……」

と同意するように頷いたが、胸が痛かった

八相が独立稼働を始めている

それが、明久の脳内の警鐘を鳴らしていた

ふと気付くと、フェイトが明久に手を差し伸べていて

「帰ろう、明久」

微笑みを浮かべながら、そう言った

明久はフェイトが差し伸べていたその手を握ると、笑みを浮かべて

「うん、そうだね」

と頷いた

そして、機動六課メンバーはアリサやすずか達に見送られながら、帰還したのだった

黄昏因子は、黄昏因子を引き寄せる……

交替部隊、続

地球から帰還した翌日

機動六課に新しく数人、交代部隊の隊員がやってきた

一人は小柄で腰まで伸ばした軽いウェーブがある金髪が特徴の美少女

その右隣には、なのはや明久達と同じくらいの身長に前髪だけが赤いショートカットの黒髪が特徴の青年が居る

更には、顔立ちが良く似た赤い髪とピンク色の髪が特徴の姉妹

最後に、パーマが掛かった髪に少しくたびれた白衣が特徴の中年男性が居た

その人物達は机に座っていたはやての前に整列すると、最上級だからか、金髪の美少女が前に出てきて

「ユーリ・エーベルヴァイン三等空佐以下四名。本日ただ今を持ちまして、機動六課交代部隊の任務に就きます」

と告げた

すると、はやては真面目な表情で立ち上がり

「着任を確認しました。ユーリ・エーベルヴァイン三等空佐」

と返した

そして、苦笑いを浮かべて

「ユーリ。無茶させたみたいで、ごめんなあ」

と謝った

すると、ユーリは両手をパタパタと振って

「いえ、シユテルから理由を聞きましたから、急いでたというのは分かっていますよ。ただまあ……レヴィの報告書を纏めるのに、一番時間が掛かって……」

と言うと、苦い表情を浮かべた

それを聞いて、はやても苦笑いしか出来なかった

レヴィ・ラツセル一等空尉

自分から斬り込み隊長と言うだけあり、フェイトと同等の高速機動と高い身体能力を活かして、まるでどこぞの無双系ゲームと同じようにバツバツサと相手を風ぎ払うのだ

しかし、その反動というのか

細かい作業が出来ず、報告書といった書類仕事や調査等が大の苦手なのだ

だから、戦闘などの報告書はレヴィのデバイス

バルフィニカスに記録されている映像や音声記録から、シユテルかユーリが文章に起

こしているのだ

なおどういう訳か、バルフィニカスもレヴィと同じように少々おバカらしい
デバイスも、使い手に似るのだろうか？

閑話休題

話を戻して、どうやら今回はユーリが報告書を書き上げたらしい

しかし、今回はそれが難航

結果、全ての書類を纏めるのが大幅に遅れ、深夜までずれ込んだようだ

なお、ユーリも魔導師であり、特筆すべきはその桁外れの魔力量だ

その量はなんと、有史以来初というSSSランク

実質上の観測不能というEXランクだ

その桁外れの魔力量を用いた魔法の威力も、当然ながら桁外れに高い

大抵の違法魔導師ならば、一撃で無力化も出きる

しかし、そんなユーリが得意としているのははやてやディアーチェと同じ広範囲殲滅
系魔法である

一応、それ以外の魔法も有るにはある

しかし、彼女の桁外れに高い魔力と得意魔法

そこにユーリの性格が合わさり、ユーリが現場や前線に出る機会はかなり少ない

だから彼女は普段、後方からの支援を中心に行動している

戦闘管制や書類整理がそれだ

では、前線要員は三人だけか

と問われたら、それは違う

まず、アミテイエ・フローリアン一等空尉（通称アミタ）

彼女は近接戦闘を中心に、遠距離も隙なくこなす万能型である

そして、その妹

キリエ・フローリアン一等空尉

彼女も姉と同様に、近接を中心に遠距離もこなす万能型

最後に、ひのゆきむら火野幸村一等陸尉

彼は遠近両方をバランス良くこなす遊撃員だ

なお陸尉とは言ったが、空戦も出きるので、空尉が正しい

しかし、なぜ陸の魔導師免許を取ったのかは語らない（はやての予想では、めんどく

さかったからだと思われる）

そして、デИАーチエ達を含めたデバイスのメンテナンス係として、グランツ・フロ

リアン博士

以上が、ダークマテリアルの全隊員である

少数精鋭

それが、ダークマテリアルの骨子である

「さて、それじゃあ皆を部屋に案内せな……」

「はやて、明久はどこだ？」

はやての言葉に被せるように、幸村がそう言った

幸村の言葉に、はやては苦笑いを浮かべて

「ゆっきー、相変わらずやなあ」

と言った

実を言うと、幸村ははやて達と同じ地球の海鳴市出身なのである

だから実を言うと、はやては幸村も六課に誘おうとしたが、ディアーチェに拒否されていたのだ

閑話休題

「あいつ、何年間MIAになつてたんだ？ 心配掛けさせたんだ。一言文句言わないと気がすまない」

幸村がそう言うと、はやて達は苦笑を浮かべて

「明久君なら、食堂やなあ」

と答えた

「食堂？」

なぜ食堂に居るのか予想出来ず、幸村は首を傾げた

そして、数分後

「ほれ、あそこや」

とはやてはある一角を指差した

そこでは……

「シャマルさん、そこ違う！そこはこう！」

「ふえーん！明久君、厳しすぎー！」

明久が、シャマルに料理教室を実施していた

料理に関しては、明久は一切の妥協を許さないのだ

しかも、近くの机では

「ほう、明久は料理が上手なのだな」

「王様のに負けないくらい美味しい！」

「これは、美味ですね」

ディアーチェ達が、明久が作ったらしい料理を食べていた

なお、ディアーチェはかなりの料理上手で高級レストランに匹敵する

そのディアーチェが認めるのだから、明久の腕は本物だろう

その光景を見て、幸村は頬をひくつかせて
「いやあ……あそこに突撃する勇氣はないわ」

と言った

料理教室実施中の明久は、一切の妥協を許さず、横槍を入れようものなら、その人物が料理されかねない

それを熟知しているので、幸村は先に部屋に荷物を起きに行つたのだつた

なお、明久の料理教室が終わつたのはこれから数時間後で、シャマルは憔悴しきつていたことを明記しておく

それぞれの一日

地球から帰った二日後、機動六課は念のために一日休みとなった

特に、黄昏空間に取り込まれて戦いを間近で見たフォワード陣ははやての予想以上に魔力を消費していた

恐らくは、間近に現れたイニスのプレッシャーがそうさせたのだろう。というのが、明久の談である

とにかく、そんな状態では訓練も出来ないだろうと判断して、休みとしたのだ
そんな日に、明久は……

「ねえ、フェイト……一つ聞いていいかな？」

「な、なに？」

うつ伏せの明久が問い掛けると、運転席に居たフェイトは体を僅かに震わせた
そして、明久は

「なんで僕はこんな扱いで、車の後部座席に放り込まれてるのさー！」
と訴えた

今の明久の状態を言うならば、釣り上げられた魚だろう

体をバインドで拘束されて、車の後部座席でビチビチと暴れている

「あ、あはははは……」

明久の苦情を聞いて、フェイトは苦笑いを浮かべることしか出来なかった
なぜ明久がそんな扱いかと言うと、それは少し時を遡る

今朝、はやてが休日と決めた時だった

突如として

「そういえば、アキ君……私服が無かったなあ」

と呟いたのだ

それを聞いた瞬間、隊長格が集められていた部屋に、緊張が走った

すると、シャマルがどこからか箱を持ってきて

「第何回かはわすれたけど、アキ君との買い物決定くじ引き、始めます！」

と告げた

その直後、なのは、はやて、フェイトの三人は無言で箱の中からくじを引いた
そして、互いの顔を見て

「恨みつらみは無しやで？」

「わかつてるよ、はやてちゃん」

「正々堂々、一発勝負」

と言うと、くじを開いた

そして、フェイトが勝ち取ったのである

そこからは早かった

はやて、なのは、シヤマルの三人は幸村と談笑していた明久を見つけると、バインドで拘束

拉致つて、フェイトの車の後部座席に放り込んだのである

そして、今に至る

明久はバインドを外そうともがいているが、簡単に外れる訳がない

そんな状況なので、釣り上げられた魚状態なのだ

なお、カイトは手元には無い

今は久しぶりの戦闘後の損耗具合を確認するために、プレシアに預けている

そして、カイトを手放した明久は古代魔法を殆ど使えない

これは、古代魔法の複雑さにある

明久が過去に聞いた話し相手では、その複雑さは軽く倍らしい

今は失われし古代魔法

今の魔法たるミッド式やベルカ式より、よりオカルト面が強く、世界に干渉する魔法固有結界すらある

そこから古代魔法を研究していたプレシアは、古代魔法を

ザ・ワールド

と名付けた

話を戻して
閑話休題

フェイトが運転する車はカーブに差し掛かり、フェイトはハンドルを切った

それに伴って、座席シタの上で暴れてバタバタいた明久は、座席から落ちた

「あ痛っ!？」

顔面から落ちて、明久が悶絶していると

「明久、大丈夫？」

とフェイトが、バックミラーで後ろを確認しながら問い掛けた

それに対して、明久は呻きながら

「だったら、車を停めて、バインドを解除して」

「ごめん。今は無理かな」

明久の嘆願に、フェイトは申し訳なきように答えた

今車が走っているのは、機動六課隊舎のある埋め立て地とミッドを繋ぐ架け橋である
走ってる車の数は少ない（というか、フェイトの車しか見えない）が、この架け橋は

駐車禁止だ

時空管理局執務官として、自分が法律を破るわけにはいかない
そう思ったフェイトは、気持ち程度だが、車のスピードを上げた
早く目的地に到着させるために

なお、法定速度は守って（時空管理局執務官として、以下略）
あと、サメザメと泣く明久が可哀想になったから

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
休日の機動六課

だと言うのに、部屋で休まずにデータ閲覧室にて調べ物をする人影があつた
その人物

ティアナ・ランスターはパソコンを操作し、ある人物のことを調べていた
「……………あつた。吉井明久上等空士」

ティアナが探していたのは、明久のデータだった

「吉井明久上等空士……………新暦65年に嘱託魔導士として登録。三年後に正式に時空管理局に所属。空曹長となるが、その一年後の新暦69年の任務中に行方不明。翌日に捜索が行われたが、半日後終了。MIAと認定される……………半日で捜索終了了？」

ティアナはその早さに首を傾げた

ティアナが知る限り、普通は最低でも三日は捜索が行われるはずである

ティアナの亡くなった兄

ティード・ランスタアの時も、犯人の手掛かりを探したり、ティードの落とし物等を探すのに一週間やっていたのを知っている

しかし、明久の場合は僅か半日で終わっている

幾らなんでも、早すぎる

しかも、何処の管理・管理外世界かも、何があつたのかも書かれていない

「まるで、何か隠してみたい……」

ティアナはそう一人呟くと、更に読み進めた

「新暦75年、保護されて復帰。現在、機動六課出向扱い。本来は、時空管理局本局

………本局？ 確か、八神隊長も本局だったわね………何か、関係あるのかしら………」

ティアナはそう言いながら首を傾げ、更に読み進めようとした

だが、それ以上は無理だった

なぜならば、アクセス制限と表示されたからだ

「アクセス制限？ 階級での制限かしら………これ以上は無理ね」

ティアナはそう判断すると、検索画面を閉じた

そして、パソコンの電源を切った

そして、最後にポツリと

「……………やっぱり、凡人は私だけか……………」

と呟くと、部屋から出た

その時、ティアナの背後に黄色い服を着た長い髪の男の姿がうつすらと見えた……………

ホテル・アグスタ1

地球から戻って、数日後

機動六課はミッド郊外にある、ホテル・アグスタに来ていた

とはいえ、来た理由は休暇ではない

認可に他ならない

この日、ホテル・アグスタにて管理局が認可したロストログアを含めた物品のオークションが開催されるのだ

そのオークションに出品されるロストログアを、レリックと誤認してガジェットが襲撃してくるのが予測されたので、機動六課に警備任務の命令が下ったのだ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「ごらっしやいませ」

と言いながら頭を下げたのは、受付係を勤めていたホテルのボーイだった

今日ホテルに来るのは、警備任務を請け負った機動六課以外は招待客のみだ

ただし、世の中には不正に入ろうとする輩は必ず居る

だから、このボーイが居る受付では招待状の他に生態による認証を行っていた

その時、ボーイの視界に入ったのは招待状ではなく、管理局員を示す写真付きのICカードだった

「あつ……」

それに気付いたボーイが視線を上げると、見えたのは

「こんにちはあ。機動六課です」

とにこやかに微笑む、ドレス姿のはやて、フェイト、なのはの三人だった

この後、ボーイからの連絡でホテルのオーナーは機動六課が警備任務に就いたことを知る

しかし、なぜドレス姿なのか

これは、ホテル側からの要請だった

このホテル・アグスタはミッドでは高級ホテルとして知られている

当然ながら、宿泊客はドレスコードが必須項目だ

故に、ホテル内部

今回は招待客の視線がある場所では管理局員としてドレスかスーツの着用が求められたのだ

なお、機動六課が選ばれたのはこのドレスコードも理由だ

ホテル・アグスタでも通用するドレスorスーツとなると、かなり値が張る物となる

もし、それを人数が多い部隊の選ばれた人数分を用意すればどうなるか
それはお察しレベルだ

たつた一回しか着ないかもしれないのに、バカみたいな出費をする訳にはいかないの
だ

故に、元々少人数かつ、見目麗しい美少女が隊長の機動六課が選ばれたのだ
更に言うならば、誰だつてシワだらけのオジサンとオバサンよりも、美男美女が嬉し
いだろう

閑話休題

ホテル内に入った三人は、それぞれ決めた担当場所に向かった

そして、念話で

《やっぱり、結構隙間だらけだね》

《仕方ないよ。これでもセキュリティは高い方だけど、一級以上は想定外だし》

《だから、アタシらが呼ばれた訳や。気を引き締めてな》

と会話していた

そんな中、フェイトとなのはは一旦合流していた

「このシャッター……普通の金属製シャッターだね」

「だね……ガジェットのリザーは………保って20秒かな？」

二人が見ていたのは、入口のシャツターだった

そこが一番入りやすいので、ガジェットが浸入してくる可能性が高い

他に、物資搬入用の地下駐車場があるが、そちらは分厚いシャツターがある

しかも、表面には対熱処理や対斬撃処理がされてるらしい

そちらを突破するのは、ガジェットは一苦労だろう

しかも、何かしらの異常が起きたら、直ぐに近くの警備員に連絡が行く仕組みらしい

これならば、地下駐車スペースに居るシグナム達が動けるだろう

とはいえ、世の中に絶対は無い

そのことは、なのは達が一番知っている

「それじゃあ、私は二階に行くね」

「うん。私は会場を見てるね」

二人はそう言うのと、フェイトは階段を登り、なのはは近くのドアからオークション会場に入った

そして、二階に上がったフェイトは二階から外を見ながら

「バルデイツシュ、オークション開始までの時間は？」

と愛機に問い掛けた

《約一時間半です。主》

「分かった」

何時も通りに返してきた愛機の言葉に頷くと、フェイトは非常口の確認に向かった。フェイトはこの時気づかなかったが、今しがたフェイトが通った通路のある曲がり角に二人の男性が居たのだ。

「あれ？」

「どうしました、先生？」

金髪眼鏡の男性がフェイトを視線で追うと、正面に居た緑色の髪が特徴の男性が問い掛けた。

すると、金髪の男性は

「あ、いえ。なんでもないです」

と返した

場所は変わり、ホテルの外

そこでは、フォワード陣と明久が見回りをしていた

なお、交代部隊は非常出撃に備えて隊舎にて待機している

ちなみに、本当だったら明久もスーツを着てホテル内を警備する予定だった

だが、明久が頑なに拒んだのだ

理由は至って単純

明久がスーツを着たくないと思つたからだ
というか、明久としては知らなかつたのだ

このスーツ、はやてがドツキリで用意したのだ

その理由は単純

『面白いからっ!』

だそうだ

ちなみに、はやての座右の銘は

《面白い是最優先や!》

だそうだ

これを聞いて、明久は思わず

『あののんびりしてて、優しかつたはやては何処に行つたの……』

と落胆していた

閑話休題

そして明久は、一人で少し高い樹の上に立っていた

「ねえ、カイト……次は、何が来ると思う?」

《そうだね……メイガスだろうね。増殖のメイガス》

「やっぱりか……」

残る八相は五体

そして、八相は順番通りに表れる

スケイス

イニス

そして、三番目はメイガスなのだ

「上手く、戦うしかないか……」

明久はそう言うのと、樹の天辺から飛び降りて……

「ぎゃふっ!?!」

《明久、カッコ悪っ!?!》

着地にミスったのだった

交戦開始

「まったく……何をやったのよ、明久くん……はい、おしまい」

「面目ないです」

着地に失敗した明久は、シャマルから治療を受けた

呆れた様子で治療しながら、シャマルは周辺警戒をしていた

そして、明久の治療を終えた

その時だった

「ん……」

「来たわね」

と二人は同時に、ある方向を見た

その直後

『ロングアーチより各員に通達します！ ガジエツト出現！ 先行して、スターズ2と

ライトニング2が向かいました！ 現場での管制は、シャマル先生が執ります！』

通信ウインドウが開いて、シャーリーがそう告げた

それを聞いて、シャマルは一瞬にして白衣から騎士甲冑姿へと変わった

その時、明久とシャマルが居る屋上より少し低い屋根に、ティアナがワイヤーアンカーを使って登ってきて

「シャマル先生！ 私も状況が知りたいので、モニターを下さい！」
と言ってきた

それを聞いて、シャマルは頷いてから

「分かったわ、任せて」

と答えた

そして、自身のデバイスたるクラール・ヴィントに視線を向けて

「クラール・ヴィント、お願いね」

と告げた

シャマルのお願いを聞いて、クラール・ヴィントは短く了解と答えて、ティアナの前にモニターを表示した

この時、明久は

《はやて、ガジェットの接近を確認したよ。聞いたと思うけど、数は約50。ガジェットI型が主力で、小数だけどIII型を確認したよ》

とはやてに、念話で報告していた

《分かった。アキ君は念の為に待機しててな。フォワード陣が危なくなったら、フォ

ロー頼むな

《分かった》

はやての指示に従い、明久はバリアジャケットを展開したが、その場で座った
ただし、何時でも動けるようにはしていた

その証拠に、双剣は丁度手の位置に

それだけでなく、腰には円筒

武器收容筒があつた

その武器收容筒の中は空間魔法で無制限に武器が收容出来、使い手が手を入れて欲しい武器をイメージするだけで取り出せる代物だつた

明久は主に双剣を使っているが、他にも使える

双剣、両手大剣、片手直剣、鎌、銃、鉄扇、刀、鎗（棒）

しかし、それら全てを持ったら動きが制限されてしまう

故に、普段は武器收容筒の中に仕舞っておくのだ

以上、説明終了

森の中では、シグナムとヴィータ。獣形態のザファイラがガジェット相手に戦っている
戦況は優勢で、このままならば勝つのも時間の問題だと思っていた

だがその時、魔法によって強化された明久の目が、それを捉えた
掌サイズの銀色の存在

姿形的に、自然界の生き物ではなかった

即ち

「召喚生物……見た目的に、召喚蟲つてところかな？」

敵の増援だった

しかし、サイズ的には大した戦闘力は無さそうだった

危険性が高いのは、羽を使った首への斬撃くらいか

明久はそう思い、シグナム達に警告を発しようとした

その直後、その召喚蟲がガジェットと融合したのだ

「えっ？」

その光景に驚いていると、戦況が一気に変わった

今まで撃破されていたガジェット群の動きが、急激に良くなったのだ

シグナムの斬撃をアームを使って受け止めて、ヴィータの鉄球を回避したのだ

その光景を見て、明久は先ほどの召喚蟲の役割に気付いた

「しまった！ さっきの蟲は、アンテナの役割だったのか!!」

しかし、気付いても時既に遅かった

シグナム、ヴィータ、ザフィーラの三人と交戦していたガジェット群は、陣形を組んで、三人の足止めを開始

それとほぼ同時に、フォワード陣のすぐ前方に魔法陣が展開

そこから新たに、約二十程のガジェットが姿を現したのだ

「転移魔法……相手に、召喚魔導師が居る！」

召喚魔導師

それは、その名前の通りに召喚魔法を扱う魔導師だ

自分と契約してくれた生物を呼び出し、自身を守ったり探索させたり、相手を攻撃出来るのだ

なお、キャラがこの召喚魔導師に当たる

キャラは龍の召喚だが、今回の相手は察するに蟲系と契約しているのだろう

しかし、召喚魔導師が使うのは、何も召喚魔法だけでは無い

召喚魔導師は、転移魔法のエキスパートでもあるのだ

そもそも、召喚魔法というのは契約した存在を、距離を越えて呼び出すのだ

契約した生物の中には、普段は特殊な環境に住んでる生物もいる

そういった生物は、違う星に棲息しているのがザラである

つまり召喚魔法というのは、惑星間転移魔法とも言える魔法なのだ

そんな惑星間転移魔法の出力を下げれば、普通の転移魔法としても使えるのだ
それによるガジェットの転移

それと合わせて、ガジェットの遠隔操作

その二つにより、フォワード陣は押され始めた

それを見た明久は、双剣を掴みながら立ち上がりつつ

「シャマル先生。シャマル先生は、はやてに相手に新手が現れたことを伝えてください。
召喚魔導師だと」

「分かったわ。明久君は、カバーに？」

シャマルの問い掛けに明久は頷き、屋上から飛び降りた（今度は、普通に着地）

そして、走りながら双剣を武器収容筒に仕舞って

「カイト！」

《了解、何時でも！》

と全力で戦う準備をして、フォワード陣のフォローに向かった

そして、明久は右手に片手直剣

左手に鎌を保持した

そして

「シイッ！」

短い呼気と共に、片手直剣でエリオを叩こうとしていたガジェットⅢ型のアームを叩き斬った

そして、戦闘は加速していく

預言者

明久が参入したことにより、フォワード陣は態勢の立て直しに成功

フォワード陣は後退戦闘を開始した

だが、ティアナが

「後退ばかりでは、敵にやられてしまいます！　こちらから、打って出ないと！」

と血気盛んに、攻撃を開始

スバルに念話で指示したらしく、コンビネーションを開始した

ティアナとスバルの二人は訓練生時代からの付き合いで、その訓練生時代や少し前ま

で所属していた救助部隊時に幾つものコンビネーションを考案、実行

そのコンビネーションに絶大な自信を持っていた

そして、何よりも焦っていたのだ

周囲との差を感じて

『無茶だよ、ティアナ！　カートリッジの四発ロードなんて!?!』

「ヴイータ達との合流を待って！」

「やれますー！」

シャーリーと明久の忠告をそう説き伏せると、ティアナは魔法を発動させた

放たれた魔力弾は、次々とガジェットを破壊

それを逃れたガジェットは、スバルがその格闘で破壊した

だが、その途中で明久は気付いた

一機のガジェットⅢ型がスバルの後方に陣取ったのを

しかも、スバルを狙うのではなく、ティアナに狙うように布陣したのだ

それをティアナは、半ば反射的に撃ち抜いた

だが、その先には無防備に背を晒すスバルの姿があつた

爆発音に気付いたスバルが振り向くと、見えたのは自分に迫るティアナの魔力弾だつ

た

ティアナも気付いたが、もはや軌道を逸らすのも間に合わない

ヴィータの姿も見えたが、そのフォローも間に合わない

その時だった

一本の大剣が飛来し、その魔力弾を防いだのだ

到着したヴィータは、その大剣の持ち主を知っていた

「アキー！ 助かった！」

ヴィータは感謝の言葉を口にすると、ティアナを見て

「ティアナ！」

とティアナを怒ろうとした

たが

「待つて、ヴィータ！　今回は相手が一枚上手だったんだ！」

と明久が止めた

「一機のガジェットが、スバルちゃんとティアナちゃんの間にも布陣して、ティアナちゃん
の視界を遮ってたんだ」

「つまりは、味方誤射狙いってわけか！」

「そういうこと」

明久の説明を聞いて、ヴィータが歯噛みした

「どうやら、相手の戦法に気付いたらしい」

そして、今のフォワード陣では対処が難しいことも

それを察したからか、大声で

「フォワード陣、こっからはアタシと明久で請け負う！　下がってろ！」

と言った

それを聞いて、フォワード陣は後退

数分後、ガジェットを殲滅しフォワード陣と合流した

その時だった

トーンと、あの音が鳴った

「つつ!?!」

「まさか!?!」

ハ長調ラ音を聞いて、フォワード陣は身構えた

その直後、黄昏空間に明久達は居た

そして、周囲を見回して相手を見つけた

だが、その相手は予想外だった

褐色の肌に、僧侶を彷彿させる服装と剥頭

そして何よりも、その手に持っている鉄扇

「メイガスじゃない!?!」

《あいつは、預言者・フィドヘルだ!》

明久達が想定していたのは、増殖・メイガスだった

だが、現れたのは預言者・フィドヘルだった

本来だったら、八相は第一から順番に現れる

故に、本当だったら現れるのは増殖・メイガスだった

しかし、実際に現れたのは預言者・フィドヘルだった

そこから予想されたのは、一つだった

「まさか、メイガスは既に適合者を見つけてる!？」

《それしか、ないね。来るよ!》

カイトが警告した瞬間、フィドヘルは鉄扇を振るつた

すると、魔力弾と魔力砲が一気に十数発放たれた

それを明久は回避し、一気にフィドヘルに肉薄して持っていた片手直剣を振り下ろした

しかし、その一撃は鉄扇によって防がれた

元々、鉄扇というのは防御兵装として作られた武器である

しかし、長さが大体20cm程でかなり薄く作られているためにかなり扱いが難しい

しかし、逆に使いこなせば接近戦では鉄壁の防御力を発揮する兵装だ

「つつ!」

明久は片手直剣を空中に放り投げると、双剣を握って構えた

(こりや、厳しい戦いになるかな……)

と明久は思うと、フィドヘル目掛けて突撃した

第二の開眼

「アキ、こいつは……!?!」

「予言者・フィドヘルだ！ 気を付けて、かなり特殊な攻撃してくるよ!!」

ヴィータにそう説明すると、明久は双剣の連撃を放った

だがフィドヘルは、その連撃を鉄扇で全て弾いた

しかも、そこから不思議な呪文を唱え始めた

「彼の者達に、裁きの雷が降り注ぐ」

唱えた直後、頭上から雷撃が放たれた

「蒼炎天蓋!!」

明久が両腕を掲げながら唱えると、全員の頭上に蒼炎の膜が形成され、それで雷撃は

全て防がれた

だがその直後、フィドヘルが鉄扇で明久を殴り飛ばした

蒼炎天蓋の欠点

それは、味方は守れるが、代わりに自分が無防備になってしまうのだ

しかし、現状ではそれしか無かった

「ガハッ!？」

「アキ!?! 野郎!?!」

ヴィータがアイゼンで殴り掛かったが、それをフィドヘルは受け流して、逆にヴィータを投げ飛ばした

「うあっ!?!」

地面に叩き付けられたが、ヴィータはすぐに起き上がった

なぜならば、先程までヴィータの頭が有った場所に鋭い蹴りが放たれていたからだ
下手したら、一撃でヴィータの意識は奪われていただろう

「こいつ……妙な技を使いやがる……」

「合気鉄扇だね……かなり厄介だ」

ヴィータの眩きを聞いて、明久はそう教えた

合気鉄扇

名前から分かる通り、合気道に連なる技術である

修得は非常に難しく、長い年月を必要とする

そもそも、合気道というのは技術に傾倒している武術である

空手や柔道と違い、力をさほど使わない武術なのだ

よく、空手は剛

柔道は柔と言われる

そして、合気道は技と言われている

そしてなにより、合気道と書かれている通りに相手の力に合わせて技を使うのが合気道なのだ

故に、その技の殆どが後の先

つまり、カウンターなのだ

その合気道から派生したのが、合気鉄扇だ

技の合気道に、古流武術

柔術の技と鉄扇による防御力を兼ね備えた武術

それが、合気鉄扇である

正に、攻防兼ね備えた武術なのだ

「厄介だからって、引くわけにはいかないけどね……あの予言の方がヤバイし」

「それだ。さつき、アイツが言ったことが本当になってたな。魔力、あの呪文を唱えてた間しか感じなかったな」

明久の話にヴィータが同意してそう言うと、明久は頷いて

「それが予言者たる理由だよ」

《フィドヘルが言ったことが、全部本当になるのさ》

「反則くせえ……」

明久とカイトの説明を聞いて、ヴィータは洩面を浮かべた

しかし、それも仕方ないだろう

つまりはフィドヘルが言えば、天変地異だろうがなんだろうが実現が可能なのだから
「さてと……どうするかなあ」

明久はそう言いながらも、周囲に蒼炎による魔力弾を形成

それを一気に放った

しかし、その蒼炎魔力弾は全てフィドヘルの魔力弾によって迎撃された

しかし、それは明久の策だった

明久は迎撃によって発生した爆煙に隠れて、フィドヘルに一気に肉薄

そして

「三爪炎痕!!」

蒼炎を纏った双剣で、三角形を描くように連撃を放った

「手応えあり……なっ!?!」

明久としては手応えがあったのだが、フィドヘルはほぼ無傷だった

「なんで……つつ!?!」

驚きながらも、明久は気付いた

予言とは何も、言葉だけではないと

その証拠に、フィドヘルが持っている鉄扇に文字が書かれていることに鉄扇には

《蒼炎の威力、半減》

と書かれていた

「やられた!?!」

明久は驚愕しながらも、一気に後退

距離を取った

「どうなってやがる!?! アキの必殺技が、大して効いてないぞ!?!」

「予言書の形を取られてた……僕からの攻撃は、半減される」

明久の説明を聞いて、ヴィータは舌打ちした

蒼炎とは、恐らくは明久を指し示しているだろう

こうなったら、明久の攻撃では大したダメージは期待出来ない

それでも明久は諦めず、双剣でフィドヘルに切りかかった

それを、後方からフォワード陣は見ていることしか出来なかった

「ヴィータ副隊長と明久さん、押されてる……」

「動きが速すぎて、僕達じゃあ手出しできない……」

スバルとエリオがそう言った時

《呼べ……私を》

とキャラは声を聞いた

聞いたことない声だった

「ケリユケイオン、何か言った？」

《いえ、何も》

違うと分かりながらもキャラは問い掛けたが、ケリユケイオンから返ってきたのは予想通りの否定の言葉

周囲を見れば、瓦礫から顔を出して戦況を見守っているスバルとエリオ（キャラには、姉弟に見えた）

横を見れば、どうすればいいのか考えてるらしく、腕組みしてるティアナの姿がある（気のせい？）

とキャラは首を傾げた

次の瞬間

《呼べ……私の名前を!!》

とキャラの頭の中で声が響いた

そして、キャラは思い出した

自分の中に入った、一つの存在を

(名前は確か……)

名前を思い出すのに少々時間が掛かったものの、キヤロはその名前を口にす

「……イニス……?」

その名前を言った瞬間、キヤロは踞った

激しい動悸に襲われたからだった

「キヤロ!?!」

そんなキヤロに最初に気付いたのは、ティアナだった

ティアナの声に気付いて、スバルとエリオもキヤロに近寄った

三人が声を掛けるが、キヤロはそれどころでは無かった

激しい破壊衝動と自分が自分では無くなるという衝動に、必死に耐えていた

その時だった

《呼びなさい……私の名前を!》

と三度その声が聞こえた

その声を聞いて、キヤロはある予想が頭によぎった

それに従って、キヤロは戦ってる明久達に視線を向けて

「来て……私は、ここに居る……イニス!!」

とその名前を叫んだ

そして彼女も、黄昏の因子の戦いに加わることになる

フィドヘル戦2

「来て……私は、ここに居る……イニス！」

キャラロがそう言った直後、キャラロの右手に長い杖が現れた

その杖は間違いなく、以前に戦っていた少女が持っていた杖だった

それを持つていると、エリオが驚いた様子で

「キャラロ……その杖って……前の……」

とキャラロが持つている杖を指差した

するとキャラロは、その杖を少し見してから

「うん……蜃気楼、イニスの宝具みたい……」

と返答した

するとキャラロは、杖で地面をトンツと突いた

その直後、キャラロの肩からフリードが飛び立ち、あつという間に本来の姿に変わった

それを見て、三人は目を見開いていた

余りにも早かったからだろう

本来、フリードが本当の姿になるには最低でも一分以上は掛かるからだ

しかし今回は、たった数秒ほどしか経たずに変わった
しかも、魔法陣も展開されなかった

そこから、古代魔法が関与していると予想した
するとキャラロは、前を見つめて

「フリード！」

とフリードの名を呼んだ

それと同時に、フリードは口を大きく開けて、巨大な火炎弾を発射した
その火炎弾も、普段だったら発射するまで十数秒は貯める時間を要する
これもまた、古代魔法の恩恵だろうことは分かった

すると、明久とヴィータが察知したらしく、散開

火炎弾は、フィドヘルに直撃した

「キャラロ!？」

「そんな！ キャロまで!？」

二人はキャラロが開眼したことに気付いて、驚愕していた

「ヴィータ副隊長！ 明久兄さん！ 私も一緒に!！」

キャラロはそう言うと、再び杖で地面を叩いた

すると、明久とヴィータに光が宿った

「これは……」

「強化魔法だ……これなら！」

明久はそう言うと、フェイト並の速度で爆煙に向かった

爆煙の中からフィドヘルが姿を現したが、傷を負っていた

その傷はキャラの一撃でだった

そこに、明久が目にも止まらない速さで、連撃を繰り出した

キャラが発動したのは、速度強化の魔法だった

しかも、倍加だ

それにより、明久の移動速度と攻撃速度は凄まじい領域に至っていた

移動する度に残像が残り、攻撃は閃光しか見えなかった

するとそこに、ヴィータも混ざった

ヴィータは六課の中では、非常にバランスのいい魔導師である

攻撃力、防御力、機動性、遠距離攻撃、近距離戦闘

そこにヴィータの判断力の高さが相まって、幅広い戦い方を可能としている

今回ヴィータは、フィドヘルに予言魔法を使わせなかったために接近戦を仕掛けたようだ

そして、ヴィータと明久は目配せするだけで連携を開始した

明久とヴィータの二人はフィドヘルに予言を言わせる隙を与えず、猛攻を繰り出した

しかも、フリードの火炎弾でフィドヘルの持っていた鉄扇も損傷している
それにより、明久の蒼炎が本来の威力を取り戻していた

「雷神独楽！」

「ラケーテン・ハンマー!!」

明久とヴィータの攻撃が直撃した直後、何かが割れるような音が響き渡った
プロテクション・ブレイクである

その音を聞いて、明久は右手をフィドヘルに向けて

「ヴィータ、退いて！」

と声を上げた

明久の声を聞いて、ヴィータはアイゼンの石突きでフィドヘルの顎を突き上げてから
後退した

ヴィータの一撃でバランスを失っていたフィドヘルを狙い、明久は

「カイト！」

《データ・ドレイン!!》

データ・ドレインを行った

数秒後、明久の手には光る球体があった

「なんとか勝てたな……」

「うん。そうだね」

ヴィータにそう返答しながら、明久は黄昏の書に球体を仕舞った
すると、黄昏空間も消えた

その直後

「良かった！ 居た！」

となのはの声が聞こえた

声のした方向に振り向くと、なのはとフェイト

更に、金髪の男性

ユーノが向かってきていた

(写真で見たけど、ユーノ……背が伸びたなあ)

明久はそう思いながら、手を上げて

「皆無事だよ、なのは、フェイト、ユーノ」

と言った

その直後、持っていた黄昏の書が震え始めた

「な、なんだ!?!」

《しまった！ まだ封印が完了してない！》

明久が驚き、カイトがそう言った直後に黄昏の書が開いた

そして、中から光る球体が現れた

明久は捕まえようとしたが、それより早く球体が飛んでいった
なのはへと

「これって、まさか……」

となのが驚いていると、球体はなの中にも消えた
すると、なのは頭を抑えて

「予言者・フィドヘル？ ……死の恐怖に蒼炎貫かれし時、再誕はなる……つう」
と喋った

それはまるで、予言のようだった

余りにも、不吉な予言だった

不穩

『そつか……また黄昏空間に……』

「うん。詳細は、書類にするね。じゃあ」

通信ではやてにそう言おうと、明久は通信を切った

そして、現場検分に戻った

今戦場だった場所では、地上本部から派遣されてきた検査部隊が残骸を回収していた

今明久は、その部隊の護衛に回っていた

すると、一人の白衣を着た男性が近寄り

「吉井上等空士、少々伺いたいことが」

と明久に声をかけてきた

「はい、なんででしょうか」

明久はその男性の後に続いた

場所は変わり、地下駐車場

そこに、なのはは居た

「んー……これ、未認証の品だね……はやてちゃん」

『ん、了解や。主催者さんと、トラックの持ち主さんに事情聴取やね』

その地下駐車場は、ホテルへの資材搬入用だった

その地下駐車場の見回りをしていた警備員の一人から、地下駐車場に変なのが居ると連絡があり、なのはが来たのである

そして来てみたら、一台のトラックの荷台に大穴が空いており、中を見てみたら、出品目録にはないロストログアを多数発見

それら全て、未認証の品だったのだ

『今そっちに、検査部隊を向かわせたから。なのはちゃんは戻ってな』
「了解」

そこではやてとの通信は終わり、なのはは少し黙考すると

「あの預言……なんだったのかな……」

どうにも、嫌な内容だったな

となのはは思った

まるで、誰かが死ぬような預言だった

そこまで考えると、なのはは頭を振って

「戻って、ティアナとお話しないとね……」

と言って、地下駐車場から出た

それから十数分後、機動六課は撤収

こうして、ホテルアグスタでの任務は終結した

二度場所は変わり、会議室

そこには、はやととなのは、フエイトの三人が集まっていた

三人の表情は一樣に固い

その理由が、なのはが言った預言だった

「死の恐怖に蒼炎貫かれし時、再誕はなる……か」

「死の恐怖って、私のスケイスのこと……だよな？」

「せやろね……」

三人は紙に書いた預言を見ながら、そう言った

「私が、蒼炎……明久を貫くと、再誕が発動する……」

「……嫌な預言やね」

「そうだね……」

三人はそこで会話を終わらせると、部屋から出た

時は経ち、夜

殆どの人員が寝る時間帯

六課の敷地の一角で、ティアナが一人で訓練していた

そして一段落着いたのか、動きが止まった
その時

「もう止めとけよ……何時間やるつもりだ？」

と、ヴァイスが声をかけた

「ヴァイス陸曹……見てたんですか？」

ティアナがそう問い掛けると、ヴァイスは近くのヘリのハンガーを指差して
「ヘリのメンテナンスをしながら、時々な」

と答えて、持っていた缶コーヒーをティアナに投げ渡した

「あ、ありがとうございます……」

ティアナは受け取ると、プルタブを開けて飲み始めた

ヴァイスも同じように、缶コーヒーを飲んだ

そして飲み終わったらしく、ティアナは空き缶を近くのベンチに置いて
「コーヒー、ありがとうございます」

と言つて、ヴァイスに背を向けた

「……まだやるつもりか？」

「私……非才の身なので」

ヴァイスの問い掛けにそう答えると、ティアナは自主トレを再開した

それを見送り、ヴァイスは頭をガシガシと乱雑に掻いた

すると、ヴァイスの隣にスツとシュテルが現れて

「無茶をする子ですね」

と呟いた

「うお、スタークス一等空尉殿!？」

どうやら気付かなかつたらしく、ヴァイスは本気で驚いていた

「……元とはいえ、武装隊員がそれは如何かと」

「す、すいません」

シュテルの苦言に、ヴァイスは素直に頭を下げた

そして、シュテルはティアナの方に視線を向けて

「何故、気付かないんでしょうね」

と呟いた

「へ？ 何がですか？」

とヴァイスが問い掛けると、シュテルは

「力は力に引かれる……そして、黄昏因子は黄昏因子に引かれるということがですよ」

と言った

そして、身を翻すと

「では、私は待機に戻ります」

と言って、去った

ヴァイスはそれを見送ると、ヘリのハンガーに戻った

ティアナが自主トレを止めたのは、それから約一時間後だった
事態が大きく動いたのは、翌日だった

翌日、六課は訓練スペースで各分隊で模擬戦をしていた
最初はスターズ分隊

つまり、スバル&ティアナVSなのはだった

それを、少し離れた場所でのメンバーが観戦していた

この時、明久はどうにも胸騒ぎがしていた

嫌な事が起きるかもしれないと

そして、明久のその胸騒ぎは現実になった

「ティアナ！ それは、無茶だよ！」

「つつつ!?!」

見ている先では、スバルを押しさえているなのはの頭上から魔力刃で攻撃しようとして
いるティアナの姿があった

その魔力刃を、なのははバリアジャケットの防護機能を解除して掴んだ

「ヤバい……なのはがキレたー！」

それを見て、明久が動いた

どうしても、それだけで終わらない予感がしたからだ

そして明久が近くのビルに着地した時、なのはの魔力弾がティアナに命中
爆発が起きた

爆煙が晴れた中から見えたのは、ポニーテールにした長い髪だった

「マズイ！　なのはー！」

それを見た明久は、更になのは達に近付いた

その時、なのは、明久、スバルの三人の耳にあの音

ハ長調ラ音が聞こえた

次の瞬間、黄昏空間が展開された

その中心地に居たのは、ティアナ

否、八相

「メイガスー！」

増殖・メイガスだった

欲求

「メイガス……」

「ど、どうなって……」

どうやら、なのはは何故ティアナの姿が変わったのか分からないらしい

すると、明久が

「何時かは分からないけど、彼女は適合してたんだね」

と言った

「でも、フェイトちゃんやキャロと違うよ？」

「あれは、アバター……メイガスの意識体に、ティアナちゃんの体が奪われたんだ」

明久の説明を聞いて、なのはは目を見開いた

まだ開眼していないなのはは、黄昏因子の強さを知らない

「適合者の精神力が弱り、更に気絶した。最悪の条件だよ」

明久が説明している間、メイガスはニコニコと笑っていた

そこからは、戦闘の意志は感じられなかった

しかし、明久となのは

更に、スバルに凄まじいプレッシャーがのし掛かった

スバルは、ティアナが追い詰められていることに気付かなかったことに対する自責の念もあつた

なのにも構えていたが、攻撃しづらそうだった

やはり、相手がティアナの体だからだろうか

その時、メイガスは自然な動作で右手の拳銃を構えて撃つた

狙いは

「ええ？」

スバルだった

発射された弾丸は、スバルにも反応しきれなかった

あつという間に迫つた弾丸は、スバルの眉間を撃ち抜くはずだった

しかしその弾丸は、明久が弾いた

そして明久は、一瞬にしてメイガスに肉薄

双剣と蹴撃を繰り出した

しかしメイガスは、双剣を避けた後に明久の蹴りを利用して距離を取つた

しかし、その距離も明久は一気に詰めた

相手たるメイガスの戦闘レンジは、中距離から遠距離だ

密着距離から近距離は、不得手なのだ

そして逆に、明久の戦闘レンジは密着距離から近距離

そして何よりも、短時間でメイガスを倒す必要があった

何故ならば、長時間適合者が因子に体を支配されていると、体の所有権が変わるのだ
目安は、一時間

それ以上は、戻れなくなるようだ

明久もカイトから聞いたただだから本当かは分からないが、カイトの声音から本当だと判断した

更にカイトから聞いた話では、一時間以内でも解放されるまでに掛かった時間によっては、体にとつてもない負担が掛かり、下手したら半身不随になってしまいうらい

そうになったら、ティアナは魔導師としては半ば引退するしかない

そんなこと、明久は容認する気はない

そして、ティアナを解放する方法は二つ

ティアナが目を覚まし、自身の精神力で支配権を取り戻す

そしてもう一つは、今までと同じようにデータドレインを放つこと

しかしそれは、余りにもリスクが大きかった

(出来るなら、ティアナちゃんに起きて欲しいけど……)

明久はそう思いながらも、次々と連撃を繰り出した

しかし、どれも避けられる

その光景に、なのはは無力感を覚えていた

それはまるで、幼い頃のようにだった

幼い頃、なのはの家は大変だった

父親の高町士郎は、ある事件に巻き込まれて重傷を負い、もしかしたら、二度と目覚めないかもしれないと言われた

その時期は、母親の桃子が夢だった喫茶店

喫茶翠屋を開いたばかりで、経営に走り回っていた

そして姉の美由希と兄の恭也は、そんな母親を支えるのに精一杯で、幼かったなのは満足に遊べなかった

しかしなのはは、幼いながらに、迷惑を掛けちゃいけないと思い、我儘を言わなかった

その光景は正しく、絵に描いたような理想の子供だろう

しかし、殆どを一人で過ごしたなのはは、孤独感と無力感に苛まれていた

だから途中からは、家のことをするようになった

疲れていた母親の代わりに料理や洗濯をこなすようになり、気付けば家事の殆どを引

き受けていた

必要とされたくて

高町家一同がそれを異常と感じるようになったのは、奇跡的に意識が戻った父親が家に戻り、喫茶店の経営が安定した小学生の頃だった

友達と遊ばずに、家のことを率先して手伝うのは

それを見て、ようやく高町家一同はなのはおかしくなっていることに気づいた

普通だったなら、友達と遊ぶべき小学生時代

そもそも、一年生の時には友達と呼べる存在が居なかった

友達

アリサ・バニングスと月村すずかに出会ったのは、小学三年生の時だった

アリサがすずかに意地悪していたのを見て、なのはおアリサに注意し、そこから喧嘩

に発展

それを、すずかが止めたことから、三人の付き合いは始まった

尚、この時のことをアリサに聞くと

『あの時の二人、暗くて放っておけなかったのよ』

とのことだった

つまりは、アリサのお節介から始まったのだ

そのお陰で、なのはは友達が出来た

しかしそれでも、なのはの中には

《誰かに、必要とされたい》

という欲求が渦巻いていた

そしてなのはが魔法とユーノ、明久、フェイト達と出会ったのは小学五年生の時だった

始まりは、ユーノが見つけたロストロギア

ジュエルシードだった

それを運んでいる最中に、プレシアが放った魔法により搬送していた船が破損

21個のジュエルシードが、地球の海鳴市に落ちたのだ

ユーノは魔法の素質を持っていたなのはに、協力を要請

それを巡り、フェイトと出会い

そこに、隠れて海鳴を守っていた明久が介入

更に、時空管理局が介入してきた

そして主犯だったプレシアの目的は、死んだ娘

アリシア・テスタロッサを甦らせることだった

しかし、死んだ人間は普通の技術では甦らない

だからプレシアは、奇跡に頼った

願いを歪な形にだが叶える宝石

ジュエルシード

それを意図的に暴走させることで、遙か昔に滅んで次元の狭間に消えた世界

アルハザード

そこに向かい、あると言われていた技術

死人を甦らせる技術で、甦らせようとした

その計画に使ったのが、アリシアのクローン

フェイトだった

当時のプレシアにとって、フェイトはアリシアの偽者の人形に過ぎなかった

だからプレシアは、フェイトを使い捨てにするつもりで苛酷に接した

しかしそのフェイトは、誰かに必要とされたかったなのは不屈の精神で組み立てた

戦術と技に敗北

その後プレシアも、フェイトと明久の言葉を聞いて、投降した

それから半年後、今度ははやてと八神家一同が中心の事件

闇の書事件が勃発

そこでもなのは、負けたら必要とされなくなるかもしれないという恐怖心から、苛

酷な練習と負荷の強かった魔法で戦い続けた

そして、明久とフェイトの助力

そして、一筋の奇跡で犠牲者無しという結果で、闇の書事件は幕を下ろした
この事件を境に、全員は時空管理局に協力するようになった

特になのはは、必要とされたいという欲求から、過剰な任務をこなし続けた

それに危機感を覚えた明久達が、なのはを止めようとしていた

その矢先に、あの雪の世界での事件が起きてしまった

それが理由で、明久は行方不明になってしまった

数年に渡って

それからなのはは、深く後悔した

自分が無茶をしたせいで、明久が行方不明になってしまったと

だからなのはは、誰かに無茶をして後悔してほしくないからと、教官になった

だが、今の状況はどうだ？

まるで、過去の過ちの焼き直しのようなだった

それが、なのはには許せなかった

だからか、なのはは無力感に襲われた

だからかは、なのはにも分からない

なのはは、激しく連撃を繰り出している明久を見て

「お願い……力を貸して」

頭に浮かんだその名前を、口にした

「フィドヘル!!」

解放と説教

明久はメイガスと戦っていた時、なのはの声を聞いた
フィドヘルを呼ぶ声を

だが、気にする余裕が無かつ

メイガスが司るのは、増殖

気付けば、明久は囲まれていた

それは、ティアナも使っていた魔法

フェイク・シルエツトだ

(よく考えるべきだった………なんで、ティアナちゃんのフェイク・シルエツトが本体と見分けが出来なかったのか………それは、魔力密度が異様に濃かったからだ。増殖の能力で、魔力密度が増えてたんだ)

明久はそう思いながら、右に居たメイガスに双剣を投げた

投げた双剣はメイガスの首と胸部に深々と刺さったが、そのメイガスは消えた

「またか!! カイト!」

《ダメだ! 見分け不可能!》

明久の問い掛けに、カイトは焦った様子でそう返答した
どうやら、分からないようだ

それを聞いた明久は、新しく大鎌をその手に持った
そして

「雷神乱舞!!」

と雷を纏った乱撃を放った

それにより、明久の近くに居たメイガスは全て消えた
だが、まだメイガスは残っていた

その数は、軽く10人を越えている

しかも、まだ増える

「鎌じゃダメだ……!」

《連結刃大剣!》

明久は右手で鎌を仕舞うと、新たに大剣を取り出した

それは、シグナムで使うレヴァンティンと同類の大剣だった

普段は大剣として使えるが、コマンド一つで連結刃に変わる代物だ
しかし、その分扱いは難しい

上手く使いこなさないと、自分だけでなく、味方にも危害が及ぶ

明久はそれを両手で持つと、頭上で構えた
そして

「カイト！」

《龍刃形態！》

カイトがそう言った直後、明久は大剣を頭上で回し始めた

しかも刃が蛇腹状に伸びながら、不規則に動いている

それを避けるのは、至難の技だろう

事実、次々とメイガスが切り裂かれて消えていった

だが、消しても消しても、新しいのが現れる

「キリがない！」

《だけど、消さない方が不味いよ！》

「分かってる！」

メイガスの増殖した分身は、消さないと爆発するのだ

しかも、消す直前まで増殖が続くので、魔力密度が凄まじいのだ

もし、間近で爆発したらどうなるのか

過去に、至近距離で爆発を喰らい、瀕死の重傷を負ったという記録もある

その時は間一髪で完全再生魔法で回復したらしいが、間に合わなかったら死ぬのは間

違うない

だから明久は、一つ残さず消すしかなかった

だが、分身を出された時点で、明久は絶望的な消耗戦を強いられていた

明久一人に対して、メイガスは実質的に無限

そんなの、絶望的以外の何物でもなかった

その時だった

「偽りの体、地から生えし槍に貫かれる」

となのはの声が聞こえた

その直後、明久の周囲に居たメイガスのほぼ全てが地面から生えた槍に貫かれた

明久は反射的に、なのはの居た場所を見た

そこには、両手に鉄扇を持ったなのはが居た

どうやら、支配はされていないようだ

「アキくん！ 分身は私が押さえるから、本体をお願い！」

「……わかった！」

なのはの言葉を聞いて、明久は両手に双剣を持って走り出した

その先には、メイガス本体が居た

もちろんだが、すぐに分身が現れて本体を隠そうとした

だが、それはすぐに消えていく

なのは分身をターゲットにした魔法を使うからだ

それにより、明久は本体に近付けた

メイガス本体も明久を倒そうと、銃撃を放つ

しかし、全ての銃弾を明久は弾いて肉薄した

そこから、攻撃速度強化の魔法を使って明久は次々と剣劇を放った

その連撃は残像だらけで、回避する隙間すらなかった

その時、明久の耳にガラスが碎ける様な音が聞こえた

それを聞いて、明久は右腕をメイガスに向けて

「カイトー！」

と相方を呼んだ

その直後、明久の右手首に半透明の花弁が開いた

そして、明久は内心で

（お願い……未帰還者にはならないでっ！）

と祈りながら、狙いを定め

「データ……ドレイン!!」

とデータドレインを放った

次の瞬間、メイガスの姿がティアナに戻り、黄昏空間が消えた

そして倒れてきたティアナを、明久が抱き抱えた

「本当、お願いだよ……未帰還者は勘弁してね……」

と明久が言ったタイミングで、周囲にフェイトとシグナム、ヴィータが着地

明久はティアナが黄昏因子の適合者だと告げると、ティアナをお姫様抱っこで医務室まで連れていった

そして、小一時間後

「さて、アキ君や……」

「はい……」

明久は、隊長陣の居る部屋の中心で正座していた

なお、幸村も居る

「未帰還者って、なんや?」

そう問いつけたはやては笑顔だったが、目が笑っていないかった

「未帰還者というのはですね……その……意識不明になることです」

「なん……やて?」

明久の説明を聞いて、はやては声を低くした

すると明久は、右手を高々と上げて

「黄昏因子保有者がデータドレインを人間に放つたら、その人の魂を取り込み、意識不明になるんです」

と説明を続けた

その説明を聞いて、全員は絶句した

そこまで危険だったのかと

「ただ、ティアナちゃんも黄昏因子保有者だったし、過去に黄昏因子保有者同士のデータドレインのデータが無かったから、未帰還者になるかは分からなかつたんです、はい……ただ、さつきシヤマル先生から聞いた話では脳波に異常はなしと伺ったから、大丈夫です……はい」

と明久が言うと、全員の視線がシヤマルが映つてゐる通信画面に向いた

『確かに、アキ君が言った通りよ。ティアナちゃんの脳波は異常なし。過労で眠つてゐるだけの状態だから、少しすれば目覚めるはずよ』

とシヤマルが言うと、全員は安堵した

しかし、はやては明久を見下ろすと

「とはいえ、危険な行為をしたことには変わらへん。それは分かつてるな?」

と明久に問い掛けた

すると明久は、真剣な表情で

「もちろん、分かっています」

と頷いた

するとはやては

「ならば、処分は後々通達するから、もう休みいや」

と言った

「はい」

明久は頷くと、立ち上がって部屋へと戻ろうとした

すると、シャマルが

『アキ君。もう一度検査したいから、医務室に来なさい』

と言った

それを聞いて、明久は医務室に向かったのだった

語りかけ

ティアナが目覚めたのは、事が終わって数時間後

夜八時近くだった

目を覚ましたらティアナは、反射的に上半身を起こした

そして次の瞬間には、顔が真っ赤になった

その理由が、上はシャツを着ていたのだが下が下着だったからだ

だからティアナは、思わず反射的にタオルケットで隠した

すると、奥からシャマルが現れて

「起きた？ よほど疲れてたのね。もう八時よ？」

と言いながら、ティアナにズボンを渡した

ズボンを受け取ったティアナは、その時間を聞いて

「八時……え、夜!？」

と驚いて、カーテンを開けた

外は、真っ暗だった

そしてティアナが呆然としていると、シャマルが

「こっちは、小一時間寝てるわね」

と言つて、隣のカーテンを開けた

そこでは、明久が寝ていた

何故か、バインドで縛られている

「あの……なぜ、バインドで？」

とティアナは、啞然とした様子で問い掛けた

するとシヤマルが

「ティアナちゃんを危ない目に合わせた罰よ」

と両手を腰に当てて言った

「あの、それは一体……」

とティアナが問い掛けた時、甲高い警報音が鳴り響いた

それは、緊急出撃を報せるものだった

それから数分後、機動六課メンバーはヘリポートに集まっていた

だが一同の空気は、気まづかった

その理由はやはり、ティアナの一件だろう

その自覚があるからか、ティアナも俯いていた

すると、なのはが

「私達は、全員待機です」

と言った

その言葉が予想外だったのか、フォワード陣は全員軽く目を見開いた

よく見ると、なのはの頭にタンコブが見える

「あの、なのはさん……そのタンコブは？」

とスバルが問い掛けた

すると、新たにダークマテリアル隊が現れて

「我が叩いたのよ」

とディアーチエが言った

「クローディア三佐ー」

現れたディアーチエ達を見て、フォワード陣は敬礼した

すると、ディアーチエは

「白ひよこ、ちゃんと話せ。それが、対話することを怠ったお前への罰よ」

と言って、シユテルとレヴィ、幸村を連れてヘリに乗った

それを見送ると、なのはは

「それじゃあ、皆。第二会議室に行こうか」

と提案した

そして、フォワード陣を伴って目的の会議室に向かった
そこには既に、フェイトとはやてが居た

その表情は、真剣そのものだった

「これから話すのは、私の失敗談……私の過去の過ちだよ」

となのはが言うのと、会議室正面の大モニターが映った

そこに映ったのは、幼いなのはだった

年齢は約九歳だろう

「これ、なのはさんですか？」

「可愛いですね」

「ありがとうね」

キャロにお礼を言うと、なのはは視線を戻して

「私が魔法に関わることになったのは、ジュエルシード事件からだった」

と語りだした

そして映ったのは、なのはと敵対したフェイトの姿

それを見て、エリオとキャロは驚いていた

今凄く仲良しの二人が、嘗て敵対していたとは。と

「そして、ジュエルシード事件は又の名を、PT事件とも呼ばれているわ」

と言ったのは、新たに現れたプレシアだった

「PT事件……まさか、プレシア女史が？」

と気付いたのは、ティアナだった

「ええ……私は、過去の事故で喪ってしまった娘……アリシアを甦らせようと、ジュエルシードを欲したのよ」

とプレシアは、ティアナの考えに気付いたように語った

「だけどそれは、なのはちゃんと時空管理局。そして、彼によって防がれた」

プレシアがそう言うと、映像に幼いクロノと明久が映された

「吉井上等空士!？」

「彼も関わっていたなんて……」

と驚いたのは、スバルとティアナだった

「彼は、古代の英雄。その末裔……ただ一人の生き残りよ」

プレシアはそう言うと、ある映像を出した

そこに映っているのは、不思議な模様入りの服を着た一人の少年だった

「アルハザードを管理していた、最強の騎士団。蒼炎騎士団、その団長……蒼炎のカイト

……」

その二つ名は、明久と一緒だった

そして、その能力も

「そんな彼は、能力が目覚めた後は秘かに、世界を守ろうと奔走した……そんな彼が、ジュエルシード事件に関わるのは自明の理だった……だから、私も生きている……死ぬはずだったのよね」

そしてジュエルシード事件は終わり、次に映ったのは襲いかかってきたヴィータだった

「ヴィータ副隊長!？」

「それに、シグナム副隊長に、シヤマル先生。ザファイラも!？」

とスバルとエリオは驚愕した

「これが、私が深く関わった事件……闇の書事件や」

と言ったのは、はやてだった

「闇の書、事件……」

とスバルが呆然として呟くと、はやてが続けて

「この事件は、なのはちゃんとフェイトちゃん。そして、アキ君のおかげで、犠牲者無しで終わった……消える筈だった、アインスも助けられた」

と語った

すると、なのはが前に出て

「その後私達は、管理局に所属。様々な事件の解決に走った……だけど私は、無茶を続けたから体にダメージが貯まっていた……それが爆発したのは、あの世界での雪の日だった……」

と言った

すると、映像が切り替わった

それは、血に濡れたなのは抱いているヴィータ

そして、大怪我を負いながらも、双剣を持っている明久だった

「これは……」

「吉井上等空士が、大怪我を負ってる……？」

と言ったのは、スバルとティアナだった

「アキ君は、無茶をして体が動かなくなった私を、助けてくれたの……その後だった……」

アキ君が、行方不明になった……私の無茶のせいで、アキ君は……」

なのはそこまで言うのと、言葉をつぐんだ

そして、ティアナに視線を向けて

「一つ聞くよ、ティアナ……あの時の無茶は、必要なことだったの？」

と問い掛けた

対話

第二会議室でなのは言葉にティアナは答えられず、そのまま解散となった
なお、ダークマテリアルは何の問題もなく現れたガジエツトII型を殲滅した
そして解散後ティアナは、海に面した岸壁に腰掛けていた

その手には、クロスミラーージュがあった

その時、足音が聞こえたので視線を足音のした方向に視線を向けた

その先に居たのは、なのはだった

「なのはさん……」

「隣、座るね」

ティアナが名前を呼ぶが、なのははそう言つてティアナの隣に座つた

そして、少しすると

「私みたいに無茶しないで済むようにって、訓練してたんだけど……地味でごめんね、
ティアナ」

となのはが言つた

すると、ティアナが慌てた様子で

「あ、いえ！ そんな……」

と言ったが、どうしてか言葉が尻すぼみになってしまった

そして、ティアナが俯いていると

「あ、それと」

となのはが視線を向けた

その声にティアナが顔を向けると、なのはは微笑みながら

「実は、ティアナのあの時の選択肢。あながち的外れじゃないんだよね」

と言った

その言葉の意味が分からず、ティアナが首を傾げていると

「クロスミラージュ、貸して？」

となのはは言った

それを聞いたティアナは、クロスミラージュをなのはに手渡した

するとなのはが

「隊長権限により、テストモード、一時解除」

と言った

その後

《了解。テストモード、一時解除》

とクロスミラーージュが一瞬光った

それを見たなのは、クロスミラーージュをティアナに返して

「言ってみて。モード2って」

と促した

それを聞いたティアナは、構えてから

「……モード2」

と言った

すると

《了解。ダガーモード》

とクロスミラーージュが言って、変形した

グリップが斜めになり、銃口から刃が形成され、更にハンドガードの形で魔力刃が形

成された

「こ、これは……」

「ティアナ、執務官志望だからね。近接戦闘が起きることを考えて、作ってはいたんだ」

ティアナが驚きで震えていると、なのはがそう言いながらクロスミラーージュをそつと

ティアナから取った

そして、音声入力でクロスミラーージュの制限を戻すと

「今の訓練が終わって、第二段階に入ったら教えようと思ってたんだ」と言った

それを聞いて、ティアナは目元に涙を貯めて

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

と言いながら、泣き出した

それをなのはは、優しく抱き締めた

こうして、わだかまりは無くなったのだった

そして、医務室では

「……僕、いつまで縛られてるんだろうか？」

忘れられた明久が、ベッドに転がっていた

そして明久が解放されたのは、明久が居ないことに気づいたアインスが医務室に来た

夜12時少し前だった

その時、明久にはアインスが女神に見えたという……

六課の休暇

なのはの過去を打ち明けた数日後

「はーい。午前中の訓練終了ー!」

「お疲れさまですー!」

午前中の訓練が終わった一堂は、一ヶ所に集まった

そんな中、明久は地面にうつ伏せになっており、息が荒い

そんな明久をスルーして、なのはが

「実は今回の訓練、第二段階への評価試験でもあったんだけど」

と言うと、フォワード陣は軽く目を見開いた

そんなフォワード陣もスルーして、なのはは背後に居たフェイトとヴィータの二人に

「どうかな、二人供？」

「合格」

「早っ!？」

フェイトの即答が予想外だったのか、スバルが突っ込みを入れていた

するとヴィータが

「まあ、こんだけ訓練してて、むしろ不合格だったら、どっちなかに問題アリってこったな」と言った

それにフオワード陣が恥ずかしそうにしてると

「それじゃあ皆は、後でデバイスをシャーリーに預けてね。次の訓練は、明日からだよ」となのはが言った

それを聞いて、ティアナが

「明日からと言うと、午後は……？」

と問い掛けた

すると、なのはは微笑みを浮かべて

「今日の午後は休みです！」

と言った

次の瞬間

「やったー！」

とフオワード陣は喜んだ

その時になって、ようやくなのはは倒れてる明久に視線を向けて「分かっているとと思うけど、アキ君は休み無しだよ？」

と声をかけた

すると明久は、うつ伏せのまま

「ですよねえ……」

と言った

なお、明久がうつ伏せになっている理由は、何故かヴィータとなのはの二人が明久に集中攻撃したからである

この後フォワード陣はデバイスをシャーリーに預けた後に手早くシャワーを浴びて、街に出る準備に回った

車庫では、ティアナがヴァイスからバイクを借りていた

「こっちは良しつと……プロテクターは？」

「自前のオートプロテクターがあります」

ヴァイスが整備しながら問い掛けると、ティアナはそう答えた

その答えに、ヴァイスは頷くとハンドルを握って捻った

そして、エンジン音を聞いて

「うし、いい調子だ」

と呟いた

そして、事故防止のためにエンジンを切ると

「ほれよ」

とティアナに鍵を投げた

「ありがとうございます」

鍵を受け取ったティアナは、礼を述べた

そしてバイクに股がり、ヘルメットを被った

すると、ティアナは

「ヴァイス陸曹……ヴァイス陸曹は、武装隊の出……なんですよね？」

と問い掛けた

するとヴァイスは、一瞬遠い表情をしてから

「まあな……ど新人に説教出来るくらいにはな」

と返した

その言葉にティアナが少し俯くと、ヴァイスが

「つて、俺の過去なんざどうだっていいんだよ。相棒が待つてるんだろ？ ほれ、さっさ

と行つてこい」

とティアナの肩を叩いた

するとティアナは、ビクツと体を震わせて

「はい、行つてきます」

と言つて、バイクを進ませた

その頃、フェイトはエリオの面倒を見ていた

「これで、服は大丈夫だね……えっと、お金は……」

フェイトがそこまで言うのと、エリオが

「フェイトさん、大丈夫ですよ。僕だって、お給料貰ってるんですから」

と言った

それを聞いてフェイトは、あつと声を漏らして

「そうだったね。ごめんね」

と謝った

心中では

(成長を喜ぶべきだけど、やっぱり寂しいな)

と思った

その時、ドアが開いて

「すいません。お待たせしました！」

とキヤロが現れた

キヤロは白地の長袖シャツの上に、ピンク色の薄手のサマーセーターを着ており、薄いベージュ色のスカートを履いている

それを見たフェイトは

「うん、よく似合ってるよ。キヤロ」

と誉めた

「ありがとうございます」

キヤロは嬉しそうに返答すると、エリオを見て微笑んだ
すると、固まっていたエリオはハッと我に返った

そして、フエイトは

「私は仕事があるけど、二人は楽しんでね」

と二人を玄関で見送った

それから少しして、スバルを乗せてテイアナもミッドに向かった
こうして、フォワード陣は休暇に入ったのだった

六課の休暇 隊舎編

フオワード陣が街に向かった後の隊舎では、残った隊長陣が仕事をしていた
「うん。皆の動き、よくなってるね」

「本当」

なのはの言葉に、フエイトは頷きながら肯定した
今二人が居るのは、食堂である

二人の他に、明久やはやて

更には、プレシアや交替部隊の姿もあつた

その時だった

テレビを映していた画面では、髭を生やした一人の男性が演説していた

その男性の名前は、レジアス・ゲイズ

時空管理局地上本部の中將だ

だがその演説内容は、かなり過激なものだった

すると、ハンバーグを一口食べたダイアーチェが

「ふん……あ奴はただ、力を誇示することしか考えておらん。あれでは、恐怖統治よ」

と吐き捨てるように言った

すると、シユテルが

「そうですね……彼は武闘派としてかなり有名です。ですが、言った対策の大半は、否決されています」

と言った

レジアスが出した対策

それは、人造魔導師計画

そして、戦闘機人計画

この二つは、時空管理局の慢性的な人手不足を解消するためにとレジアスが提案したものである

しかしその二つは、人道上の問題により否決されている

だが、人造魔導師計画

通称、プロジェクトFATEは、一部の違法研究機関で行われた

更に言えば、過去にプレシアも行った

だからか、プレシアは少し苦い表情を浮かべている

すると次に、一人の人物が演説を始めた

その人物の名前は、西村総一

階級は一佐で、時空管理局地上本部精鋭部隊

アイアン部隊の総隊長を勤めている豪傑である

その戦闘スタイルは、今の管理局の中では珍しい素手での戦闘

ただその戦闘能力は、過去に違法魔導師12人を10分と掛けずに全員無力化した実績がある

だが何より恐ろしいとされるのが、その肉体能力の高さだ

西村が使える魔法は、飛行魔法と肉体強化魔法

そして、防御力強化魔法位らしい

それを補って余りあるのが、元々の肉体能力の高さだ

なんでも以前、戦車の砲弾を殴って弾いたという

それだけでなく、過去に魔法を使わず素手で車をひっくり返したという記録もあった

だからか、彼は通称で鉄人と呼ばれていた

そんな西村は今、新人に対する育成の重要性を説いていた

実を言うと西村は、教導部隊で教導することもあった

実は、なのはの教導はそんな西村のものをベースにしていたりする

だからなのはにとっては、偉大な先生でもあった

『確かに、育成は時間と費用が掛かります。ですが、簡易教導を数カ月行った者と、本格

教導を一年行つた者達では、初陣の死亡率に約二倍以上の差が出ます。初陣を生き残り、その時の恐怖を乗り越え、更に切磋琢磨する。そうすれば、最初は頼りなくとも、何れは名高きエースに、何よりも、世界を守る人材になる！ かのエース・オブ・エースを思い出して頂きたい。優しき閃光を思い出して頂きたい。夜天の主を思い出して頂きたい。彼女達は、正規の教育を受けて今の強さを得ている。彼女達が、その証明者なのです！ 故に私は、今ここに教導の大切さを説かせていただきます！』

と西村が言つた直後、割れんばかりの拍手が巻き起こつた

すると、幸村が

「流石は、かの鉄人だ」

と称賛した

すると、ディアーチエが

「流石は、精鋭と名高き部隊の指揮官よな。言うてゐることは至極真つ当よ、なあ小ガラス」

とはやてに視線を向けた

すると、お茶を飲んだはやてが

「せやね……本当に、偉大な人や」

と言つた

すると、明久が

「なんでだろう……こう、訓練で情けない成績を出した人達を一気に抱えて走る姿が想像出来た……」

と呟いた

すると幸村が

「あ、シユテルさん。紅茶、要ります？」

とティーポットを出した

するとシユテルは、空になったティーカップを渡して

「お願いします」

と言った

それを見ていたレヴィが

(ねえ、王様。二人が凄いもどかしいんだけど)

と念話でダイアーチェに話し掛けた

すると、ダイアーチェは

(シユテルは頭の回転は凄まじいが、人の好意には疎いからな……幸村も積極的にアピールしているが……)

と念話で溜め息混じりに言った

すると、二人が見ていたことに気づいたシユテルが

「なんですか、二人共。私に何か？」

と首を傾げた

すると二人は

「なんでもなーい」

「何でもない、気にするな」

と言った

なお、その時

（幸村くん、はやてちゃんがキューピッドになつたらか？）

とはやてが幸村に念話していたが

（変なことになりそうだから、いい）

と幸村ははやてを止めた

隊舎は、かなりのんびりしていた

六課の休暇 フォワード陣編

ミッド市街地に来ていたフォワード陣はそれぞれ街巡りをしていた

スバルとティアナはまず、アイス屋台に寄ってアイスクリームを買った

ティアナは普通に一段だったが、スバルのはなんと、八段重ねである

ティアナには慣れっこだが、注文を受けた店員は数秒程固まっていた

そしてスバルに頼まれた通りに積んだのだが、その店員の腕が良かったのだろう

アイスは絶妙なバランスを保っていた

「ティア、この後はどうしようか」

「そうね……適当に買い物でもする？」

スバルからの問い掛けに、ティアナはそう答えた

するとスバルは、少し考えてから

「一回、ゲームセンター行っていい？ 新しいのあるか確認したい！」

と言った

それを聞いて、ティアナは

「OK、いいわね。私も見たいわ」

と同意するように頷いた

ティアナが食べ終わったタイミングで、スバルもアイスを食べ終わった
そして二人は、まずゲームセンターに向かった

「あ、新しいのある!」

「あ、本当……このゲームのキャラのモデル、なのはさんかしら?」

新しいゲームの筐体に表示されているキャラを見て、ティアナはそう言いながら首を
傾げた

そして二人で適当にゲームを物色してから、あるスーパーに入った

そこで、日用品の補充をするつもりだ

二人はついでに、隊長陣にお土産を買った

その時だった

スバルが

「エリオ達、どうしてるかな?」

と空を見上げた

その頃エリオとキヤロは、公園に来ていた

二人は娯楽関係に疎いので、公園に来たのだ

二人は屋台で御菓子を買って、それをベンチに座って食べていた

「……平和だね、エリオくん」

「そうだね……」

キャロの言葉に、エリオは同意するように頷いた

確かに、今二人が居る公園は親子連れやカップルらしい人達で賑わっている

それはまるで、事件なんて起きていないと言わんばかりだった

しかし、今も少しずつ事件は起きている

それを、二人は知っていた

二人は御菓子を食べ終わると、公園をグルリと一周

その後、あるスーパ―に入った

エリオではなく、キャロがフリード用に買いに来たのだ

「あ、そうだ」

「どうしたの、エリオくん？」

何かを思い付いたのか、エリオは僅かに顔を上に向けた

すると、それが気になったキャロが問い掛けた

「フエイトさんに、日頃のお礼に何か買おうよ」

「あ、そうだね！」

エリオの提案に、キャロは嬉しそうに頷いた

そして二人が入ったのは、ある雑貨屋だった

雑貨屋に入った二人は、店内を歩きながら良いのを探した

その時二人は、少し高い所にあるものを見つけた

それは、データ式写真立てだった

二人が知る限り、フェイトは思い出を大切にしている

その中でよくやるのが、写真撮影だった

フェイトは二人と遊んだりしている時、どんな些細なことだろうが写真を撮影するのだ

二人はそれを思いだし、それを買うことにした

だが、その写真立てがあるのは二人の手が微妙に届かない場所だった

その時、二人の後ろに誰かが来てその写真立てを掴んで

「ほれ、これか？」

と二人に手渡した

「あ、ありがとうございます！」

「気にすんな。こつちも面白い物中だしな」

二人が頭を下げると、その赤髪の男性はそう言いながら手をヒラヒラと振った
すると

「雄二よ、急ぐのじゃ」

とレジの方から声が聞こえた

すると、その男性は

「わあつてゐるって、急かすな」

と言うと、レジの方に向かった

そして二人は目的の物を入手したので会計を済ませ、雑貨屋を出た

この後、事態は急変する

動

それに気付いたのは、エリオだった

エリオは足を止めると、素早く周囲を見回した

今二人が居るのは、雑貨店から少し離れた場所の街中だった

エリオの行動に気付いて、キヤロが

「どうしたの、エリオくん？」

と問い掛けた

するとエリオは、真剣な表情で

「キヤロ、何か聞こえなかったか？ ゴトツというか、ゴリッて音が」

と問い掛けた

するとキヤロは、首を振って

「ううん、聞こえなかったよ」

と答えた

しかしエリオは

「近かったけど」

と言うと、近くの路地に入った

その路地は行き止まりで、誰も居なかった

その時、路地の奥のマンホールが動いた

そして、マンホールの下から出てきたのは二人より幼い女の子だった

二人は駆け寄ると、エリオがその女の子を受け止めた

「大丈夫ですか!？」

エリオが声を掛けるが、女の子からの返事はない

どうやら、意識を失っているらしい

その時、キヤロが

「エリオくん!」

とエリオを呼んだ

呼ばれたエリオは、顔をキヤロに向けた

するとキヤロは、その手にケースを持っていた

レリックを入れるケースを

そのケースは、鎖で女の子の足に繋がっていた

それを見たエリオは

「キヤロ、緊急通信を!」

と言った

そして緊急通信をして数分後、スバルとティアナが到着

その少し後に、ヘリに乗ってなのは、フェイト、明久、シヤマルの四人が到着した

そして、エリオとキヤロは状況を説明

すると、女の子と繋がっていた鎖を見て

「レリックケースは、もう一つ有った？」

と呟いた

その理由は、鎖の一ヶ所が千切れていたが、その鎖を繋げると、四角になるからだ

そしてそのサイズは、レリックケースと全く一緒だ

となれば、もう一つ有るのは自明の理である

すると、女の子を簡易診察したシヤマルが

「うん。衰弱してるけど、命に別状は無いわね」

と言った

そして、なのはを見上げて

「なのはちゃん。この子を、ヘリまで運んでくれるかしら？」

と言った

「あ、はい。わかりました」

シヤマルの話聞いて、なのはは女の子を抱き上げた
するとフェイトが

「皆、悪いけど休暇はここまで。お仕事だよ」

と言った

するとフォワード陣は、一斉にデバイスを取り出した

そして

「セットアップ!!」

全員同時に、バリアジャケットを展開

フォワード陣は全員、マンホールから地下水路に突入した

その後なのは、フェイト、明久の三人はヘリを見送りビル屋上に残った

すると、なのはとフェイトが

「皆、大分頼れるようになったね」

「まだまだ、もつと頼れるようになってもらわないと」

と会話した

その直後に、三人もバリアジャケットを展開

行動を開始した

この時はやては、六課隊舎ではなく聖王教会に居た

その責任者の一人であり、六課の後見人の一人
カリム・グラシアに会いに来ていたのだ

そして、今後の方針を話し合っていた時に陸士108部隊所属のスバルの姉
ギンガ・ナカジマから連絡が来た

その内容は、町外れのトンネルで起きた交通事故

その事故現場で見つけたある物

それは、小型の生態ポッド

人造魔導師計画に深く関わるポッドだった

そしてこの事件は、進展する

確信

「人造魔導師計画？」

「そう、人工的に魔導師を産み出す計画なんだけどね。そのために、薬物を使ったり体の中に機械を埋め込んだりすることで、強い魔導師を産み出すって計画」

「ただ、コスト的に割りに合わないのと、倫理的な問題もあって公的な機関ではやらない研究よ。よほど、頭がイカれてないとやらない研究なんだけど……」

通信で知らされあ内容が分からなかったキャロが首を傾げると、スバルとティアナがそう説明した

それを聞いて、エリオは

（まだ続いてるんだ……あの狂った実験が）

と過去を思い出していた

実はエリオは、その人造魔導師計画で産み出された子だった

正確に言えば、過去に死んだ子を両親が違法と知りながら復活させたくて、人造魔導師計画を行っている研究所に頼み、復活させてもらったのだ

だからエリオには、死んだ本当のエリオの記憶があった

だがある日、その違法研究所が管理局に制圧され、管理局にエリオのことが発覚してしまい、エリオは管理局員により両親から離されてしまったのだ
それ以降、両親はエリオに会いにこない

正確には、来れないのだ

両親は裁判により、エリオに会ってはいけないとされたのだ

管理局の施設に入れられたエリオは、当初それを知らなかった

知ったのは、施設に来たフェイトに知らされてからだだった

だがフェイトの言葉に、エリオは最初は耳を貸さなかった

エリオはその時、軽度の人間不信に陥っていたのだ

会いに来てくれると信じていた両親が、なかなか来ない

そこからエリオは、見捨てられたんだと思っていた

だからエリオは、自身の魔力変換資質の電気を放ち近寄ろうとした人達を傷付けてい

た

それで大抵は直ぐに離れたが、フェイトは違った

フェイトは自身が傷付くのも構わず、エリオに優しく接した

そこからエリオは、フェイトを信じるようになった

そして、フェイトから両親の真実を知ったのだ

そしてフェイトは

『エリオのご両親の代わりにはなれないけど、私がエリオを育てたいんだ』
と言った

そしてエリオは、フェイトに引き取られた
そして、今に至る

(あんな研究……残すわけにはいかない！)

エリオがそう思った時

「レリックケースまで、後500mです！」

とキャラロが言った

すると、ケリユケイオンが

《警告！ ガジエット反応！ 後方から15！ 更に、右側通路から20！》

と警告してきた

それを聞いて、ティアアナが

「戦闘態勢！ ガジエットを殲滅するわよ！」

と指示を出した

「了解！」

と三人が返答した直後、フォワード陣はガジエットと交戦を開始した

その頃、上空では

「報告通り、凄い数だね……」

「だね……」

なのは、フェイト、明久達が、海上上空で大量のガジェットⅡ型を見つけたガジェットⅡ型は航空機型ガジェットで、速さに特化しているタイプだった。ヘリは機動六課に向かうのだが、その進路上に現れたのだ。

だから三人が先行し、先にガジェットを殲滅しようという狙いだった。

だがその数は、優に1000近かった。

なお、陸士108部隊に演習に向かっていたヴィータも、合流しように向かっていたが、そのヴィータもガジェットⅡ型と接敵

戦闘を開始したらしい。

援軍は、期待出来ない。

故に三人は、ガジェットと交戦を開始した。

その頃、六課隊舎の機械室では

「この技術……それに、この作り方は……」

とプレシアが、破壊されたガジェットの写真を見ていた。

そしてプレシアは、今フェイト達が戦っているガジェットⅡ型のデータを見ていた。

そのデータは、三人のデバイスが観測したデータをリアルタイムで送っているのだ
その時、データの中に不思議な波長が現れた

「この波長は……確か……ISS?」

プレシアがそう首を傾げた直後

『こちらライトニングー！ 敵ガジェットに、幻影が混じり始めた!』

とフェイトから報告がされた

「やはり、この波長は!」

プレシアはそう言うと、キーボードを高速で叩いた

そして、あるデータと研究資料が表示された

プレシアはそれを見て

「間違いないわ!」

と確信した

この敵が、誰なのかを

流転

「これで、初期遭遇したガジェットは全部かしら？」

「はい。確認した数と同じです」

ティアナの呟きに答えたのは、キャロだ

そして、スバルとエリオが集まった直後、近くの壁が吹き飛んだ

それにフォワード陣は反応し、構えた

そして煙の中から現れたのは、髪の毛の長い女性

ギンガ・ナカジマだった

名前から分かると思うが、スバルの姉である

「ギンガさん！」

「やつと合流出来たわね。道中にいたガジェットは、全部破壊してきたわ」

ティアナが名前を呼ぶと、ギンガはそう言った

ギンガは近くで見付けた生態ポッドが、機動六課の捜査に協力することにしたのだ

そのために地下道に入ると、フォワード陣との合流を目指していたのだ

その時ギンガは、エリオとキャロが見ていることに気づいて微笑んだ

するとエリオとキャロは、ギンガに敬礼した

「それじゃあ、指揮はティアナに任せるわよ？」

「はい」

ギンガの言葉を聞いて、ティアナは頷き

「それじゃあ、道中のガジエツトを撃破しながらレリックケースを探すわよ。キャロ、

ケースの予想ポイントは？」

とキャロに問い掛けた

するとキャロは、ケリュケイオンに視線を向けて

「この先、約600m先です！」

と言った

それを聞いて、ティアナは

「それじゃあ、GO！」

と言い、全員で走り出した

その頃、上空では

「はいっつら……」

「幻影と実機の混成部隊だね……」

「抜かれない自信はあるけど……厄介だね」

明久、フェイト、なのはの三人がガジェットII型と戦っていた

しかし途中から、幻影と実機の混成部隊になっていて、予想より戦闘時間が延びてい

た
三人の力量ならば、いくら数が多くても抜かれることはない

だが、戦闘時間が伸びれば、フォワード陣へのフォローに向かうのが遅くなってしまう

う
すると、なのはが

「フェイトちゃん、アキ君。フォワード陣のフォローに向かって。こいつらは、私が何とかするから」

と言った

「何とかするって言っても」

「まさか、リミッターを解除するつもり？」

なのはの言葉を聞いて、フェイトはそう問いつけた

実は隊長陣は、魔力にリミッターを掛けていたのだ

その理由が、部隊の保有魔力量制限である

隊長陣

特に、なのは、フェイト、はやての三人の魔力量は近代では並外れた魔力量であり、三

人で部隊魔力量制限を余裕で突破してしまうのだ

そこではやてが弄したのが、隊長陣のリミッターだったのだ

それをすることにより、なんとか部隊魔力量制限をクリアしたのだ

そして、リミッターの解除権限を有しているのは、機動六課設立に当たり後ろ楯になった二人

クロノ・ハラオウンとカリム・グラシアの二人が隊長陣に一回ずつ有しているのだが、その二回は、今の機動六課の切り札である

その二回を使ったら、次は何時リミッターを解除出きるようになるか分からないだから、おいそれと使う訳にはいかないのだ

その時

『待ちいや。隊長権限で、なのはちゃんの案は却下します』

とはやてから通信が届いた

しかもはやては、その身にバリアジャケットを纏っていた

「はやてちゃん!?!」

「なんで騎士甲冑を!?!」

となのはとフェイトが驚くと

『今から私が、超長距離魔法で撃滅するわ。だから三人は、ヘリとフォワード陣のフォ

ローに行つて』

とはやてが言つた

「任せて、大丈夫なんだよね」

『任せてや』

明久が問い掛けると、はやては笑顔で親指を立てた

それを見た三人は、海上上空から廃棄都市区画の方に向かった

そしてはやては、通信ウインドウを別に開き

「それで、間違いないんやな。プレシアさん？」

とプレシアに問い掛けた

するとプレシアは

『ええ、間違いないわ……この事件は、スカリエツティが主導してるわ』
と告げた

新たな相手

「あ、ありましたー！」

と言ったのは、広い空間にてレリックケースを見つけたキヤロである
ギンガと合流後、フォワード陣はレリックの波長を追い掛けて今居る場所に到着
全員で探していたのだ

そして、見つけたレリックケースをキヤロが持ち上げていた時だった
エリオは、何かを蹴る音を聞いた

その直後、数発の魔力弾が放たれてキヤロの間近の地面に着弾
キヤロは、その爆発で吹き飛んだ

「ぎゃあああ!!？」

「キヤロ!？」

吹き飛んだキヤロを見て、スバルがキヤロの名前を呼んだ
その直後、エリオが動いた

エリオは高く跳ぶと、空中に現れた蟲人間に刃を振るつた
蟲人間は手甲で防ぎ、鉤爪をエリオに繰り出した

その一撃をなんとか防いだが、エリオはキャロ近くの壁に叩き付けられた

「エリオくん!？」

「僕は……大丈夫……キャロ!」

エリオの声と視線で、キャロは自身の手から離れたレリックケースの方を見た
そのレリックケースを、一人の少女が拾っていた

長い紫色の髪が特徴の少女だった

「ダメ!」

「……邪魔」

キャロが回収しようとしたが、先にその少女が回収

その少女に至近距離で魔力弾を放たれて、吹き飛ばされた

「キャロ!?! があつ!?!」

そのキャロを受け止めようとしたが、エリオでは受け止めることが出来ずに二人は壁に叩き付けられた

「こらあ! 君! それは危ないから、こっちに渡して!」

スバルがそう言うが、少女は無視

離脱しようとした

だが、その背後からティアナが滲むように姿を現して

「ごめんね……それ、本当に危ないから」

と言いながら、その少女の首筋に魔力刃を当てた

すると、その少女を助けようとしたのか蟲人間が動こうとしたが

「動かないで」

とギンガが押さえた

そして、スバルが近づいた時だった

《相棒！》

とスバルの愛機、マツハキヤリバーが警告を発した

「つつ!?!」

スバルは直感に従い、一気に後退した

その直後、一発の魔法が地面に着弾

、莫大な音と光が発せられた

それにより、一時的に全員の視界が封じられた

その隙を突いて、蟲人間が一瞬にして少女を拘束していたティアナを攻撃

ティアナを蹴り飛ばし、少女を解放

地面を転がったティアナは、転がりながらも少女を狙って魔力弾を発射

その魔力弾は、間に入った蟲人間によって防がれた

「中々堅いわね、あいつ……召喚獣かしら」

ティアナはそう言いながら、立ち上がった

その時、上から小さな影が降りてきた

その小ささは、ラインに近かった

「つたく、一人で行くからだぞ。ルールー」

「アギト……」

ベルカ式融合器

アギトの言葉を聞いて、少女

ルーテシアは、アギトを見上げた

そしてアギトは、ティアナ達を見て

「さあさあ、このアギト様が相手してやらあー」

と威勢よく、声を張り上げた

そしてティアナ達に、一気に魔法を放った

火炎弾を避けて、ティアナ達は近くの柱の裏に隠れた

「この後、どうしようか……」

「私達で回収したいですが、あの子の実力が高い……ウィータ副隊長を待ちましょう」

ギンガの問い掛けに、ティアナがそう答えた

すると

『いい判断だ。ナイスだぞ、ティアナ』

とヴィータから念話が繋がった

『ヴィータ副隊長!』

『今、何処ですか?』

『お前達の真上だ』

ティアナの問い掛けに、ヴィータがそう答えた

その直後

「おりやああああ!」

とヴィータが、天井を突き破って現れて、蟲人間

ガリユーに一撃叩き込み、弾き飛ばした

更にその後に、リインが現れてルーテシアとアギトの居た場所を狙い

「捕らえよ、凍てつく足枷! フリーレン・フェッセルン!」

と氷の捕縛魔法を発動して、二人を氷の幕で捕まえた

その頃空では、はやてが幻術と実機のカジエツト隊を殲滅しつつあった

そして、明久達三人はフォワード陣との合流を目指していた

この後、事態は急展する

捕縛

「よ、待たせたな。お前ら」

「遅くなつたです」

とヴィータとリインの二人は、フォワード陣とギンガに声を掛けた

すると、スバルが

「ヴィータ副隊長、強い……でも、管理局員が施設を壊しているのかな……」

と呟いた

すると、ティアナが

「まあ、ここは廃棄区画だし、いいんじゃないかしら……」

と言った

するとヴィータが、蟲人間が激突した壁に行き

「ちい、逃げられた」

と舌打ちした

壁の穴の中に、蟲人間の姿が無かつたからだ

その直後、リインも

「こちらもです、逃げられました」

と悔しそうに言った

氷の中に、ルーテシアとアギトの姿が無かったのだ

その直後だった

地震が起きたのだ

「なんだ!？」

とヴィータは、構えた

すると、意識が戻ったキャロが

「先程、大きな召喚が行使されたみたいです。多分、その召喚された生物が原因かと」

と言った

そして、それは正解だった

地上に転移したルーテシアが、新しい召喚蟲を呼び出したのだ

それが、地震を起こしていたのだ

「スバル!」

「はい! ウィングロード!」

ヴィータに呼ばれて、スバルは意図に気付いた

スバルの魔法、ウィングロードで道を作れ、ということだったのだ

それを見たヴェータは

「崩壊する前に、脱出するぞ！ 先頭をスバル！ 殿はアタシとリインが行く！」

と指示を出した

それを聞いて、ティアナは

「はい、キャラ」

とキャラに落とした帽子を返した

キャラはそれを受け取り、被ってから

「ありがとうございます」

と頭を下げた

すると、ティアナが

「キャラ、レリックの封印、お願いしていい？」

とキャラに言いながら、ギリギリで取り返したレリックケースを掲げた

それを見て、キャラは

「はい、大丈夫です」

と返答した

するとティアナが続けて

「それと、ちよつと考えがあるから、手伝ってくれる？」

と言った

場所が変わって、地上

「マズイよ！ ルーラー！ これはヤバいって！」

とアギトは焦っていた

その理由が、今二人が居る廃ビル屋上の下に見える光景にあった

なにせそこには、大型のカブトムシのような召喚蟲

地雷王が居た

地雷王はその場で、地面を揺らしていた

それが、地雷王の能力の一つだった

地雷王は雷撃と地震を起こす能力を有しているのだ

ルーテシアはそれを使い、地下のフォワード陣達を生き埋めにするつもりなのだ

「大丈夫……あいつらの実力なら、ギリギリで耐えるはず」

とルーテシアは言うが、アギトは

「あいつらが耐えたとして、レリックはどうやって回収するんだよ！ 簡単には見つけ

られないぞ！」

と反論した

それにルーテシアは

「大丈夫……セインに頼むから」

と言った

しかし、アギトは

「あの変態博士なんて、信じないほうがいいって！ あいつら、口はいいけど、何を考
てるか分かったもんじゃないって！」

と言った

実はアギトは、博士

ジエイル・スカリエツィを信じていなかったのだ

その直後だった

轟音が響き渡り、地雷王が居た場所が大きく陥没していたのだ

それを見て、アギトが

「やっちまった……」

と肩を落とした

それを無視して、ルーテシアは

「ガリユー、怪我は大丈夫……？」

と問い掛けた

その問い掛けに対して、蟲人間

ガリユーは、無言で恭しく一礼した

どうやらガリユーは、喋れないようだ

「戻って……私は、アギトが居るから大丈夫」

ルーテシアがそう言うと、ガリユーは姿を消した

そしてルーテシアは、地雷王に視線を向けて

「地雷王も……」

と言い掛けた

その直後、地雷王はバインドで拘束された

それに驚いていると

「あー」

とアギトが、脱出し接近してきていた一同に気付いた

そのタイミングで、ある廃ビルの屋上に陣取ったティアナが狙撃

しかしその狙撃を、ルーテシアとアギトは回避した

そしてアギトは、魔力弾を放った

それをティアナは、跳躍して回避

ルーテシアは元道路に着地した

その直後、ルーテシアの下にソニックムーブでエリオが奇襲して押さえた

「ルーラー!？」

とアギトが驚いている間に、リインがアギトに近づき
「ここまです」

と宣告し、アギトをバインドで拘束した
この後、スカリエッティは動きを見せる

戦闘機人

フオワード陣とヴィータがルーテシアとアギトを捕まえた頃、少し離れたビルの上に二人の女が居た

片方は、長い茶髪を三つ編みにして眼鏡を掛けていた

そしてもう片方は、シヨートカットに布に包まれた長い物を背負った女だった

その二人に共通しているのは、英数字の彫られたプレートが胸元に付いたボディースーツだった

彫られている英数字は、眼鏡を掛けているのがIV

そして、シヨートカットの方がXだった

その二人は、遠くの空を見ながら

「どうお？ デイエチちゃん。ちゃあんと見えてる？」

「ああ……雲も無いし、空気も澄んでるからよく見える」

と会話していた

そして彼女達が見ていた遥か先には、ヴィヴィオとシャマルを乗せた六課のヘリが飛んでいた

しかしその距離は本来、人間に見える距離ではない

見えたとしても、ゴマ粒位だろう

だが、この二人にはハッキリと見えていた

その理由は至って単純

この二人が、普通の人間ではないからだ

二人は戦闘機人と呼ばれる存在だ

戦闘機人

それは、人間をベースにしながら、薬物と外科手術で人間以上の能力を得た存在である

その時だった

『クアットロ』

と通信回線が開いた

「ああら、ウーノ姉様」

ウーノ

彼女もまた、戦闘機人である

『準備はどうかしら?』

ウーノがそう問い掛けると、クアットロは布に包まれていた大砲を構えている。ディエ

チを見て

「終わりましたあ」

と答えた

そのしゃべり方は人を小バカにしたようだが、ウーノは気にした様子はなく

『そう、良かったわ。それと、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ』

とクアットロに伝えた

それを聞いて、クアットロは思い出したという風体で

「ああ、そういえばチビ騎士達に捕まってましたねえ」

と言った

そして、鋭い視線で

「フオローします?」

とウーノに問い掛けた

するとウーノは、頷きながら

『お願い』

と言つて、通信回線を切った

それを聞いて、クアットロは念話で

『ルーテシアお嬢様あ。捕まっているようですが、手を貸しましょうか?』

とルーテシアに問い掛けた

するとルーテシアから、念話で

『……クアットロ、お願い』

と返答がされた

だからクアットロは

『セインちゃあん、ルーテシアお嬢様の救出、お願い』

と念話で、姉妹に告げた

『了解！』

セインと呼ばれた少女は、道路の中に姿を隠していた

戦闘機人には、それぞれ特殊能力を宿している

セインと呼ばれた少女の場合は、無機物の中で水中のように泳げるのだ

そしてデイエチの場合は、遠距離砲撃能力だ

デイエチの持っている大砲

ヘヴィバレルにエネルギーが貯まっていくのを見ながら

『ああ、そうだ。ルーテシアお嬢様。そのチビ騎士さん達に伝言を……大事なヘリは、放っておいていいの？ 貴女はまた、守れないかもね』

と言った

その直後、デイエチのヘヴィバレルから極太の砲撃が発射されて、ヘリが飛んでいた
場所で爆発が起きた……

奪取戦

「そんな……」

「ヘリが……」

「ヴァイス陸曹……シヤマル先生が……」

ルーテシアを詰問していた一同からも、ヘリが飛んでいた場所で爆発が起きたのが見えていた

そしてそれを見た一同は、絶句していた

その直後

「お前えええ!!」

とヴィータが、ルーテシアに掴みかかった

すると、それを見たギンガが

「ヴィータ二尉、落ち着いてください!」

と制止した

しかしヴィータは

「うるせえ!」

とギンガを振り払い

「おい！ 他にも仲間が居るのか!? 言えっ!!」

とルーテシアに怒鳴った

その直後

「エリオ！ 足下！」

とティアナが声を上げた

エリオは機敏に反応し、足下に視線を向けた

その瞬間、道路のコンクリートの中から人影

セインが現れて

「ほい、ごめんねえ」

と言いながら、エリオをスバルの方に蹴り飛ばした

そして同時に、エリオの近くに居たキャロが持っていたレリックケースを奪取

セインに反応したヴィータが振り向いた時には、セインはヴィータの頭上を跳躍し、

ルーテシアの背後に着地

ルーテシアと一緒に、道路の中に姿を消した

その直後に、ティアナが撃った魔力弾が命中したが、コンクリートを僅かに穿っただ

けだった

「逃げられたっ!」

ティアナが悔しそうに舌打ちしていると、ヴィータが拳を道路に打ち付けて「あいつら、落ちてないよな……無事だよなっ!」

とすがるように、爆発が起きた場所に視線を向けた

場所は変わり、砲撃地点

「うふふのふー♪ どおう? 私の完璧な作戦は?」

「わかったから、黙って」

上機嫌で話し掛けたクアットロにそう返して、デイエチは爆発地点を見ていた

最初は爆煙で見えなかったが、少しするとその煙の中から無傷のヘリが姿を見せた

「無傷? ……なんで……」

無傷のヘリを見て、デイエチは最初困惑した

だが、すぐにその理由に気づいた

何故ならば、そのヘリを守っている人物が居たからだ

『スターズー、ヘリの防衛に成功!』

スターズー

なのはが、ヘリを守ったのである

しかし、なのはには魔力に二段階のリミッターが掛けられている

それと砲撃の威力を考えると、防ぎきれない可能性の方が高い
それを変えたのが、明久の存在だった

明久はなのはが、ヘリの防御の回った時に支援魔法を使ったのだ
魔法防御力を上げる魔法を

それにより、なのはが展開したシールドはデイエチの砲撃を防ぎきることに成功した
のである

「出力最大本気じゃなかったとはいえ、マジで……？」

とデイエチが呆然としていると、二人の頭上から多数の魔力弾と魔法が降ってきた
それに気づいた二人は、隣のビルの屋上に跳び移って回避した

そこに

「見つけた！」

「逃がさない！」

とフェイトと明久が現れた

それを見た二人は、逃走を始めた

それを、フェイトと明久は追い掛けながら

「止まりなさい！」

「公務執行妨害と殺人未遂で君たちを逮捕する！」

と勧告しながら、デイエチとクアットロを追いかけ始めた

しかし二人は止まらず

「今日は遠慮しときますう！」

とクアットロが言った

そしてクアットロは

「IS、シルバーカーテン！」

と彼女固有スキルを発動した

彼女の固有スキル、シルバーカーテン

それは、彼女が望む通りに幻術を発動出きる能力である

そしてそのシルバーカーテンにより、二人の姿はフェイトと明久からは見えなくなつた

しかし、二人は慌てない

何故ならば

『アキ君、フェイトちゃん！ こっちの準備は完了しとる！ 直ぐに離脱や！』

『了解！』

優秀な指揮官が居るのだから

それに気付かず、デイエチとクアットロの二人は道路に着地して

「離れた？」

「なんで？」

と姿を現した

その直後、二人は膨大な魔力を感じて視線を上げた

頭上に見えたのは、魔法の準備を完了させていたはやてだった

「闇に沈め……デアポリック・エミツション!!」

はやてが詠唱したのは、広範囲殲滅空間魔法

デアポリック・エミツションだった

はやてが放ったそれは、爆発的な勢いで広がっていく

『うわあああああ!?!』

その魔法から逃げるために、二人は反転し急速離脱を開始した

しかし、完全に避けることは出来ずに二人は被弾

ダメージで、速度が低下した

しかし、二人は安堵していた

逃げ切れたと

しかしそこには、待ち伏せが居た

「トライデント……」

「デイバイン……」

ウルカヌス
「火神招来……」

そこを、フェイト、なのは、明久の三人が狙っていた

しかも三人は、既に準備を終えていた

「スマツシャー！」

「バスター！」

「砲撃！」

そして三人が放った砲撃が、二人の居た場所に直撃

大爆発を起こした

『ビンゴ！』

と言ったのは、部隊指揮所ロングアーチにて管制をしていたシャーリーである

どうやら、仕留めたと思っただらしい

しかし、なのはが

「違う！ 逃げられた！」

と告げた

なのはに続けて

「当たる直前に、横槍が入った！ 追跡して！」

とフェイトが言った

「恐ろしく速い奴だ！ SE方面に飛んでった！」

『了解！』

明久の言葉を聞いて、シャーリー達は追跡を始めた

しかし、痕跡は途中で途切れてしまった

『すいません……逃げられました……』

とシャーリーが言うと、続けてヴィータから

『悪い、こっちは一度捕縛した奴らに逃げられた。しかも、レリックまで奪われた……
フォワード陣に非は無い……完全にアタシの失態だ』

と通信が来た

しかし、その直後に

『それですが、こちらの独断で』

とティアナから通信が繋がった

すると、キャロの帽子の中からレリックを出した

確かに、レリックケースは奪われたがそれは空だったのだ

ティアナとキャロは、レリックケースからレリックを取り出すと直接封印を施して、

キャロの帽子の中に隠したのだ

相手はそれに気付かず、空のレリックケースを持っていったのだ
ティアナの策の勝ちだった

相手には逃げられたものの、レリックは確保した
痛み分けの形だろう

そして一同は、帰還のために一ヶ所に集まった

その直後だった

トーン

と音が聞こえて、一同は黄昏空間に取り込まれた

策謀家

「しまったー！」

「このタイミングで来るなんて!？」

気付けば六課一同は、黄昏空間に取り込まれていた

最初は、全方位警戒だった

その中で一番最初に気付いたのは、スバルだった

「もしかして、あいつが……?」

と言ったスバルの視線の先には、エリオやキャロと同年代と思われる一人の子供が居た

すると、明久が

「間違いないね……策謀家、ゴレだ」

と言った

次の瞬間、明久にゴレの前に浮いていた本が開いた

その直後、明久が

「ウルカヌス・クーー！」

と火神を召喚した

その直後、ちょうど中間地点で二色の炎

蒼い炎と紅い炎が激突

爆発を起こした

その時になって、はやては気付いた

「あれは、魔導書か!？」

ゴレが持つているのが、魔導書だと

そして、それを証明するかのように次々と魔法が発動

六課に放たれた

しかし、六課もただ座して喰らうだけじゃない

一気に命中位置から散開・離脱

そして、黄昏因子を持つメンバーは

「スケイス!!」

「イニス！」

「フィドヘル!!」

と力を解放した

するとティアナは

「そういえば、私にも……」

とあの後聞いた明久からの説明で、黄昏因子を有していることを思い出した
だが、解放の仕方が分からない

その時

「ティア、危ない！」

とスバルが、ティアナを抱き締めながら高速で移動した

その直後、先程までティアナが居た場所に十数発の炎弾が着弾
大爆発を起こした

「ティア、考え事は後だよ！」

「ありがとう、助かったわ！」

スバルにそう言つて、ティアナはクロスミラージュを構えた

確かに、今のは自分が悪かった

と、ティアナは自身を戒めた

戦場で動きを止めたら、待つのは死のみ

こんな所で死ぬわけにはいかなないと、ティアナは次々と魔力弾を撃つた
しかしティアナの撃つた魔力弾は、当たる直前に弾かれた

「魔法が効かない!？」

ティアナが驚いた直後、フェイトが持ち前の機動力を活かしてゴレの後ろに回り込んだ

そして、鎌を振り下ろした

だが、その鎌も直撃する直前に弾かれた

「直接攻撃も効かない!?!」

驚きながらもフェイトは、ゴレが放った火炎弾を回避した

だが、攻撃が効かないという事態に一同はどうすればいいのか迷った
すると

《皆、落ち着いて》

とカイトが言った

そしてカイトは、続けて

《ゴレは、対魔・対物理絶体防壁を持つてるよ》

と告げた

それは即ち、倒すことは不可能ということではなからうか

それに、一同が絶望仕掛けた

だが、カイトが

《だけどそれは、二枚に別れてる。そして、二枚同時には展開出来ない》

と言った

その言葉の意味を、はやてがいち早く理解した

「つまり、同時に攻撃すればええってことやな！」

はやてがそう言った直後に、なのはとフェイトが動いた
だが

「いけない！ 乱数回避！」

と明久が声を張り上げた

その瞬間、雷霆が広範囲に降り注いだ

その直撃を受けて、なのはとフェイトは墜落

一時的に、行動不能に陥った

ゴレが放ったのは、広範囲雷撃魔法

ランセオル・ルフだった

なのはとフェイトの二人は咄嗟に障壁を展開したが、ランセオル・ルフはその障壁を
易々と貫通

威力は減衰されたが、直撃を受けたなのはとフェイトの二人は体が痺れてマトモに動
けなくなってしまった

これで、戦える黄昏因子保有者は明久とキャロの二人

余りにも、博打に過ぎた

その時だった

『呼べ、我が名を！』

とティアナの頭の中で、声が聞こえた

その瞬間、ティアナは言い知れない恐怖に体が震えた

自分が自分でなくなるといふ恐怖に

だがティアナは、それをグツと飲み込んだ

そして、前を見つめて

「お願い、来て……メイガス!!」

とその名前を口にした

ゴレ

ティアナがメイガスの名前を呼ぶと、ティアナの右手には一挺の銃が現れた。見たことない銃だと言うのに、不思議と手によく馴染む。

そしてティアナは、調子を確かめるようにその銃をクルクルと回した。初めてのはずなのに、使い方が分かる。

「明久さん！」

ティアナは明久の名前を呼ぶと、魔力弾を放った。

その威力は、本来ならば数秒の貯めが必要な程だったが、一瞬で放てた。するとティアナの意図を察した明久が、双剣を構えて突撃。

ティアナの魔力弾に隠れるように進むと、少し手前で跳躍。

ゴレの真上を取った。

(とった！)

明久はそう思いながら、双剣を振り上げた。

その直後、明久を爆撃が襲った。

蒼炎による防御も完全には間に合わず、明久は吹き飛ばされた。

「がはっ!？」

吹き飛ばされた明久は、遺跡らしき壁に激突
血を吐き出した

「アキ!？」

「今の、ほぼ同時だったのに!？」

今のタイミングで迎撃されるとは思わず、ヴィータとなのはは驚いた
すると、カイトが

《まさか、0.2秒で明久を迎撃するなんて……これは、完全にゴレが目覚めてる》
と言った

「カイト、どういうこと?」

カイトの話聞いて、フェイトが問い掛けた
すると、カイトは

《ゴレはその昔、双子の戦術家にして魔導師だったんだ……それを封印したことで、一つの体に二つの魂が内包されることになった……その影響か、二人分の思考が可能になった……》

と語った

それを聞いて、はやてが

「つまり……一人やのうて二人を相手にしているのだ同義なんやな」と言った

それを聞いて、カイトが

《そうだね……こうなる前に倒しておきたかつただけ……言っても仕方ない……撃破出来る可能性は、0.1秒以内に物理と魔法による攻撃を叩き込んで障壁を破壊し、相手が障壁を再生しきる前にデータドレインを当てるしかない》

と言った

それは、最早無理難題に近い要求だった

要求される攻撃タイミングは、事実上物理と魔法による同時攻撃

更には、何時復活するかも分からない障壁が復活する前にデータドレインが出来るようにする

そして、データドレインと対八相戦の要たる明久は先程の攻撃が原因なのだろう、意識を失っているようだった

傷はカイトが回復したらしく、パツと見では見当たらない

しかし、吐血する程のダメージを負ったのだ
相当なダメージだったのが伺える

そんな明久が、何時目覚めるかは分からない

だが、明久が目覚めるまでにやり遂げなければならぬ

六課一同はそう気合いを入れて、ゴレに向き合った

そして、指揮官たるはやてが

「ほな、皆……いくで!!」

と号令を下し、六課陣は明久抜きでゴレと交戦を開始した

ゴレ戦2

「シグナム、フエイトちゃん！」

はやてが指示を出した直後、二人は電光石火の速さでゴレに向かった
しかし、それを阻むように樹木が乱立

二人が僅かに足を止めた瞬間、二人に黒い魔力弾が直撃した
しかし、その威力は大したことはなかった
なぜならば、それは足止め

その本命は、二人に降り注いだ岩石だった

岩石の直撃を受けて、二人は下敷きになった

死亡はしていないが、少しの間二人は抜け出せないだろう
だが、硬直はしない

今度は、間髪入れずになのはとヴィータが動いた

二人は同時に、魔力弾と鉄球を発射

その数は、合わせて30

それらは複雑な軌道を描きながら、ゴレを包围するように向かった

しかしそれは、先程よりも密度を増して生えた樹木に遮られた

その直後、二人は急速上昇した

すると、二人が居た場所の地面から石槍が乱立した

もしそのまま居たら、貫かれていたかもしれない

二人が回避出来たのは、僅かな震動だった

その震動を感じた二人は、急速上昇

それが、二人を救った

もし、前進や後退、左右への回避だったら、間違いない貫かれていた

半径10 m

その範囲で、石槍が乱立したのである

回避は不可能だったろう

上昇したのは、一重に勘

経験からくる勘が、二人の命を救った

すると二人は、ゴレを狙って再び攻撃した

だがその攻撃は、ゴレが放った魔法で迎撃された

その直後、二人を雷撃が襲った

それは、明久も多用する雷帝将来である

それにより、空中に居た二人を攻撃
撃墜したのだ

これにより、なのはとヴィータの二人も行動不能に陥った

六課のエース四名が、あつという間に行動不能に追い込まれた

その事実を目の当たりにして、フォワード陣は驚愕した

なのはとフェイトの二人は、管理局でも名の知れた魔導師である

それも、二つ名がある魔導師だ

なのはは、エース・オブ・エース

フェイトは、心優しき閃光。もしくは、金色の閃光である

そして、シグナムとヴィータの二人は名の知れた古式ベルカの騎士である

古式ベルカは使い手が少なく、更に扱いが非常に難しい魔法である

そして、騎士と呼ばれるようになるにはそのベルカ式を使いこなさなければならない

ベルカ式とミッド式魔法

それが、今現在使われている魔法である

ミッド式魔法は集団による戦闘に比重を置いてあるのに対して、ベルカ式魔法は個人

戦闘に比重が置かれている

しかも、ミッド式は遠距離戦闘重視に対してベルカ式は近距離戦闘重視となっている

しかし、そのベルカ式を使いこなすということは近距離戦闘では他の追隨を許さない強さを得ることになる

事実、シグナムとヴィータの二人はなのはとフェイトの二人と肩を並べることが出来る実力者である

しかし、その二人も行動不能になっている

はやてもベルカ式の使い手だが、はやてはベルカ式の中では珍しい遠距離型

しかも、広範囲攻撃型魔導師である

だが、そのはやてを戦わせる訳にはいかない

はやては、六課の指揮官なのだから

「フォワード陣、行けるか？」

「はい、やりましょう」

「やりますー！」

はやての問い掛けに、フォワード陣四名はそう返答した

ここから、フォワード陣の攻防戦が始まる

ゴレ戦3

はやての指示に従い、フォワード陣は動いた

とはいえ、黄昏因子を保有しているのはティアナとキヤロの二人

その二人が中心になって、動くしかない

しかし、キヤロとティアナは両方とも後方支援型だ

前衛であるスバルとエリオは、黄昏因子を保有していない

本音を言えば、スバルかエリオのどちらかが黄昏因子を保有していてほしかった
しかし、無い物ねだりしても状況は変わらない

「キヤロ！」

「合わせますー！」

ティアナが呼び掛けると、キヤロはそう言った

そして二人は、攻撃を開始した

キヤロはフリードと共に、火炎弾と魔力弾を発射

ティアナは右手にクロスミラーージュを持ち、左手に銃を持って銃撃を開始した
しかし二人の攻撃は、ゴレが放った魔法で迎撃された

分かってはいたが、やはりかなりの使い手のようだ
迎撃に最適な魔法を一瞬にして、放っている

以前カイトに聞いたが、古代魔法はかなりの種類の魔法がある
その中から、状況に合わせて最適な魔法を選択し発動する

明久は魔法剣士という部類故、その魔法は発動速度に優れた物が大半を占めている
しかしゴレは、魔導師スタイル

多種多様な魔法を使いこなし、発動速度も早いものから遅い物
威力も、高い物から低い物と様々だ

そして今放ったのは、威力は低いが弾幕の形成に適した魔法だった
それにより、二人が放った魔法を迎撃したのである

古代魔法の種類は、優に百を越えるらしい
その中から、ゴレは一瞬にして選択し発動した

封印された時の双子魔導師のレベルの高さが、分かるだろう
しかし、キャラとティアナは諦めなかった

キャラはイニスの能力を発動
幻影を周囲に配置

それに同調し、ティアナも幻影魔法を発動

二人の幻影の数は、合わせて三十を越えた
しかしゴレは、即座に魔法を発動

それは、広範囲魔法

ウルカス・ルフ
火神招来だった

最初に爆発が起きてから、炎の竜巻が発生
二人が作り出した幻影は、全て消え去った
そして、誰も居なくなつた

そう、倒れていたフェイトやシグナム

なのは、ヴィータ、明久の姿も消えたのだ

流星に予想外だったのか、ゴレの動きが止まつた

その時

「はああああー！」

とゴレの頭上に、ティアナの姿が現れた

それを見たゴレは、瞬時に魔法を発動

ティアナに、魔力弾が直撃した

その直後、そのティアナの姿が掻き消えた

そう、それも幻影だったのである

その瞬間、ゴレを挟むようにスバルとエリオの姿が現れた
それを見たゴレは、広範囲に弾幕を形成した

エリオはそれを、槍を楯代わりにして防御し後退

しかし、スバルはその身に纏ったオーラ障壁で防御し肉薄
拳を繰り出した

それをゴレは、対物理障壁で防いだ

その直後、その対物理障壁が砕け散った

「それを、待ってたのよ」

なんと、スバルの背後に姿を消したティアナが居たのだ

そしてティアナは、スバルの拳が当たったのと同時に魔力弾を発射
対物理障壁を破砕したのである

これにより、ゴレは障壁展開能力を一時ロストしたことになる

後は、データドレインが出来るようにプロテクトブレイクするのみ
そこに

「後は」

「私達に任せて」

と、明久、なのは、フェイトの三人が復帰してきた

それは、キャラの回復魔法だった

キャラの回復魔法により、明久は意識を回復

なのは痺れを回復させ、フェイトは骨のヒビを回復させたのである

そして、三人の攻撃が始まる

ゴレと情報整理

「フェイト、なのは！」

「大丈夫！」

「合わせるから！」

明久が呼び掛けると、二人はそう返答した

すると、先になのはが

「炎の壁、策謀家、退路を絶つ」

と言った

その瞬間、ゴレを囲うように燃え盛る業火による壁が作られた

それを確認した瞬間、明久は上から

フェイトは正面から突撃した

ゴレは僅かに考えると、二人に対して迎撃を開始した

しかし明久は、蒼炎を全身に纏って防御

フェイトは、得意の機動で残像を残すように回避した

そして二人は、視線を合わせると

『連撃！』

と息を合わせて、攻撃を繰り出した

フエイトは横回転し、明久は両手に持った双剣を繰り出した

『連空双牙！』

二人の攻撃を受けて、ゴレの前に浮いていた本台は破壊

更に、ゴレの片腕が飛んだ

しかしそれでも、ゴレは逃げ出した

自ら炎の壁に飛び込んだのである

そして、走り出した

その時、ゴレの側頭部に魔力弾が命中した

それを撃ったのは、ティアナだった

ティアナはゴレが炎の壁に飛び込んだ瞬間に構えて、撃ったのである

その直撃を受けて、ゴレは転倒

そして、二度目の何か割れる音が聞こえた

それを聞いた明久は、左腕を掲げて

「カイト、腕輪！」

と言った

次の瞬間、手首回りに透明な板が花卉のように展開された
そして明久は、ゴレに狙いを定めて

「データドレイン！」

とデータドレインを発動した

そして、明久が放ったデータドレインはゴレに命中

ゴレは、光球となった

そしてその光球は、明久の横を通り過ぎてはやての元に飛んだ

それを見た明久は

「やっぱりか！」

と声を上げた

すると、はやてが一瞬表情を痛そうにして

「策謀家・ゴレ」

と呟いた

すると、はやての胸の中に光球は消えた

それに連動し、黄昏空間も閉じられた

それを確認した六課一同は、負傷の確認をした後に六課隊舎へと帰還した

そして、数時間後

「ほな、状況の確認をしようか？」

と会議室に集まったメンバーを見たはやてが言った

すると、まずなのはが

「まず、レリックは二つ共無事回収。封印を施して、地上本部に移送したよ」

と言った

そして続けて

「それと、保護した子は聖王教会の病院に搬送。衰弱してるだけだつて」

と報告した

それを聞いて、はやては頷きながら

「ん、了解や」

と言った

すると、シャマルが手を上げて

「フォワード陣の怪我は、問題ないわ。十分に、治療可能範囲内よ」

と報告した

それを聞いて、はやては頷き

「ん、了解や……さて、本題や」

と告げた

それを聞いて、集まっていた一同

はやて、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、ユーリ、デイ
アーチエ、シュテル、レヴィ、幸村

の表情が、真剣なものに変わった

すると、フェイトが

「まず、今回のレリックの相手……ジエイル・スカリエツティ」

と言うと、はやての背後にあつたモニターに写真やデータが表示された

長い紫色の髪が特徴の男性だった

「ジエイル・スカリエツティは違法な人体実験を中心にした広域指名手配犯……人造魔
導師計画にも関わってる」

と説明したフェイトの表情には、複雑な感情が入り交じっていた

フェイトの名前の由来となった計画

人造魔導師計画

通称、プロジェクトFATE

フェイトは、そのプロジェクト名がそのまま名前となった

それに関わっていたのが、フェイトの母親

プレシア・テスタロッサだった

ジェイル・スカリエツティはその人造魔導師計画の根幹理論を構築した張本人である
プレシアはその理論を使い、死んだ娘

アリシアを甦らせようとしたのだ

しかし、産まれたのは見た目はアリシアでも全然違った

だからプレシアは、そのフェイトを使ってジュエルシードを集め、消えた世界

アルハザードに到ろうとしたのだ

しかし失敗に終わり、今に至る

「このジェイル・スカリエツティが、今回の事件に関わっているのか……」

「可能性が高いね」

シグナムの言葉を聞いて、フェイトは同意しながら頷いた

すると、はやてが

「ほんなら、そのことを念頭に置いて訓練等はお願いな」

となのはに言った

それになのはが頷くと、はやてが再び

「さて次は……黄昏因子に関してや」

と言った

そして彼女達は、黄昏因子に関することを知る

情報

「黄昏因子は、全部で8つ……スケイス、イニス、メイガス、フィドヘル、ゴレ、マハ、タルボス……そして蒼炎」

とはやてが言うのと、司会進行のシャーリーが今まで交戦した八相と明久が表示された
すると、ディアーチエが

「8つ? 9つだろう、何を言っている」

と言った

それを聞いて、はやてが

「9つやって?」

と眉をひそめた

すると、ディアーチエが

「うむ。タルボスの次。八相最後の一つ……再誕コルベニクだ」

と言った

それを聞いて、なのはが

「再誕って確か……フィドヘルが告げた預言に出てた……」

と呟いた

「死の恐怖が再誕を貫きし時、世界は再誕する……だったっけ？」

「確かね」

フエイトが思い出しながら言うと、なのはが頷いた

すると、シユテルが

「私たちも、詳しくは知りません……しかし、再誕は自浄のようなもの……と文献には書かれていました」

と言った

「自浄のようなもの？」

「うむ……世界をあるべき姿に戻す……とな」

なのはが首を傾げると、ディアーチエがそう答えた

そしてはやては、ディアーチエが言った言葉を聞いて

「うーん……要領を得んなあ……」

と漏らした

そして、最後に

「そいつの戦闘に関して、なんか知らんか？」

と問い掛けた

すると、ユーリが

「それが、一切記録が残ってないんです……まるで、残しちゃいけないとも言おうように」

と言った

それを聞いてはやてが

「どういうことや？」

と唸った

すると、シユテルが

「分かりませんが……恐らくは辛い選択になるのではないかと……予想に過ぎませんが」

と告げた

シユテルのその言葉を最後に、会議は終了

集まったメンバーは三々五々と解散した

その後フェイトは、ユーノに連絡を取っていた

「ユーノ、今いいかな？」

『なんだい？ フェイトからなんて、珍しいね』

フェイトが連絡を取ったら、逆さまにユーノが映った

無重力空間の無限書庫ならではの現象だ

「あのね、黄昏因子のことを調べてほしいの……特に、再誕コルベニクが記載されてる本を探してほしいの」

『黄昏因子って、古代ベルカより更に前か……簡単には見つからなさそうだ……』
フェイトの頼みを聞いて、ユーノはそう呟いた

黄昏因子

ひいては、古代魔法のザ・ワールド

歴史的には、今から千年以上も前になる

ザ・ワールドのことも、プレシア女史が纏めた書籍が一番詳しいほどだ
簡単に見つからないのは、フェイトも予想している

「ごめん、なるべく早くでお願い」

『分かった。最善を尽くすよ』

その会話を最後に、通信は終了

フェイトは外に出て、夜空を見上げた

見上げた先に有るのは、ミッドでは見慣れたふたつの月

しかしその月は今、まるで鮮血に濡れたように真っ赤に染まっていた

会談

会議の翌日、六課隊長陣と明久はベルカ自治区の聖王教会に来ていた

その理由は、聖王教会騎士団の責任者の一人にして時空管理局のオブザーバーの一人カリム・グラシアに呼ばれたからである

なんでも、大事な話が有るということだった

そして、明久は

「うわあ……見違えたよ、クロノ」

と着いた会議室に居た一人を見て、呟いた

そこに居たのは、時空管理局本部

次元航行艦隊提督

クロノ・ハラオウンだった

「久しぶりに再会して、第一声がそれか」

明久の言葉を聞いて、クロノは半目になりながらそう言った

すると明久は

「いや、だってさ……身長幾つ？ 今」

「確か……180だな」

明久の問い掛けに、クロノは思い出すようにそう言った
すると、明久は

「一気に伸びたし、声も低くなったね」

と言った

明久が覚えているのは、かなり小柄だったクロノだ

その身長は、当時小学三年生だったなのはと同じ位だったのだ

それが、数年で見違えてしまう程に成長していた

「いやあ……成長するもんだねえ」

「明久……上官侮辱罪というのを、知っているか？」

クロノが愛用のS2Uを構えると、明久はジャンピング土下座を敢行した

何故ならば、クロノの背後に凄まじい数の魔力刃が展開されていたからだ

それは、クロノの魔法の一つ

ステインガールブレイド・エクスキューションソフトだった

その直撃を受けたら、幾ら明久と言っても無事には終わらない

多少グダグダしたが、会談は始まった

「初めまして。私の名前は、カリム・グラシア……聖王教会騎士団に所属しています」

と言ったのは、長い金髪が特徴の美女だった

その身には、シスター服を纏っている

明久の第一印象は、優しそうな人だった

するとはやてが

「アキ君。騙されたらアカンよ？ 意外と腹芸が得意やからな」

と言った

すると、そのカリムが

「はやて？」

と笑顔で、はやての名前を呼んだ

笑顔なのだが、気迫が凄まじい

はやては思わず、先程の明久と同じようにジャンピング土下座を敢行した

一連を見たなのは達が苦笑を浮かべると、カリムが

「今日、貴方達を呼んだのは……機動六課設立の理由を説明するためです」

と言った

そして語られたのは、カリムの希少能力

予言者の著

それに、今から数年前からある事柄が記されるようになった

それは大まかに言って、時空管理局の崩壊だった

それを未然に阻止するために組織されたのが、機動六課だったのだ

それを聞いて、明久は

「相当肝いりでしょ、これ？ 新設部隊にしては、設備が良すぎる」

と言った

するとクロノが

「明久にしては、鋭いな……表向きのバックボーンは、僕と母さん。そして騎士カリムだが、極秘裏に伝説の三提督もバックボーンになっている」

と言って、その三提督の顔写真が表示された

レオーネ・ファイルス

ラルゴ・キール

ミゼット・クローベル

この三名は、時空管理局を黎明期から支え続けた三名だ

今は相談役等の役割を担っている

するとカリムが

「それと、以前から解読を続けていた物の一つが関連すると判断されました」

と言って、それを見せた

内容は古代ベルカ語で書かれていて、なのは達には内容は分からない
するとカリムが

「古き女神に選ばれし戦士倒れ、邪神が目覚める。黄昏の力を継ぎし者達力を合わせ、邪神と対峙する……勝利の鍵は、再誕……以上です」

と語った

それを聞いたはやては

「ここにきて、再誕の名前が出てきたかあ」

と呟いた

するとクロノが

「古き女神とは、一体……」

と顎に手を当てた

それを聞いたカリムが

「それは恐らく、古代ベルカより更に前……魔法がまだオカルト面が強かった時代……創生神と呼ばれる女神が居ました……その名は……アウラ」

と語った

そして続けて

「その女神により、ある騎士団が組織されました……それが、蒼炎騎士団……そして、そ

の初代団長の名前が、蒼炎の騎士、カイト」と言った

それを聞いた一同の視線が、明久に集中した

明久はその内の二つに、関連している

「詳しくは、残っている文献が非常に少ないので分かりません……女神アウラも、古代ベルカに入った頃には見られなくなつたと記されています」

カリムがそう言った
すると

〈アウラか……懐かしい名前を聞いたなあ〉

とカイトが言った

「カイト？」

明久が問い掛けると、カイトは

〈もう予想している人も居ると思うけど……僕は、その初代団長カイトの意識や記憶データから作られた再初期のデバイスさ〉

と語った

歴史

「以前にはやてから名前を聞いていて、まさかとは思ってましたが……本当にそうだったんですね」

と言ったのは、カイトの言葉を聞いたカリムだった

するとカイトは

「そもそも蒼炎騎士団は、女神アウラによって集められた騎士団だった……世界の崩壊を防ぐために」

と語った

それを聞いて、クロノが

「我々、時空管理局の偉大な先達だな……」

と呟いた

確かに、規模の違いは有るだろうが、正に先達に当たる

「騎士団団長のカイト、その補佐役だったブラックローズ。第一隊長のバルムンク。第二隊長のオルカ。魔法師隊長のワイズマン……彼等によって、有能な騎士や魔法師が集められた……」

それを聞いて、カリムが

「まさか……それが、ベルカ式とミッド式魔法の始まり？」

と呟いた

それを聞いたカイトが

へある意味、そうだね。近接戦闘を得意とした騎士隊と遠距離戦闘を得意とした魔法師隊……最初は一種だけだった魔法が、それぞれの得意とする距離と戦い方専用に改変されたのが、ベルカ式とミッド式の始まりとなった……

と肯定した

確かに、そうした方が調整等が楽だろう

騎士は近接戦闘で単騎で戦うことが多く、魔法師は密集して戦うことが多い

そこから、長い年月を掛けてベルカ式とミッド式に別れたのだろう

そして、今に到る

へそして、蒼炎騎士団のある意味最後の戦い……その相手になったのが……女神アウラの対の存在……邪神クビア

「クビア……私も、初めて聞きました」

カイトが告げた名前を聞いて、カリムはそう言った

カリムが知らなければ、他の殆どは知らないだろう

すると、カイトは

「その戦闘は、まさに死闘だった……騎士団は、その戦闘で団員の殆どが戦死した……しかし、それでようやく撃退だった……だから、僕が作られたんだ……クビアに備えてね」と言った

それを聞いたクロノが

「つまり、その邪神クビアが現れる可能性がある……ということか？」

と問い掛けた

するとカイトは

「可能性は高いね……そして、そのクビアに対抗出来るのは黄昏因子を有する者達だけだ」

と告げた

それを聞いて、はやてが

「つまりは、ウチ達だけか」

と呟いた

それを聞いたクロノとカリムが頷くと、カイトは

「今のところ、クビアが何時現れるかは分からない……だから、注意して」

と言った

この後明久達は、ヘリコプターのエネルギー補給が終るまで聖王教会敷地内を歩くことにした

そして、明久となのはが聖王教会病院に入った時だった

突如、警報音が鳴り響いた

それに二人が身構えた直後だった

二人の前に、通信ウインドウが開いて

『こちら、聖王教会騎士団のシャツハです！ 申し訳ありません！ そちらからお預かりした少女が、検査中に居なくなりました！』

と告げた

これが、オッドアイの少女との改めての邂逅となる

少女

「シャツハさん！」

「高町一尉、吉井上等空士！」

なのはが呼び掛けると、シャツハが気落ちした表情で駆け寄り

「申し訳ありません！ こちらが僅かに目を離れた隙に見失ってしまいました！」

と言つて、深々と頭を下げた

それを見て、なのはと明久は

「大丈夫ですから」

「状況の説明をお願いします」

と催促した

それを聞いて、シャツハは

「既に、この一帯の病棟の封鎖と入院患者達の隔離は完了しています。それと、転移魔法が使われた形跡もありません。間違いなく、この近辺に居ます」

と説明した

それを聞いた二人は

「わかりました」

「騎士団の方々は、封鎖に専念して下さい。搜索は、僕達がします」

と言つて、搜索開始した

明久となのはは、中庭を探すことにした

中庭は様々な植物が植えられていて、入院患者の精神を癒す役割があつた

そして、ベンチの下などを探していた時だつた

二人の前の草むらの中から、一人の少女が現れた

6歳位の金髪の少女

間違ひなく、あの保護した少女だつた

二人がその少女に歩み寄ろうとした時

「逆巻け、ヴェンデルシャフト!!」

と声が聞こえて、二人と少女の間にデバイスを展開したシャツハが割り込んだ

その割り込んだシャツハに驚いたのか、少女は尻餅を突いた

そして、シャツハが

「高町一尉、吉井上等空士、下がってください!」

と息巻いた

少女は尻餅を突いたのと、シャツハの氣迫が怖かつたらしく泣きそうになつた

それを見て、なのはが

「待ってください、シスター・シヤツハ。ここは、私に任せてもらえますか？」
とシヤツハの肩に手を置いて、言った

「しかし……」

「シスター・シヤツハ。ここは、なのはに任せましょう」

シヤツハは納得していない様子だったが、明久の言葉を聞いて

「わかりました……」

と言って、デバイスを下ろして下がった

それを見て、なのはが

「ごめんね、怖がらせたね」

と優しく言いながら、少女に近寄って抱き起こした

そして

「いきなり居なくなっちゃったから、心配したんだよ？」

と言いながら、少女の頭を撫でた

そして、少女に視線の高さを合わせて

「私は、高町なのは……お名前、教えてくれるかな？」

と言った

すると、少女は

「ヴィヴィオ……」

と呟くように、名前を告げた

それを聞いたなのはは

「そっか。いい名前だね」

と言って、少女

ヴィヴィオの頭を撫でた

そして、ヴィヴィオと話をしながら

(どうやら、いきなり知らない所に居たのが怖くなったみたい……)

と明久とシャツハに、念話を繋げた

それを聞いて、シャツハは

(そうでしたか……一応、病院だということは説明したのですが……)

と言って、後頭部を搔いた

すると、明久が

(多分、シャツハさんの気が張っていることに気付いたのもあるかな……子供って、人の気配に敏感ですから)

と言った

それを聞いてか、シャツハが僅かに顔を逸らした

それを見て、なのはが

(へりに乗るまでですが、私がヴィヴィオの近くに居ます。いいですか?)

とシャツハに問い掛けた

すると、シャツハは

(構わないかと。後で、シスター・カリムに聞いてみます)

と返した

そしてなのはは、ヴィヴィオを抱っこして二人に近寄ってきた

こうして、ヴィヴィオは無事に見付かったのだった

母性

会談から数日後、六課隊舎

そのはやて執務室にて

「そう言えば今日って、なのはがあの女の子を迎えに行つたんだよね？」

「せやね」

「もう帰ってきてるはずだけど……」

明久の問い掛けに、はやてとフェイトの二人はそう言つて、なのはに通信を繋げた

その直後

『ああああああ！ いっちややだああああ!!』

と女の子

ヴィヴィオの泣き叫ぶ声が聞こえた

余りに予想外だったために、三人は固まった

しかし、よく聞くと

『ほら、ヴィヴィオ！ お姉ちゃん達と遊ぼう!』

『だ、大丈夫だからね!』

とスバルとティアナの焦っている、声も聞こえた

すると、三人の中で一番早く立ち直ったフェイトが

「えつと……何事？」

となのはに問い掛けた

するとなのはが、困った顔で

『えつと……助けて』

と言ってきた

それを聞いた三人は、なのはが居る部屋に向かいながら、状況を聞いた

なのはは確かに、聖王教会病院からヴィヴィオを引き取ってきた

そしてなのはは、なのはとフェイトの部屋にヴィヴィオを連れていくと、仕事に戻ろうとした

しかし、それに気づいたヴィヴィオがなのはの足にしがみついて、泣き叫び始めてしまったのだという

フェイトが通信を繋げたのは、まさにその直後だったのだ

そして部屋に到着し、状況を見たはやてが

《なのはちゃんにも、勝てないことがあるんやねえ》

と情けない表情を浮かべているのはを見て、そう念話で言った

すると、なのはが

《ごめん……切実に助けて》

と救援を求めてきた

それを聞いたフェイトは、足下に転がっていたうさぎのヌイグルミを持って

「こんには」

とヴィヴィオに声を掛けた

それは明らかに、慣れた様子だった

その証拠に、ヴィヴィオに視線を合わせるためにしゃがんでいる

それを見て、フォワード陣四名が

《うわあ……フェイトさん、慣れてるなあ》

《フェイトさん、面倒見いいからねえ》

《それだけじゃなく、クロノ提督の奥さんに、二人のお子さんも居ますから》

《それに、昔はアルフさんの面倒も見たそうですし》

と会話を始めた

なおこの四名だが、なのはがヴィヴィオに顔合わせの意味も兼ねて呼んだのだ
しかしヴィヴィオの大泣きに、右往左往することしか出来なかった

するとティアナが、エリオとキャロの二人を見て

《そう言えば、あんたらの面倒も見てたわね。フェイトさん》

と言つて、それを聞いたエリオとキヤロは、恥ずかしそうに顔を赤くした。そうこうしている間に、ヴィヴィオは泣き止んで、なのはから離れていた。どうやら、フェイトが説得に成功したらしい。

そしてフェイトは、明久を手招きして

「明久、ヴィヴィオと遊んであげてくれる？ 明久の分の書類仕事は、はやてに任せるから」

《なん……やと……》

フェイトの言葉を聞いて、はやては両手両膝を突いた

そんなはやての肩に、明久は手を置いてから、ヴィヴィオに近付いて

「よろしくね、ヴィヴィオちゃん。こうして会うのは、二回目だね」

とヴィヴィオの頭を、優しく撫でた

こうして、新たにヴィヴィオが、六課の生活に加わったのだった

誤解は解きましよう

ヴィヴィオが来て、数日後

機動六課に、新たな隊員が合流していた

その隊員というのは、陸士部隊の隊員

ギンガ・ナカジマだった

名前から分かる通り、ギンガはスバルの姉である

そのギンガが、なぜ六課に来たのか

それは、捜査情報共有のための出向である

今回の事件は、一筋縄ではいかないと判断し、はやてがギンガの部隊の隊長

ゲンヤ・ナカジマ三佐に要請し、出向してもらったのだ

そのゲンヤ・ナカジマ三佐は、ギンガとスバルの父親である

そして、そのギンガは今

「はーい！ 今日ほんとうまで！」

『お疲れさまでした！』

なのは指導の訓練に参加していた

「皆、凄いいねえ。毎日、こんな厳しい訓練をしてるの？」

と問い掛けたのは、訓練が終わってストレッチをしていたギンガである
すると、スバルとティアナが

「そうだよ。出撃要請が掛からない限りは、ずっと訓練漬け」

「たまに、隊長達との模擬戦もありますね」

と言った

それに追従するように

「でも、目一杯訓練しても、出撃出きるようになってるんです」

「訓練の成果ですネ」

とエリオとキャラロが言った

それを、少し離れた場所からフェイトやなのはが見ていた

そこに、童顔の女性

マリエル・アテンザが現れて

「久しぶり、なのはちゃん。フェイトちゃん」

と親しく声を掛けた

「お久しぶりです」

「お久しぶりです、マリーさん」

実は二人は、幼い頃に彼女に世話になったことがあるのだ
だから見た目では分らないが、彼女の方が年上である

そんな彼女

マリエル・アテンザの最近の悩みは、その童顔からくる新人に年下に見られることが
増えたことだとか

「最近、レイジングハートとバルディッシュの調子はどう？」

「バッチリです」

「大丈夫です」

マリエル・アテンザが問い掛けると、なのはとフェイトはそう返した

そこに、青い狼

狼形態のザフィーラが現れた

その直後

「なのはママー！」

とヴィヴィオの声が聞こえた

ふと全員の視線の先では、ヴィヴィオがトテトテと走ってきていた

その声からも分かるように、なのはに会いに来たらしい

それを見たフェイトは

「ヴィヴィオ、転ばないでね！」

と注意喚起した

その直後

「うん！ あうっ!？」

ヴィヴィオは、転んだのだった

「大変！」

それを見たフェイトは、駆け寄ろうとした

だが、それはなのはに止められて

「大丈夫。下は草地だし、そんな強くは転んでない」

となのはは言った

そしてなのはは、片膝立ちになって

「ほら、ヴィヴィオ。立てるよね？」

とヴィヴィオに呼び掛けた

すると、ヴィヴィオは顔を上げたのだが

「うっ……ひっ……」

とグズリ始めた

それを見たフェイトは

「ダメだよ、なのは。ヴィヴィオ、まだ小さいんだから」
と駆け出した

その時

「よいしょ……大丈夫、ヴィヴィオちゃん？」

と、明久が抱き上げた

その問い掛けにヴィヴィオが頷くと、フェイトが着いて
「ありがとう、明久」

と明久に感謝の言葉を言つて、ヴィヴィオを受け取つた
そこに、なのはが到着して

「もう……フェイトママは優しすぎだよ」

と苦言を言つた

だがフェイトは

「なのはママは厳しすぎです」

と返したのだった

その直後

「え、えええええ!!」

とマリエル・アテンザが、驚愕の声を上げたのだった

気づけば、彼女の隣にはシャーリーの姿があった

十数分後、一同の姿は食堂にあった

「なんだ、ビツクリしたあ」

とマリーは、安堵の溜め息を吐いた

その理由だが、マリーはシャーリーの説明で、ヴィヴィオがなのはとフェイトが産んだ子供だと誤解していたのだ

だから、訓練場で驚愕の声を上げたのだ

しかし、誤解したままなのは、大変マズイ

なのは達のために

だから、シャーリーとフォワード陣は、ギンガへの説明を兼ねて、食堂で詳細に説明したのである

「つまりヴィヴィオちゃんは、フェイトちゃんとなのはちゃんが保護責任者になってるなかあ……最強の母親だねえ」

「あははは……」

「確かに……」

マリーの言葉を聞いて、スバルは苦笑い

ティアナは納得していた

そのヴィヴィオだが、明久作肉詰めピーマン（ピーマンまるごと）を、うーうー言いながら、少しずつ食べていた

それを見たエリオは

「…………どうする？」

とキャロに視線を向けていた

そして、ヴィヴィオが嫌いなピーマンを食べているのを見て

「イタダキマス」

と言って、自分も嫌いなニンジンを食べたのだった

運命の地へ

ヴィヴィオが来て、数日後

「明日の夜、我が機動六課は地上本部で行われる、意見陳述会の警備をすることになりました」

と説明しているのは、機動六課部隊長のはやてだ

すると、それを聞いた明久が

「僕達まで、地上本部の警備に？」

と首を傾げた

それは暗に、六課は本来、レリック

ひいては、スカリエツティ関連専任の筈では？ と問い掛けていた

すると、はやては

「それはな、先日にかリムから教えられた預言から、意見陳述会をスカリエツティ一味が襲撃してくる可能性が高いと判断したからや」

と返した

それを聞いた明久は、納得した様子で頷いた

すると、はやては

「という訳で、明日は予定を変更。夜間警備に備えて、交替部隊とシフトを変更。本隊は、夕方まで眠っておくように」

と言った

それを聞いた一同は、会議室から出た

そこに

「明久」

と幸村が声をかけた

「幸村、どうしたの？」

「まあ、直感なんだがな……警備任務、確実に何か起きるぞ」

明久が問い掛けると、幸村は声を潜めてそう言った

確かに

それは、明久も感じていたことだった

時空管理局地上本部で行われる、意見陳述会

それには、ほぼ全ての時空管理局将官が出席する

反時空管理局勢力が狙うのには、絶好のチャンスだろう

しかし、それに比例するように、警備も嚴重である

本来だったら、そう易々とは陥落しないだろう

だが、相手は未知の技術を有するスカリエツティ一味
用心するに、越したことはないだろう

「あのスカリエツティだからね……開始直後か、終わる直前に来るかな」
「そのどっちかだな」

明久の言った言葉に同意するように、幸村は頷いた
すると、シユテルが来て

「幸村……私たちは、彼等が向かった後は隊舎で待機。有事に備えますよ」
と言った

それを聞いて、幸村は
「了解しました」

と敬礼

それを見たシユテルは、頷いてから奥に向かった

恐らく、はやてに待機することを伝えるためだろう

それを見送り、明久は

「それじゃあ、僕は寝てくるね」

と言つて、幸村と別れたのだった

それから、数時間後

夕方午後六時半

六課一同は、ヘリポートに集まっていた

これから、ヘリで地上本部まで行くのだ

起きた一同は、次々とヘリに乗っていく

ふとその時なのは、ヘリポートに寮母のアイナに抱っこされたヴィヴィオを見つけ
た

「アイナさん……なんで、ここにヴィヴィオを……」

困惑した表情をしながら、なのははアイナにそう問い掛けた

するとアイナは

「すいません……私も、危ないから行かないほうがいいとは言ったんですが……」

と言って、ヴィヴィオを下ろした

するとヴィヴィオは、なのはの足に抱き付いて

「なのはママ……何処に行くの？」

と潤んだ目で見ながら、問い掛けた

するとなのはは、ヴィヴィオに視線の高さを合わせて

「なのはママは、これからお仕事なんだ……」

と教えた

それを聞いたヴィヴィオは、不安そうに

「帰ってくる？」

と問い掛けた

その問い掛けに、なのはは

「大丈夫……帰ってくるよ」

と言いながら、ヴィヴィオの頭を撫でた

その後、なのははヴィヴィオをアイナに任せて、へりに搭乗

その後へりは、ヴァイスの操縦で地上本部に向かったのだった

陰謀渦巻く地上本部へ

アインヘリアル

時空管理局地上本部

その一室では、様々な高官が自分の意見を述べていた

その中に、はやて、シグナム、カリム、シャツハの四人の姿があった

この四人は意見陳述ではなく、警備の為に参加していた

なおその部屋の外

廊下には、なのはとフェイトの二人もいた

しかしこの六人は、デバイスを持っていなかった

その理由は、上からの指示だった

上層部は地上本部の警備態勢に、絶対とも言える自信を覚えている

『地上本部の警備は万全。更に、誰がテロリストかそれに使われているか分からない為に、地上本部内へのデバイスの持ち込みは禁止する』

と言ってきたのだ

勿論だが、はやて達は抗議した

それでは、万が一の事態の時に、即応出来ない。と

しかし、上層部はこれを一蹴

結局、中に入る一同は、外で警備に回るメンバーに己の愛機を預けて、中に入った
今回の意見陳述会で注目されているのは、時空管理局地上本部の高官の中でも、武闘
派として知られる中將

レジアス・ゲイズだった

レジアス・ゲイズ自身は、魔導師ではない

しかも彼は、希少技能持ちを嫌う強硬派でもあり、その意見はかなり過激だった

その一つが、彼の肝いりで立案並びに、建造された大型砲
アイんヘリアルだった

このアイんヘリアルは、全部で三基

その三基は、ミッド市街地を囲むように山間部に配置され、もしテロリストや違法魔
導師が飛行で逃げようとしたら、砲撃

撃墜する算段らしい

しかしこのアイんヘリアルの建造は、かなり紛糾したものだだった

時空管理局には、相手を殺さずに捕縛

裁判を受けさせる

というルールがあった

このアインヘリアルは、それに真っ向から反対したものだ。その理由だが、魔導師の魔法には、非殺傷設定というものがある。それは、相手に死ぬようなダメージを与えず（軽傷を負う場合はある）、痛みで戦意を喪失させるようになっていく。

しかしアインヘリアルは、魔法ではなく、物理砲になる。つまり、非殺傷設定が出来ないのだ。

もしヘリで逃げていたら、ヘリは爆発

その爆発に巻き込まれて、テロリストは死亡するだろう

魔導師の場合では、高ランク魔導師はバリアジャケットで耐えられるかもしれない。しかし低ランク魔導師だった場合、即死してしまう可能性が高すぎた。更に、アインヘリアルは射角を自由に変更出来る。

もし、操作権が奪われたら、市街地を撃たれる危険性が高いのだ。

それを指摘し、配備に関して反対した勢力とレジアスを慕う者達が対立。その会議は紛糾し、決まらないかと思えた。

しかしその時、時空管理局最高決定部門

最高評議会が介入し、アインヘリアルの配備が決定した。

幾ら反対しようが、上が決めたのなら従うのが下である。

しかし条件として、試験運用として三基のみになったのだ
だがレジアスは、それですら自信に繋がっていた

何故ならば、自分を最高評議会が支援したからだ。と思っていたからだ
最高評議会は名前だけ知られており、その構成員は一切知られていない
だがしかし、管理局内においては絶対的な決定部署として知られている
そして何より、その最高評議会は管理局が創設された頃から居ると噂されていた
こうして、陰謀渦巻く意見陳述会が始まった

一人の狙撃手

「ふう……」

と溜め息を吐いたのは、ヘリに背中を預けた男性

ヴァイス・グランセニツクだった

彼は意見陳述会が終わるまで、ヘリポートで待機していた
暇潰しに、星の数を数えていた

その時

「お疲れさまです、ヴァイス陸曹」

とティアナが現れた

「おー、お疲れ」

ヴァイスが片手を上げると、ティアナは

「ヴァイス陸曹に、お裾分けです」

と言って、ビニール袋を掲げた

その中には、缶コーヒーやサンドイッチ等が入っている

それを見たヴァイスは

「おお、サンキュー」

と言って、ティアアナから袋を受け取った

するとティアアナは、そんなヴァイスの隣で缶コーヒーを開けて

「ヴァイス陸曹……一つ、聞いていいですか？」

とヴァイスに疑問を投げ掛けた

するとヴァイスは、缶コーヒーを飲みながら

「なんだ？」

と首を傾げた

するとティアアナは、少し躊躇ってから

「ヴァイス陸曹は昔、武装隊に居たんですよね……それも、腕利きの狙撃手だったと、シグナム副隊長に聞きました」

と言った

それを聞いたヴァイスは、内心で

(シグナムの姐さん……余計なことを)

と毒づいた

そして、またコーヒーを飲んでから

「まあな……ド新人に説教垂れる位なら……」

と言った

しかし、ティアナは

「エースだったと聞きましたが……」

と呟いた

するとヴァイスは

「エースなもんか……肝心な時に外しちまうような、バカ野郎さ……」

と自虐的に言った

それは、今から約二年程前だった

その当時ヴァイスは、武装隊でも名を馳せた狙撃手だった

しかしある日、ある違法魔導師がヴァイスの妹

ラグナ・グランセニツクを人質に、ある建物に立て籠った

その犯人の狙撃を、ヴァイスが所属していた部隊がすることになった

ヴァイス本人としては、普段通りのつもりだった

しかし、やはり妹が人質になっていることで動揺していたのだろう

ヴァイスは、その狙撃を外してしまった

ヴァイスが撃った魔力弾は、ラグナの右目に命中

ラグナはそれにより、失明してしまった

その後犯人は、別の狙撃手により撃たれた

だがヴァイスは、その一件が原因で武装隊から除隊
ヘリパイロットになっていた

「まあ、今となつてはヘリ好きが高じてヘリパイロットさ……」
ヴァイスはそう言つて、コーヒーを飲んだ
するとティアナが

「ですが……」

と何か言いたそうにした

そんなティアナの頭を、ヴァイスは軽く小突いて

「俺のことなんざいいから、お前は自分の任務に戻れ」
と言つた

それを聞いたティアナは、納得いかない様子だったが
「それでは、警備任務に戻ります」

と言つて、ヘリポートから去つた

それを見送つたヴァイスは

「全部、過去のこときさ……そうだろ、ストームレイダー」
と愛機の名前を呼んだ

すると、ヘリでありヴァイスの嘗てのデバイスは
《その通りです》

と答えた

意見陳述会は、まだ始まったばかりだった

始動

意見陳述会が始まり、数時間した時

それは、ミッド郊外のある洞窟内でのことだった

そこのある区画には、十数人の男女が居た

その内の一人は、機動六課で追っている相手

ジェイル・スカリエッティだった

彼の前には、光り輝く赤い結晶

レリツクが大量にあった

それを見たスカリエッティは、クックックと笑い

「いよいよ、計画も佳境……」

と言った

そして、背後に居た女性達

スカリエッティが造り出した存在

戦闘機人が居た

その人数は、12人

通称、ナンバーズと呼ばれていた

スカリエッツィはそのナンバーズに、視線を向けて

「では、諸君……宴の前準備だ」

と言った

するとそのナンバーズは、各々その場から居なくなつた

それを見たスカリエッツィは

「コピー因子は埋め込んだ……さあ、始めよう!!」

と言つた

すると、転移装置で遙か上空に転移したクアットロが

「さあ、嘘と幻の銀幕芝居を御堪能あれ!」

と自分達に与えられた特殊能力

インヒューレントスキル

I S を、発動させた

クアットロのI S、シルバー・カーテン

その能力は、相手に本物と識別が難しい幻術を見せることだつた

その効果は、すぐに現れた

場所は変わり、時空管理局地上本部C I C

「おい、誤認じゃないのか!」

「有り得ないだろ、この数は!？」

計器を確認していた局員達は、ざわめいた

すると、責任者らしい男性局員が立ち上がり

「落ち着け! 冷静に報告しろ!」

と言った

それを聞いた一人の男性局員が

「レーダーに感アリ! その数は、計測限界を超えています!」

と悲鳴染みだした報告をした

それを聞いた責任者の男性局員は

「そんなバカな!？」

と驚愕の声を上げた

しかし、すぐに

「航空魔導師隊にスクランブル! 警備シフトの全部隊に、戦闘配備を通達! 迎撃を

させろ!」

と指示を下した

それは、その責任者が優秀な証だろう

しかし

「ダメです！ 通信機に異常発生！ 通信が出来ません！」

「サーバーに異常発生！ ハッキングされてます!!」

相手が悪かった

「バカな!! この地上本部の電子防壁が、突破されたというのか!?!」

「そうとしか考えられません！ セキュリティシステム、三割が機能停止!」

その報告を聞いて、責任者は

「だったら、直接向かえ！ 今なら、まだ間に合う!」

と近くに居た局員に、伝達に向かうように指示した

その直後、C I C内に煙が充満

中に詰めていた全員は、倒れた

すると、天井から一人の少女

戦闘機人のセインが現れた

それは、セインのI S

デーパーダイパーの効果だった

デーパーダイパーは、コンクリートや金属、岩といった固形物の中をまるで水中のよ

うに動けるようになる能力だ

セインはその能力でセキュリティに反応されずに、地上本部に侵入

催眠ガスを使い、C I Cを制圧したのである

そして、全員が動かなくなったことを確認してから、姿を現して
「チヨロいチヨロい」

と言って、計器を破壊したのだった

予感

最初に異常に気付いたのは、意見陳述会に参加していた将校達だった
自分が抱える部隊との通信が途絶

更には、全通信網の不通

すぐに、ただ事ではないと気付いた

しかし、時空管理局地上本部中将

レジアス・ゲイズは

「ふん……何者かは知らんが、地上本部の防衛は鉄壁だ……」

と、相手にしなかった

しかし外では、管理局員達は混乱の極みに立たされていた

自分達の上官との通信途絶

更には、数えるのがバカらしい程のガジェットの出現

それらが重なり、一般の陸士部隊は混乱状態に陥った

だがその中で、機敏に動いている者達が居た

それは、はやての機動六課

そして、ギンガが所属している陸士108部隊だった

機動六課は、元々が対ガジェット

ひいては、対スカリエツティ選任として編制された部隊だ

そして陸士108だが、この陸士108部隊は一部を機動六課と連繋していたのだから、相手がガジェットと分かると上官たるゲンヤと通信が繋がらなくなっても、独自に動き出したのだ

「ちいつ……こりや、地上本部の通信機自体がやられたか……ロングアーチー」

と舌打ちしていたのは、愛機たるグラーフアイゼンを肩に担いだヴィータだった
すると、ヴィータの前にウインドウが開いて

『こちらが把握している限り、地上本部直轄部隊とは完全に不通。地上本部のシステムも、ハッキングを受けてます！』

とグリフィスが報告した

それを聞いたヴィータは、舌打ちして

「だから、もつと強い防壁にしろって言ったんだ……」

と悪態を吐いた

そして、背後に居たフォワード陣達に

「お前ら！ はやて達に、デバイスを届けてやってくれ！」

と言つて、中に入ったメンバーから預かつたデバイスを、フォワード陣に投げ渡した
しかし、走りながらだつたからだろう

空中に放られたデバイスは、バラバラに散つた

それを見たヴィータは、内心で焦つた

だが次の瞬間、両腕が震む速度でスバルが全て難なくキャッチ

そして

「気をつけてくださいよ、ヴィータ副隊長」

とスバルは、ヴィータに文句を言つた

「おう、悪い。デバイスを頼んだぞ！」

片手を上げながらそう言つて、ヴィータは飛んだ

そして、ポツリと

「そうだったな、スバルは……」

と呟いたのだつた

その頃、明久は一人で一つの戦線を維持していた

そこを任されていた部隊は、真つ先に指揮官が死んだことであつという間に懐走

そこに明久が到着し、迫つてきていたガジェットの大群相手に奮戦していた

今も、一機のガジェットⅢ型を双剣で切り裂き

「この状況……あの時みたいだ」

と呟いた

するとカイトが

《あの時より、明久は成長してるさ》

と返した

それを聞いた明久は、一機のカジエットⅠ型を蹴り飛ばし

「問題は……混じってる幻影だなあ……見分けが付かない」

と愚痴を溢した

それを聞いて、カイトは

《まるで、イニスやメイガスだね》

と言った

それを聞いた明久は

「それだよ……黄昏因子に近い気配を感じるんだよ……」

と呟きながら、双剣から持ち換えた大剣で一機のカジエットⅢ型を輪切りにした

そして、大剣を肩に担いで

「まさか……黄昏因子をコピーしたとか、無いよね……」

と呟いたのだった

魄翼の予感

ヴィータやシグナム、明久達が戦っていた時、地上本部ではなのはとフェイトの二人が脱出を図っていた

まず二人が居た場所だが、上級士官達が居る会議室の外のエントランスだった

二人はその襲撃が、スカリエツテイ一味のものだとすぐに気付いた

しかも、脱出しようとした直前に地上本部全体で停電

それも、スカリエツテイ一味が引き起こしたことだと確信していた

実はその爆発は、地下発電所が爆破されたのだ

それを成したのは、スカリエツテイが造りし12人の戦闘機人の一人

チンクだった

チンクはセインのISで、地上本部地下に侵入

そして、実力で警備を排除して発電所に押し入った

その後、自身のIS

ランブル・デトネイターで、発電機を完全に破壊したのである

しかもその直前には、ハッキングで警備システムが完全に乗っ取られてしまい、上級

士官達は会議室に閉じ込められてしまった

その状況に、殆どの局員達は右往左往するしかなかった

だが、それを打破したのはなのは達だった

なのは達は近くに居た局員達を集めて、まず閉じ込められた上級士官達の解放を指示
そして自分達も、他の局員と協力してエレベーターのドアをこじ開けた

ドアを開けると、協力してくれた局員達に解放作業に回るように指示を下し、二人は
両手両足に魔力を集中

その状態でワイヤーを掴み、降下を開始した

「こんなの、士官学校以来だね!」

「訓練、やっておいてよかったね!」

そして二人は、デバイスを持っていくフォワード陣との合流を目指した

その頃、機動六課隊舎

そこでは、非常事態に備えて待機していたメンバー

ダーク・マテリアルズが出撃準備を終えていた

そして、ディアーチエが

「これより我等は、陥落寸前の地上本部の援護に向かう! 出す指令は、ただ一つよ!

何時も通りに勝ち、そして帰還する!」

と訓示を告げた

それを聞いた、シユテル達は

『はっ!!』

と斉唱で答えた

それを聞いたデИАーチエは、一瞬にして騎士甲冑を展開

地上本部目指して、飛び始めた

すると、先頭を飛んでいたデИАーチエの隣に、ユーリが近寄り

「なにか、嫌な予感がしますね、デИАーチエ」

と言った

それを聞いたデИАーチエは、こくりと頷き

「そもそも、我は何回も警備態勢の見直しとセキュリティの打診をしてきた。それを無

視した上層部が、無能よ……だが、それで民が傷つくことなど……断じて許せぬ」

と言つて、炎上してる地上本部を睨んだ

しかし、ユーリは首を振つて

「そうではなく……何か嫌な予感がするんです……何か、重要なことを見逃しているよ

うな……」

と心配そうに言つて、離れていく六課隊舎を振り向いた

それを聞いたディアーチエも、六課を肩越しに見た
そして後に、その予感が正しいことを痛感したのだった

暗雲

「まだ通信は回復せんのか！」

「もう暫くかかります！」

レジアスの怒鳴り声に返答したのは、陳述会に参加していた技師の一人だった

その理由だが、C I Cが陥落したことによる通信網の不通

それに、参加していた殆どの将官達は右往左往するしかなかった

そんななか、参加者の一人

今居る会議室の管理者が、あることを思い出したのだ

それは、今居る会議室に予備の発電機と旧式だが大型の通信機器が収納されていたこと
とを

実は、今居る会議室はC I Cに何か起きた際に代わりに使えるバックアップだったの
だ

だが、長い間そういった事態に陥らなかつたために、殆どの局員が忘れていたのだ
それを聞いたレジアスは、直ぐ様その発電機と通信機器を出すように命じた

そして出したのだが、通信機器の方は故障していたのだ

レジアスは管理者を叱責しつつ、参加していた技師に修理を命じたのだ
しかし、余りにも旧式だったので手こずっていた

それを他所に、はやては

「ええか！ 力合わせえ！ せえの!!」

と力自慢の局員達と一緒に、ドアを開けようとしていた

数人掛かりで開けようとしていたが、ドアはビクともしない
すると、参加していた一人の局員が

「八神二佐、ダメです！ ロックされた状態で、開きません！」

と言った

それを聞いたはやては、少し考えて

「だったら、壊すしかないな……誰か、工具持ってきていや！」

と言った

すると、一人の局員が

「しかし、施設の破壊許可は出てません！」

と反論した

その直後、はやては

「だったら！ 何時開くか分からんのを待つんか!?! その間にも、外では警備部隊がガ

ジェット群と交戦しとるんやで!？」

と言った

その直後

「構いませんよ、施設の破壊を許可します」

と場違いなまでに穏やかな声が聞こえた

全員が声のした方に視線を向ければ、そこには時空管理局の伝説の三提督の一人にして、統幕議長

ミゼット・クローベルが居た

「み、ミゼット・クローベル議長!？」

まさか三提督の一人が出てくるとは思っていなかったのか、何人かは狼狽えていた
しかし、ミゼットはそんな彼等を無視して

「今は危急の事態です。施設の破壊など、些末なこと……施設を破壊しなさい」
と言った

それを聞いた一人が、敬礼しながら

「了解しました! おい、工具を持ってこい!! 壊すぞ!」

と言つて、何処かに走り去った

それを見送り、ミゼットは

「八神二佐、見事な言葉でした」

とはやてを称賛した

すると、はやては

「私も、仮にも佐官……当然の判断かと思われまます」

と姿勢を正しながら言った

そのタイミングで、先程駆けていった局員達がその手に工具箱を持って戻ってきた

どうやら、予備の工具箱を技師達から借りたようだ

そして、ドアの破壊突破を始めた

その時

「直りました！ 通信、どうぞー！」

と通信機器を直していた技師が、片手を上げながら言った

それを聞いたはやては、素早く通信ウインドウを開いて

「機動六課各部隊、状況を知らせえや！」

と報告を求めた

すると、ノイズ混じりだがフォワード陣やヴァイタと通信が繋がります

『こちら……ターズ3！ スターズとライトニング隊は……達には、デバイスを渡した後

に遊撃中です！』

『こちらスターズ2！ 空戦部隊と一緒に……型ガジェットと交戦中……を乞う！
り返す、増援を乞う！』

と報告がされた

どうやら、交戦中らしい

しかも、ヴィータの方は増援を要請してきた

するとはやては

「ヴィータ！ ガジェットの数はどんなもんや!？」

と問い掛けた

その直後、爆炎を背景に

『幻影混じりで、正確な……不明！ 数が多すぎて、空戦部隊が押されてる!』

と報告がされた

それを聞いたはやては、ヴィータに何かを言おうとした

その時、激しくノイズだらけの通信ウィンドウが開いて

『こちら、機動六課隊舎……群と戦闘機……撃により……ちません!!』

とグリフィスから、通信が繋がった

「グリフィス准尉どうしたんや！ 繰り返せ!？」

よく聞こえなかったために、はやては再度報告するように促した

するとグリフィスは

『敵戦闘機人達と大量のガジェット群……にあい、長くは持ちません!!』
と六課隊舎が、陥落寸前だという報告をしてきたのだった

六課陥落す

「やられた……まさか、敵の本命が六課だったなんて……」

と言ったのは、明久である

その明久とは別のルートで、フエイト、エリオ、キヤロが向かってきている筈である

一度合流することも考えたが、それでは時間が掛かると判断したのである

そして、六課隊舎まであと半分といった時だった

トーンという、あの音

ハ長調ラ音が聞こえた

「タイムリングが悪い！」

明久がそう言った直後、明久は黄昏空間に取り込まれた

そして、明久の目の前に居たのは長身の美青年だった

その人物を見て、明久は

「誘惑の恋人……マハか!!」

と双剣を構えたのだった

場所は変わり、別ルートで六課に向かっていたフエイト達

そのフェイト達の前には、二人の戦闘機人が居た

高い空戦能力を有する戦闘機人

トーレとセツテの二人だった

「エリオ、キヤロ……二人は先に行つて」

「フェイトさん!?!」

フェイトの言葉を聞いて、キヤロは驚愕した

しかし、エリオはフリードの手綱を取り

「フリード、行つて!」

と言つた

するとフリードは、エリオの言葉に従い六課に向かつて進み始めた

「エリオくん!?!」

「キヤロ……今僕達が居たら、フェイトさんの邪魔になる……悔しいけど、僕達は先に進むべきなんだ」

キヤロが驚きながら視線を向けると、エリオは悔しそうにそう言つた

そして、二人の戦闘機人の横を通り過ぎた

フェイトは即座に動けるように構えていたが、フェイトの予想を裏切り、戦闘機人達はエリオ達を攻撃しなかつた

するとフェイトは

「なぜ、通した……？」

と問い掛けた

すると、トーレが

「私たちの目的は、フェイトお嬢様お一人ですから」

と返した

フェイトは、トーレが自分をお嬢様と呼んだ理由を察した

それは、フェイトが作り出された人造魔導師計画

それを立案したのが、スカリエツティだからだ

つまり、フェイトと戦闘機人達はある意味で姉妹になるのだ

「フェイトお嬢様……我々と共に来ていただけませんか？ 悪いようにはしません」

「誰が!!」

トーレの言葉を、フェイトは拒否

バルディッシュを構えた

すると、トーレとセツテの二人も構えて

「仕方ありませんね……」

「無理矢理にでも、連れていかせてもらいます！」

と交戦を開始した

そして、六課に向かっていたエリオとキャロだが、六課上空が真っ赤に染まっていることに気づいた

「そんな!？」

「フリード、急いで!!」

キャロは驚き、エリオはフリードに加速するように頼んだ

そして加速したのだが、ある光景が見えた

それは、ガジェットⅡ型に乗ったルーテシアが、ヴィヴィオを抱えているのだ
それを見たエリオは

「キャロ!」

とキャロの名前を呼んで、跳んだ

そして、ストラーダに

「ストラーダ、フォルムⅡツヴァイ!」

と命じた

その命令に従い、ストラーダは第二形態たるブースターを展開

ブースターを噴かして、突撃した

「ヴィヴィオを……離せえええ!!」

エリオがそう言うと、ルーテシアの隣に立っていた虫人
ガリユーが、迎撃に動いた

この時にエリオは、気づくべきだった

ガリユーとの空中戦は、自分が不利だと

二三度空中でぶつかり、エリオが態勢を崩した

そこにガリユーが首筋に踵落としを叩き込み、エリオは海に墜落

それに気を取られたキャロも、ルーテシアの魔力弾を食らって墜落

そして、なんとか泳いで六課隊舎に到着したのだが、見えたのは燃え盛る隊舎だった

それを見たキャロは

「壊さないで……私たちの居場所を、壊さないでええ!!」

と泣き叫んだ

その直後、巨大な魔法陣が展開されて、ソレが現れた

まるで、高層ビルに迫る巨体の龍

キャロの故郷たるアルザスを守護する真龍

真龍・ヴォルテールである

そしてヴォルテールは、キャロの感情に呼応するようにその一撃を放った

その一撃の名前は、ギオ・エルガ

その一撃を受けて、ヴォルテールを攻撃しようとしていたガジェット群は全て吹き飛んだ

それだけで、その一撃の威力が分かる

そしてヴォルテールは、キャロが泣き止むまで近くに居たのだった

状況

地上本部襲撃の翌日

地上本部の敷地から、次々と負傷者が搬送されていた

死者が出てないのが幸いだったが、重軽傷者数千人

行方不明、三名

一人は、六課から誘拐されたヴィヴィオ

二人目が、ギンガ

そして最後の一人は、明久だった

明久が途中まで、陸士部隊を援護していたのは確認が取れた

それは、明久に助けられたという陸士部隊が多数存在したからである

その証拠に、陥落した六課のブラックボックス

そのデータを解析した結果、六課が陥落する寸前まで様々な場所で戦闘していたのが

確認出来たのだ

そして通信ログには、六課の救援に向かうという言葉が最後に記録されていた

その直後に、六課が陥落

データ収集もそこで止まった

その後、明久は行方不明になったようだ

そして何よりも、飛んできた光の球

誘惑の恋人・マハの黄昏因子

その黄昏因子が、シャマルに適合したのである

マハの黄昏因子が飛んできたということは、明久はマハと交戦し、勝った

そこまでは、はやて達にも分かった

そこから導き出したのは、マハと交戦し勝った後、明久は何者かに襲われて、意識を

喪失

そのまま、連れ去られた

と仮定した

「まだや……まだ終わってない……い……」

はやてはそう言うのと、すぐに動いた

まず、廃墟と化した六課本部の代わりとなるモノを探した

そして、監査官たるヴェロツサの協力もあつて見つけた

それは、明久やはやて達にとって思い出の船

退役が決まり、解体予定だったアースラだ

今回に限り、次元航行部から借用出来た

そして、廃墟と化した六課敷地

そこでは、なのは、フェイト、ティアナが鑑識に立ち会っていた

残っていた局員達は、重軽傷様々だったが、全員無事

しかし、防衛に出た

ザフィーラ、ヴァイス、プレシアの三名が意識不明の重傷となっていた

鑑識に立ち会っていたなのは、ふと気付けば、自分達の部屋だった場所に来ていた

もはや瓦礫に埋もれ、なんとなく家具類が見えている程度である

その時、何か柔らかい物を踏んだことに、なのはは気付いた

足を退けて、踏んだ瓦礫を退かして見つけたのは、焦げたウサギのぬいぐるみだった

それは、ヴィヴィオに会った後に、買ってあげて、ヴィヴィオが何時も持っていたぬ

いぐるみだった

それを見たなのはは、震える手でぬいぐるみを拾い、胸元に抱き締め、声を押し殺し

て泣いた

それを見たティアナは、その場で踵を返して

(フェイトさん……私これから、スバルが入院している病院に向かいます)

とフェイトに念話した

実はスバルは、地上本部地下にて戦闘機人達と接敵したのだ
しかもその時、スバルの姉たるギンガが、その戦闘機人達により捕まってしまったのだ

それを見たスバルは、暴走

戦闘機人としての力を解放したのである

そんなスバルとギンガだが、今回のスカリエッツィとは違う技術で作られた戦闘機人なのだ

それが気になったスカリエッツィは、配下の戦闘機人三名

チンク、ノーヴェ、ウエンデイの三名に、その二人の捕獲を命じたのである

スバルが遭遇したのは、まさにその場面だった

スカリエッツィの戦闘機人三名は、スバルの攻撃により撤退した

だがスバルも、その三名の攻撃で重傷を負い、入院することになったのだ

(うん、分かった。入院してる皆に、よろしくね)

(はい……)

フェイトの念話に返答して、ティアナは病院に向かったのだった

決意

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

と泣きながら謝っていたのは、シャーリーだった

謝っている理由は、ヴィヴィオを拐われたことらしい

すると、見舞いに訪れていたディアーチエが

「うぬらが悪いわけではない。悪いのは、我らだ……」

と悔しそうに言った

すると、それに同意するようにシユテルが

「そうです。相手の陽動に引つ掛かり、六課をもぬけの殻にした私達に非があります

……」

と言った

表情は変わっていないが、その声音が悔しきで震えている

実はシユテルは、なのはに似ていることから、ヴィヴィオになつかれていたのだ

そしてシユテルも、そんなヴィヴィオの面倒を良く見ていた

そのヴィヴィオを拐われたというのは、シユテルからしたら非常に悔しかったのだ

「しかも、到着したら居た筈の戦闘機人は居なかったしき……色々と不完全燃焼だよ……」

と言ったのは、レヴィである

彼女からしたら、ガジェットとしか戦えなかったのが不満らしい

なお今居る病室は、シャーリーの病室だ

彼女は意識を失った後、机の下で倒れていたために比較的軽傷だった

しかし、迎撃に出たプレシア、ヴァイスの両名は意識不明の重体

研究者として居た、グランツ・フロリアンは奇跡的に軽傷

今は、マリーと共に味方陣のデバイスを修理・強化している

今回の戦闘から得たデータで、対戦闘機人用に出力の調整等をするようだ

特に、スバルのは時間が掛かる見積りである

スバルは戦闘機人としての力を解放し、怒りに任せて戦った

そのために、マツハキヤリバーは大破してしまったのだ

それを修理してから、スバルの力に耐えられるように強化するために、他のデバイス

よりも時間が掛かる

他のメンバーだが

グリフィス・ロウラン 重傷だが、本人の意思によりある程度の治療をした後、他の

無事だったオペレータースタッフと共に、アースラで確認中

アルト・クラエツタ 地上本部から程度の良いヘリを回してもらい、修理中。ヴァイスの代わりに、フォワード陣を乗せるつもりらしい

シャーリーは頭を怪我していたために、念のために検査入院中
今は、結果待ちの真つ最中だ

そして落ち込むシャーリーを、ユーリが慰めていた

場所は変わり、ミッド市内にある高度治療センター

そこに、スバルが入院していた

スバルは普通の人間ではないので、高度な義肢修理能力を有するこの高度治療センターに入院しているのだ

その証拠に、露出していた人工筋肉や強化骨格は最早元通り

傍目には、戦闘機人とは分からなくなっていた

そんなスバルに、見舞いに來ていたエリオとキヤロが

「元氣出してくださいよ、スバルさん」

「ギンガさんなら、大丈夫ですよ」

と励ましていた

すると、スバルは

「うん、ありがとう……」

と返した

だがその声音には、何時もの活発さは感じられなかった

やはり、ギンガが扱われたということが、響いているらしい

そんなスバルに、二人はどう言ったらいいのか、分からなかった

そこに

「入るわよ」

とティアアナが現れた

「ティアアナさん！」

「ティアアナさん！」

「二人も、スバルの見舞いに来てたのね」

当初ティアアナは、エリオとキヤロの二人は他のメンバーが入院している聖王教会病院
だと思っていたのだ

だから声に、若干の驚きが混じっていた

すると、二人は

「この後、聖王教会病院に行きます」

「先に、スバルさんの様子を見ておこうと思ひまして」

と言った

それを聞いたティアナが頷くと、二人は退室

二人を見送ったティアナは、スバルを見て

「……やつぱり、気になる？」

と問い掛けた

すると、スバルは

「……ギン姉拐われちゃったし、相棒も……無茶して壊れちゃった……」

と呟くように言った

やはり、後悔しているらしい

それを聞いて、ティアナがスバルの頭を脇に抱えて

「……グランツさんから伝言よ。マツハキヤリバーは今全力で修理中……そして、ギン

さんのことも希望を捨ててるな……だつて」

と言った

それを聞いたスバルは、視線をティアナに向けて

「それって……」

と問い掛けた

しかし、ティアナも知らないらしく、首を振って

「詳しくは知らないわ……けど、諦めたくないんでしょ？」

とスバルを見た

その言葉にスバルは

「うん……絶対に、取り戻す！」

と誓っていた

その目には、強い光が宿っていた

進捗状況

「また世話になるな、アースラ……よろしくな」

はやてはそう言いながら、艦長席を優しく撫でた

退役が決まるまでの間、偉大なる先達達

クライド・ハラオウン

リンディ・ハラオウン

クロノ・ハラオウン

ハラオウン家が運用してきた、思い出のある艦

それが、アースラだ

その艦長席に座るというのは、はやてからしたら畏れ多いことだ

しかし、今は躊躇っている時ではない

今時空管理局は、有史以来の危機に瀕している

地上本部は、その機能の大半が機能停止状態

戦力も、過半数が負傷し動けない

しかも、何人かの将官は姿を消した

状況からして、逃げたのだろう

管理局とは言っても、一枚岩ではない

勢力争いが起き、それに負けた者は失墜する

いくら良い人でも、負けたらそこまで

ある意味、明久がそれだろう

過去に明久は、なのはを助けた

だがそれは、幾人かの将官達によつて書き換えられてしまった

明久が命令違反をしたと

そして将官の中には、就職難から慢性的人材不足だった管理局に就き、ずる賢く生き残り、邪魔になる者達を始末して将官になった者達も多数居た

逃げたのは、まさしくその将官達だった

その者達は、後で始末を付けるとして、今は目の前に起きかけている事態への対処だ
スカリエツティ一味により、管理局は危機に瀕している

それに立ち向かえるのは、極僅か

「私達が、やるしかないんや……！」

六課の隊員達は、動けるようになった者達から続々と合流してきている

まだ戻ってきていないのは、戦闘機人としての調整とデバイスの修理が残っているス

バル

そして、未だに意識が戻っていないヴァイス

ヴァイスは六課が襲撃された折に、内部に侵入してきたガジェットの迎撃に出ていた
だがその途中で、一人の少女

ルーテシアと遭遇

そのルーテシアからの魔力弾の直撃と、瓦礫に押し潰されて重傷を負ったのだ

今は、念のためにザフィーラが着いている

「さて、合流した各員の調子はどうか」

はやてはそう言って、通信ウインドウを開いた

下部格納庫では、ヴァイスの意思を引き継ぐように、アルト・クラエツタがヘリの整備
備をしていた

実は彼女は機械の整備が得意で、日頃からヴァイスのヘリの整備を手伝っていた
だから、ヘリの整備や修理方法は熟知している

その彼女だが、実はヘリパイロットの資格も取得している

だから、意識が戻っていないヴァイスの替わりに、六課フォワード陣を送り届けると
意気込んでいる

それを見たはやては、声を掛けることもなく通信ウインドウを別の場所に開いた

次に映ったのは、医務室だった

医務室では、シヤマルが筆頭となって、一度撤去された医療機器の再セッティングをしている

やはり、曾て乗っていただけあり、かなり順調そうだった

「後は、なのはちゃんやけど……」

通信ウインドウを閉じながら、はやてはそう呟いた

なのはだが、ヴィヴィオの誘拐と明久の行方不明が重なり、かなり精神的に來ていた様子だった

だが、大丈夫だと信じている

「正確には、信じるしかない……んやけどな」

はやてはそう言いながら、艦橋から去ったのだった

出撃と悔恨

それが起きたのは、地上本部の襲撃から約一週間後だった

なんと、スカリエッツィから襲撃する旨の予告があったのだ

それも、映像が始まってからきっかり一時間後と

余りにも、舐めた行為と言えるだろう

しかし、そうするだけの余裕もあった

まず、ガジェットの数

はつきり言つて、本局の戦力を合わせても、倍処の話ではない

余りにも、絶望的な差だった

そして重要なのは、地上本部の指揮が混乱していることだった

将官の逃亡と、それを皮切りに起きた反時空管理局勢力による襲撃

それらが重なり、時空管理局は有史以来の危機を迎えていた

「ほんまに、舐めたことをしてくるやないか……」

それは、スカリエッツィの演説を聞いたはやての言葉だった

その言葉と表情からは、怒りしか感じられなかった

それは、ミッド全域に放送が始められたと同時に、六課に繋げられたスカリエッティからの通信が原因だった

その通信内容は、概ね同じだった

たった一つだけ違ったとしたら、スカリエッティの声と同時に聞こえた声
否、悲鳴だった

その悲鳴は、ヴィヴィオのものだった

ヴィヴィオは泣きながら、なのはを呼んでいた

幼い女の子の悲鳴を聞かされて、大人しくしている六課ではない

「聞いてたな、皆……あの外道に、私達の怒りをお見舞いしてやりいや!!」

『はいっ!!』

はやての号令に、六課全員は斉唱で応えた

問題は、スカリエッティの本拠地の位置

だがそれは、六課ロングアーチが特定していた

その理由は、スカリエッティからの通信

それを逆探知したのである

とはいえ、それも紙一重だった

スカリエッティが組んだだろうセキュリティを突破し、発信地を特定

それを見たはやては、本局と聖王教会に打診して、共同で潰す算段を取った
あれほどのことをされて、タダで済ませる気は毛頭無い

「私達をコケにしたこと、後悔させたるわ……」

はやてはそう言つて、艦長席から立ち上がり

「機動六課、出撃や!!」

と宣言した

それを受けて、本局のドックからアースラは出港

地上に降下を開始した

その頃、地上本部のある一室

そこでは、一人の将官がジツと腕組みしていた

その将官の名は、レジアス・ゲイズ

スカリエツティとの関与が発覚し、指揮権が剥奪されて、今は自身の執務室で推移を

見守っていた

「オーリス……お前がここに居る必要は無い……中央指揮室に行きなさい」

レジアスがそう言うと、眼鏡を掛けた女性士官

オーリス・ゲイズが

「今の私は、父さんの部下ではありません……ですから、その指示に従う必要もありません」

ん」

と返した

そうこの二人は、実の親子だった

そしてオーリスは、父レジアスの秘書の立場にあった

そしてそのオーリスも、スカリエッティとの関与の疑いによりレジアスと共に、レジアスの執務室で事態の推移を見守っていた

事実、オーリスはレジアスがスカリエッティと繋がっていて、幾らかの資金提供や研究設備の譲渡をしていたことを知っている

だから、大人しく待機しているのだ

そんなオーリスの言葉に、レジアスは

「頑固だな……誰に似た？」

と苦笑を浮かべた

すると、オーリスは

「間違いなく、父さんです」

と断言した

それを聞いたレジアスは

「確かにな……」

と同意しながら、椅子に深々と身を預けた

そうして、窓の方に椅子を回しつつ、懐から一枚の古い写真を取り出した

その写真には、今より若いレジアスと片手に槍を持った長身の男が写っていた

その男の名は、ゼスト・グランガイツ

レジアスの数少ない友の男である

「ゼスト……」

レジアスはゼストの名前を言いながら、写真を撫でた

ゼストとレジアスは、古くからの親友だった

そして二人は時空管理局に入局した際、ある約束をした

それは、『二人で管理世界を平和にする』というものだった

そして、魔法適性があったゼストは、地上本部の武装隊へ

魔法適性が無かったレジアスが、高級将官の道へと進んだ

そしてゼストは、その腕前から武装隊のエースとなった

だがレジアスは、上層部の権謀術数に揉まれて、何時しかその約束を忘れてしまつて

いた

そうして気づけば、スカリエツィと繋がっていた

自分の案たる、戦闘機人や人工魔導師の優秀さを測るために

そして今から数年前、ゼストの隊がスカリエツティを調査していることを知った
だからレジアスは、ゼストに

『スカリエツティのことは、他の部隊に任せろ。お前は、別の案件を調査しろ』
と言った

それは、ゼストを案じたというのもある

だが真の目的は、スカリエツティを捕まえさせないためである

レジアスの指示を聞いたゼストは

『なぜだ！ こいつは放っておけば、管理世界の脅威になる！』

と反論した

しかしレジアスは、それに対しての説明を何もせずに行った

それから少しした時、レジアスにある一報が届いた

それは、ゼストの隊が発見したスカリエツティのアジトの一つの調査に向かい、全滅
したということだった

それを聞いたレジアスは、そのタイミングでゼストとの約束を思い出した

そして、死んだと思っていたゼストに謝り続けていたのだ

約束を忘れていたことを

しかし先週に起きた、地上本部襲撃事件

その時に、ゼストの姿が確認された

しかも、地上本部に向かっけてきていた

それを知ったレジアスは、後悔から来る心労で倒れたのだ

「お前は……ワシを恨んでいるのか……ゼスト……」

レジアスはそう言いながら、空を見上げたのだった

再起する者

はやての指示を受けて、六課は出撃

まずフォワード陣が、アルトが操縦するヘリに乗って出撃

その後、隊長陣

並びに、ダークマテリアルズが出撃

フォワード陣は、進攻してくるだろう戦闘機人達の迎撃及び、ギンガの保護

隊長陣はゆりかごに突入し、内部に居るだろうヴィヴィオの保護及び、ゆりかごの無力化

そしてダークマテリアルズは、機動遊撃戦闘

ダークマテリアルズの真骨頂は、少数精鋭による圧倒的突破力

それを一ヶ所に縫いとどめるといのは、愚策でしかない

ならば、敢えてダークマテリアルズには行動目的を設定せずに、自由に戦域を駆けさせた方が良くと判断したのである

『ごめん、皆！ かなり荒く行くから、何かに掴まって!!』

と言ったのは、ヘリを操縦しているアルトである

そのヘリは、十数機のガジェットに追われていた

『このヘリには、迎撃用の武装なんて無いの！ 機動で振り切るしか!!』

アルトはそう言つて、ヘリをビルの合間を進ませた

アルトが操縦するヘリだが、本来は降下した局員の援護

並びに、今のように攻撃してくる敵のように、魔法による迎撃用武装がある機種だった
しかし、元々は故障していたのを回してもらつた機体であり、その迎撃用魔法武装が
壊れていた

アルトも出撃までには直そうと尽力したが、部品が足りなかつたのだ

六課隊舎の陥落で、予備部品の悉くが喪失

そのためにアルトは、苦渋の決断で迎撃用魔法武装をオミット

その分の魔力を、機動の向上に回したのである

その甲斐あり、今は機動性でガジェットを離している

だが数が多かつたのと、場所が悪かつた

ガジェットはアームを使い、ヘリには出来ない旋回をしてジワジワと迫ってきていた

『ヤバッ!?!』

しかも気付けば、前に回り込んでいるガジェットすら居た

アルトは何とか離れようとしたが、そのガジェットは既に、ミサイルランチャーを展

開

発射態勢に入っていた

それを見たアルトは、最悪の時のためにカーゴブロックをパージさせるスイッチに手を伸ばした

その時

『お前らは、そのまま進め!!』

と声が聞こえて、そのガジェットが魔力弾の直撃を受けて撃破された

その声を聞いて、アルトは

『ヴァイス陸曹!』

と嬉しそうな声を出した

そう、先の攻撃は彼女にとって憧れの人物

ヴァイス・グランセニツクの狙撃だった

それは、少し時を遡る

今から少し前

聖王教会病院の一室

「ぐっ……あ……」

「起きたか、ヴァイス……」

目覚めたヴァイスに、狼形態で居たザフィーラが声を掛けた
するとヴァイスは、痛みを堪えながらも体を起こして

「あれから……どんくらい経ちました……？」

とザフィーラに問い掛けた

するとザフィーラは

「あれから、一週間経った」

と答えた

それを聞いたヴァイスは、悔しそうに

「一週間も!?! 俺は何をしてたんだ……!」

と言った

するとザフィーラは、ドアの方に向かった

それを見たヴァイスが

「旦那、どこに……」

と問い掛けた

その問い掛けに、ザフィーラは

「戦場だ……」

と答えた

それを聞いて、ヴァイスは

「だけど、旦那もまだ怪我が!？」

と慌てた

それは、間近で見たから気付けた

ザフィーラはまだ、怪我が治りきっていない

「……だが、主や仲間達が待っている……」

ザフィーラはそう言って、部屋から退室

それと入れ替わるように、一人の少女が入ってきた

肩辺りで切り揃えた茶髪に、左目に眼帯を着けた少女

その少女を見て、ヴァイスは驚いた

その少女は、ヴァイスの妹

ラグナ・グランセンニツクだった

「ラグナ……お前、なんで……」

ヴァイスの耳には、起きた時から避難勧告の放送が聞こえている

魔導師でもないラグナは、本来だったらかなり先に避難誘導される筈だ

「はやてさんをお願いして、後回しにしてもらったの……お兄ちゃんに、言いたいことが

あったから……」

ラグナの言葉を聞いて、ヴァイスは内心で舌打ちした
余計なことを、と

だが、ラグナはそれに気付かず、眼帯を外して

「ほら、お兄ちゃん……左目、大分治ってきたんだ……今はまだ、ボンヤリとしか見えな
いけどね……もう少ししたら、普通に見えるようになるって、お医者さんから言われた
よ……」

と言った

左目の怪我

その理由は、数年前に起きた立て籠り事件

その時の人質がラグナで、狙撃班の一人がヴァイスだった

しかしヴァイスは、緊張からか誤射

ラグナの左目は、失明してしまったのだ

そして、その誤射が理由となりヴァイスは人を撃てなくなってしまうのだ

「ねえ、お兄ちゃん……私ね、昔のお兄ちゃんが好きだったんだよ？ ……百発百中の鷹
の目って……」

鷹の目

それが、狙撃手だった時のヴァイスの異名だった

「六課の皆さん……今、頑張ってるよ……お兄ちゃん……だから……」

ラグナはそう言いながら、涙を流した

それを見たヴァイスは、ラグナの頭を撫でてから

「ラグナ……悪いが、部屋から出てくれないか？」

と言った

それを聞いたラグナは、不思議そうに首を傾げた

するとヴァイスは、傍らの机に置かれていた制服を見ながら

「着替えて、仲間の所に行きたいんだ」

と言った

それを聞いて、ラグナは

「うん！」

と嬉しそうに、部屋から出た

そして数分後、ヴァイスは制服に着替えて出てきて

「避難するんだぞ、ラグナ！」

と言って、病院から出た

その後は、近くの武装隊の基地に行き、ヘリを借りて駆け付けたのである

鷹の目が再起した瞬間だった

思考と捜査

「状況は、最悪一步手前……かしら？」

と言ったのは、瓦礫に身を隠していたティアナだった

そんなティアナが居るのは、廃都市区画のあるビルだった

ガジェット群はアルトの操縦もあり、なんとか降りきれた

そして、予定降下ポイントでフォワード陣は降下

行動を開始した

だがそこに、別の方向から飛来してきたガジェット群のミサイルの雨が降り注いだ

幸いにも、誰もミサイルの直撃は無しだった

しかし、分散させられてしまった

キャロとエリオは、ルーテシアと接敵し、交戦開始したらしい

スバルは、本来フォワード陣全員で確保する筈だったギンガへの接触に動いた

そしてティアナは、畳み込むように現れた戦闘機人三名から逃げようと、廃ビルに入った

しかし、それこそが戦闘機人達の作戦だったようだ

廃ビルに入った直後に、その廃ビルを囲む隔絶結界が展開
廃ビルからの脱出が出来なくなった

しかもその廃ビル内に、奇襲してきた戦闘機人三名が居る

「諦める訳には、いかないわね……」

ティアナはそう言うのと、策を考え始めた

同時刻、ミッド郊外の山

その洞窟内を、一組の男女が調べていた

一人は、騎士甲冑を纏ったシスター・シャツハ

そしてもう一人は、余りにも場違いな白いスーツを着た長い緑色の髪が特徴の男だっ
た

そんな男の足下に、半透明の犬が一頭現れた

その犬の頭を撫でると、男

時空管理局査察官、ヴェロツサ・アコースは

「うん、やつぱりここに間違いない」

と言った

それを聞いたシスター・シャツハは

「以前より、情報収集速度が上がりましたね」

と誉めた

すると、ヴェロツサは

「まあね。僕だって、遊んでた訳じゃないんだ」

と返答した

その直後、ヴェロツサの足下に大量の犬が姿を現した

ウシエンドリヒト・ヤークト
無限の狛犬

ヴェロツサの魔力が続く限り、隠密性と情報収集能力を有する犬を、無限に作り出すことが可能な、ヴェロツサ独自の魔法である

ヴェロツサはその犬達を洞窟に放ち、スカリエッティのアジトかどうかを探っていたのた

そして、結果は大当たり

探っていた洞窟には、大量のガジェットが展開していて、更には何らかの実験機器が無造作に置いてあった

それを確認したヴェロツサは、その洞窟がスカリエッティのアジトと断定

詳細位置座標を、こちらに向かつてきている筈のフェイトに通信で知らせようとしたのだが、その時

「ロツサ!!」

シスター・シャツハが、ヴェロツサの名前を呼びながらヴィンデルシャフトを構えた
そこで、ヴェロツサも気付いた

自身が探っていた洞窟内から

そして、周囲から夥しい数のガジェットが姿を現した

それを見たヴェロツサは

「この数は……流石に厳しいか……」

と呟いた

シスター・シャツハは兎も角として、ヴェロツサはそこまで戦闘は得意ではない
だがだからと言って、シスター・シャツハ一人に任せるつもりも無かった
すると、シスター・シャツハは分かっていたのか

「前衛は私が……補佐をお願いします」

と言った

それを聞いたヴェロツサは、微笑み

「分かった……だけど、その前に」

と言って、魔力弾を頭上に打ち上げた

「今は……」

「まあ、彼女なら分かってくれる筈さ……」

シスター・シャツハの眩きに、ヴェロツサはそう言った

それは、遠くまで見えるようにと光の強さを増した魔力弾

つまりは、洞窟の入り口を教える信号弾だ

フェイトの頭の回転の早さを信じ、古典的な方法で報せたのだ

そしてヴェロツサは

「来るよ、シャツハ！」

とシスター・シャツハに教えると、自身も構えたのだった

対峙

「ギン姉……」

今スバルの前には、変わり果てた姿の姉

ギンガが居た

以前は青を基調としたバリアジャケットだったが、今は黒と紫を基調にしたバリアジャケットに変わっている

そのギンガと対面したスバルは、拳を構えた

その時

「スバル……」

とギンガが、スバルの名前を呼んだ

「え……」

それが予想外だったスバルは、思わず固まった

すると、再び

「スバル……お願いがあるの」

とギンガが言ってきた

「ギン姉……?」

「スバル……私を、殺して」

ギンガからの予想外過ぎる言葉に、スバルは固まった

「今の私は、スカリエッツェの操り人形……意識は有るけど、体の自由が効かないの……」

その理由の一つは、プレシアとグランツが施した細工にあった

それは、フィジカルプロテクトとナーヴプロテクトの二つだ

フィジカルプロテクトとナーヴプロテクト

これらは、相手がスカリエッツェだと分かった後に、プレシアとグランツが考案した装置だ

実は六課には、スカリエッツェが関与している人間が四人居る

まずは、フェイト・T・ハラオウン

彼女は、スカリエッツェが広域次元犯罪者になる前に提唱した人造魔導師計画

通称、プロジェクト・FATEによって産み出された

それは、彼女が養母となっているエリオ・モンディアルも同じである

初期方式の人造魔導師計画には、多少の欠陥があった

しかし二人は、その欠陥を乗り越えて今まで生きてきた

そして三人目と四人目は、スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマである。スバルとギンガの二人は、スカリエツティとは違う人物が先に作り出した戦闘機人だった。

プレシアとグランツは、スカリエツティがこの四人に興味を持つと確信していた。しかし、フェイト、エリオ、スバルの三人はすぐに除外した。

その理由だが、フェイトはその実力からだ。

フェイトの実力は、近距離では古代ベルカ騎士に匹敵。

遠距離戦も、かなりの実力を有している。

そんなフェイトを、捕獲または誘拐するなど、かなり難しいだろう。

次に、スバルとエリオの二人。

この二人はそもそも、フォワード陣四人として動くことが多く、更には近くに隊長か副隊長が居る。

だから、スバルとエリオの二人の誘拐や捕獲も、一朝一夕にはいかない。

だが、ギンガは違った。

ギンガは、陸士108部隊から出向してきているだけだ。

そのために、単独行動が他の三名に比べて、圧倒的に多く、捕獲するのは容易いと考
えた。

だからプレシアとグランツは、ギンガの同意を得て対策を講じた
それが、フィジカルプロテクトとナーヴプロテクトだ

フィジカルプロテクトは、肉体操作を

ナーヴプロテクトは、洗脳を防ぐためのものだ

そして、効果は有ったようだ

洗脳は、されていない

どうやら、いくらスカリエッティとは言っても片方の解除が精一杯だったようだ

しかし、それが逆にギンガを追い詰め掛けていた

自分の知らぬ内にスバル達を傷付けるのも嫌だが、意識が有って傷付けるのも辛かつた

だから、スバルに嘆願したのである

すると、スバルは

「嫌だ!!」

と声を張り上げた

それを聞いたギンガが驚いていると、スバルは

「誰も死なせたくななんだ！ 少なくとも、私の手が届く範囲の人達は！」

と涙ながらに言った

そして、拳を構えて

「だから、ギン姉は助ける！ スカリエッツィの手から、絶対助けるんだ!!」

と言った

それは、魂の誓い

スバルが、心に誓ったことだった

そのスバルを見て、ギンガは嬉しく思った

（昔は、あんなに戦いたくないって言ってたスバルが……こんなに大きくなってたのね……）

ギンガがそう思うと、体が勝手に構えた

それを見て、ギンガは

「スバル……私の肩甲骨の間の位置に、違和感があるわ……多分、スカリエッツィが埋め込んだ機械がある筈よ……そこを攻撃しなさい」

と助言した

それを聞いたスバルは、頷き

「分かった……行くよ、ギン姉……」

と言つて、動き出した

これが、姉妹の戦いの幕開けだった

姉妹の戦い 1

『はああああああ!!』

二人の雄叫びと共に、拳同士がぶつかり合う

スバルとギンガ

二人が使う格闘技は、同じシューティング・アーツ

だが、腕はギンガの方が上

その理由は、至って単純

訓練を始めたのは、ギンガの方が先だからだ

しかも、身体能力面がスカリエッティによって上げられているのも判明している

腕力、反応速度

それらが、スバルの知ってるのよりも上だった

だが

「負けるもんかああああ!!」

スバルはそう気合いの声を上げ、更に加速させた

グランツとマリエルが改造を施した、スバルの愛機たるマツハキヤリバー

その性能は、戦闘機人の身体能力を解放したスバルの全力を、遺憾無く受け止めていた

以前はスバルの力に耐えきれず、壊してしまった

だが、その時のデータからグランツとマリエルが改造

重量は倍近く重くなったが、スバルの全力に耐えられるようになった

「くっ!?!」

スバルの上段回し蹴りを受けて、ギンガは一度展開していたウイング・ロードから弾き飛ばされた

だが、即座に新しいウイング・ロードを展開

着地した

そのタイミングを狙い

「ぜりゃあああ!!」

全速力で肉薄

顎目掛けて、拳を全力で振り上げた

その威力は、風切り音で予測出来る

直撃を受ければ、いくらギンガとも言えども気絶は避けられないだろう

だがそれは

「なっ!？」

当たればの話である

なんとギンガは、スバルの全力アッパーを体を独楽のように回転させて回避
しかも即座に、裏拳のカウンターが放たれていた

その一撃は間一髪防いだけど、その一撃で大きく後ろに押されてしまった
すると、ギンガが

「スバル!　大振りはダメよ!　小さく!」

とアドバイスしてきた

確かに、その通りである

大振りには威力はデカイが、その分隙も大きくなってしまふ

先程は、その隙を突かれた形になるだろう

「うん!」

スバルが返答した直後、今度はギンガが動いた

ギンガは一気に肉薄すると、右ストレートを放った

その一撃を、スバルは防御

懐に入り込もうとした

だが、それに合わせるように膝蹴りが放たれた

それをスバルは、ギリギリで防御した

だがその直後に、スバルの後頭部に肘打ちが放たれて直撃

スバルは一瞬、意識を失いかけた

だが、それを気合いで堪えてギンガの腹部にフックを放った

「ガフツ!」

「ぐっ……っう……」

そこで、二人は一旦離れた

「本当に……強くなったわね、スバル……」

「ヴィータ副隊長やなのはさんのおかげ……私一人だったら、ここまでじゃ無かった

……」

ギンガが嬉しそうに言うのと、スバルはそう言った

そのまま少しすると、また二人は接近

格闘戦を始めたのだった

コピー因子と黄昏因子

戦い始めて、どれ程経ったのか

スバルは荒く呼吸を繰り返していた

それに対して、ギンガの呼吸はまだ落ち着いている

(スカリエッティ……かなり強化してるわね……普段の私なら、もうかなり体力面が心配なのに……)

ギンガは冷静に、そう思っていた

やはり姉妹だけあり、体力は似通っていた

技術はギンガが高く、体力面はある程度無駄な動きをしないようにしてカバーしていた

それに対して、今の動きは多々無駄が有るのに体力が一向に減る気配がしない

(身体能力の大幅強化……思ったより、かなり厄介ね……むしろ、スバルはよく付いてきてる……よく鍛えられた証拠ね……流石は、噂に名高い高町一尉……)

ギンガは心中で、スバルとスバルを鍛えたなのはを称賛した

「スバル……今からでも、一度逃げなさい……速さなら、貴方のほうが速いみたいだから、逃げ切れるはずよ！」

ギンガがそう言うと、スバルは

「嫌だ！……ここで逃げたら、次は何時戦えるか分からない！……だから、逃げない！」
と言つて、構えた

「スバル……」

スバルの決意の固さに、ギンガは思わず涙を流した

その時、体内から不思議な感覚が襲つた

それは、果てしない闘争心

「な、なにこれ……」

とギンガが困惑していた

その時、二人の耳にあの音が聞こえた

ハ長調ラ音

「な、この音!? まさか、黄昏因子!?!」

とスバルが驚いていると、ギンガの体に次々と不思議な鎧が装着されていく

それはまるで、古の拳闘士のような出で立ちの鎧だった

「まさか、ギン姉に!?!」

とスバルが驚愕した

その時、二人が居た場所が変わった

それまで廃棄都市区画に居たというのに、遺跡に変わった

その光景に、ギンガは困惑しながら

「これが、黄昏空間!？」

と声を上げた

その間スバルは

(不味い……今は因子持ちの人が誰も居ないの!?)

と焦っていた

黄昏因子の強さは、骨身に染みている

今この場所には、今まで黄昏因子と先陣切つて戦っていた明久はおろか、適合者が誰

一人として居ない

そう思っていた

その時

(……めるな……)

スバルの中で、声が聞こえ始めた

「マツハキヤリバー……じゃない……まさか!？」

スバルがある一つの答えに行き着いた

その後

（我ら黄昏因子を……舐めるな!!）

と怒りの声が聞こえて、スバルの身から今まで感じたことの無い程の力が溢れてきた
そして、三度頭の中で

（我は黄昏因子……タルヴオス!!）

と声が聞こえた

それを聞いたスバルは

（これしかない！あの力に勝つには、同じ黄昏因子しか無理なんだから！）

と決意を固めた

そして、今までフェイト達がしていたように、自身が支配されるといふ恐怖に耐えな
がら

「来て……私は、ここに居る!! タルヴオス!!」

と力強く、その名前を呼んだ

その直後、スバルのスバルの両手に手甲が現れた

禍々しいまでのトゲが着いた手甲が

姉妹の戦い 2

「スバル……その力は……」

「古代の力……黄昏因子……」

ギンガが驚いた表情で問い掛けると、スバルは答えてから構えた今のスバルは、体から溢れてくる怒りの感情を必死に抑えていた

その怒りの感情は、スバルのものではない

スバルの中

タルヴオスの怒りだ

タルヴオスを含めた黄昏因子は、自我が強いと明久から説明を聞いていた

その自我が強い黄昏因子が、自身のコピー因子を前にして許せるだろうか？

答えは、否である

特にタルヴオスは、復讐する者

自身のコピー因子を前にして、怒らない訳が無い

(少しでも気を抜いたら、怒りに飲まれそう……怒りに飲まれず、ギン姉を無力化……つ

まり、短期決戦!!)

スバルはそう決意すると、一気にマツハキヤリバーを最高速に加速
ギンガに迫った

するとギンガは、まるで台風を彷彿させる回し蹴りをスバルの頭目掛けて繰り出した
その一撃をスバルは、左手を斜めにして受け流し、ギンガに肉薄し

「はあああああ!!」

今までで最大の気合いの声と共に、右拳をギンガの腹部狙って振るった

その一撃は、見事ギンガの腹部に命中

「がはっ!!」

その威力に、ギンガは大きく後退した

そしてギンガはすぐに顔を上げて、驚愕に目を見開いた

既にスバルが懐に入り込み、攻撃を用意していた

「だりやあああああ!!」

気合いの声と共に、スバルは体を独楽のように回転させて遠心力を上乗せしていた左
手をギンガの胸部に叩き込んだ

「ぐうっ!!」

その威力は、先程よりも高かった

一撃受けただけで、ギンガはウインググロードから大きく吹き飛ばされたしかも、一つの遺跡の壁をまるで砲弾のように貫通

二つ目の壁に、めり込んだ

その時、ギンガの背中からミシリという嫌な音が聞こえた

それを聞いて、ギンガは

(なんて威力！ 背骨が軋んだ!?)

と理解した

だがそれでも、ギンガの体は戦うつもりらしい

新しくウインググロードを展開し、着地

構えを取ると、周囲を見回した

その直後、背後の壁から破碎する音が聞こえた

まさかと思うと、ギンガの体は振り向こうとした

その直後、ギンガの体にスバルの左手が当てられ

「思いつきりいくよ、ギン姉」

とスバルの声が聞こえた

それを聞いたギンガは

「やりなさい、スバル」

と言った

その直後

「破壊ノ……一撃!!」

と今までと比較にならない一撃が、背中に叩き込まれた

その威力は、ギンガを数十m吹き飛ばした

余りの威力に、ギンガの意識は短い間だったが飛んだ

そして気付いた時には、夕焼けに変わっていた空が青空に戻っていた

しかも、そんなギンガをスバルが優しく抱き支えていて

「大丈夫、ギン姉……?」

と問い掛けてきた

その問い掛けに、ギンガは

「大丈夫よ、スバル……」

と答えた

こうして、姉妹の戦いは幕を下ろしたのである

言葉

スバルがギンガと戦っていた時、ティアナの方は

「大丈夫……何とかなるわ」

と自分を落ち着かせていた

今ティアナが戦っているのは、戦闘機人三名

数では、圧倒的不利だ

しかしティアナは、その数の差をもともせず戦っていた

その理由の一つに、彼女の魔法があつた

フェイク・シルエット

ミッド式魔法でも珍しい幻術魔法で、普通の人間だったら看破は不可能と言われてい
る

更にティアナのフェイク・シルエットは、機械すら騙す精度を誇る

そしてそれは、今も生きていた

戦闘機人達は、フェイク・シルエットに攪乱されていた

「クソッ！ また幻影か!？」

「どうなってるっすか!？」 幻影対策されたのに!？」

幻影に魔力弾を撃ち込んだ戦闘機人達が、苛立った声を上げた

そこに、ティアナは精密照準を着けて魔力弾を発射

それに気づいた光剣持ち

デイドが、魔力弾を弾いた

それを見たティアナは、クロスミラージュの魔力アンカーを頭上に射出

穴が空いていた天井から、次のフロアに移動

隠蔽魔法のオブティック・ハイドを発動した

そしてすぐさま、先ほどまで居た場所にフェイク・シルエツトで幻影を産み出した

その後

「そこかあああああ!!」

と怒鳴り声聞こえて、ショートカットの赤い髪にスバルによく似た顔立ちの戦闘機

人

ノーヴェが現れて、フェイク・シルエツトに拳を叩き込んだ

その瞬間、フェイク・シルエツトは掻き消えた

それを見て、ノーヴェは舌打ちして

「ちくしょう！ またか!!」

と怒りの声を漏らした

そこに、もう一人の赤髪の戦闘機人

ウエンデイが現れて

「まさか、これがオリジナルの黄昏因子の力なんすか!？」

と言った

それを聞いて、ティアナは

(正解)

と内心で、肯定した

ティアナの黄昏因子

増殖、メイガス

その能力は、魔力密度の増殖

それにより、少ない魔力で魔力弾の生成

更に、フェイク・シルエツトを発動すれば、本物と見分けがつかない幻影を産み出せ

る

しかも

その時ティアナは、自身が通った穴に上半身を下にしてもう一つフェイク・シルエツ

トを発動した

それを見て、ノーヴェエが

「けっ！ どうせ、偽物だろうが！」

と悪態を吐いて、背を向けた

すると、ウエンデイが

「ダメっす、ウエンデイ!! それを破壊しないと!!」

と忠告して、複合武装のライディング・ボードを構えた

だが、遅かった

ウエンデイが魔力弾を発射する前に、そのフェイク・シルエットは爆発した

これは、明久との訓練中に分かったことだが、産み出したフェイク・シルエットを一定時間内に破壊しなければ、爆発を起こすのだ

しかもその威力は、最初に込めた魔力に比例して上がる

今回はある狙いがあったので、込めた魔力はそれなり

そして、その狙いは成功した

フェイク・シルエットが居た付近一帯が崩落

下に居たノーヴェエとウエンデイを、瓦礫で押し潰したのだ

もちろん今回ののは、相手が戦闘機人だからこそその策だった

普通の人間や魔導師相手だったら、使えない手である

「ノーヴェエ！ ウエンデイ！」

そんな方法で無力化されるとは思ってたのか、デイドは困惑した様子で二人を呼んだ

その後

「ごめんなさいね」

とティアナが、隙だらけのデイドにスタンバレットを撃ち込んだ

そしてティアナは、周囲を見回した

目の前には、今しがたスタンバレットを撃ち込んで無力化したデイドが倒れている後ろを見れば、崩落した瓦礫によってウエンデイが半ば近く埋まっている

ノーヴェエの姿が見えないが、ノーヴェエも無力化出来ただろうと判断し、今まで戦っていた廃ビルの外を見た

そこには、廃ビルを囲むように空間遮断式の結界が張られていた

それにより、ティアナは脱出処か戦況の把握すら出来なくなっていた

それをどうするか考え始めた時、その結界が解けた

「誰かが、張ってた戦闘機人を無力化した？」

そう呟いたティアナは、戦況を把握しようと通信を開こうとした

その時

「はああああああつ!!」

瓦礫を跳躍して、頭から血を流しているノールヴェエが突っ込んできた

それを見たティアナは、驚きつつも素早くクロスミラーズをダガーモードに変更
魔力刃を交差させて、ノールヴェエの拳を受け止めた

なんとか受け止めたが、その威力にティアナは僅かに押された

そんなティアナを睨み、ノールヴェエは

「オットーが捕まったらしいが、もう関係ない！ 最後まで、暴れてやる!!」

と言った

それを聞いて、ティアナは

「諦めなさい！ 戦況は、こちらに傾いてきてる!!」

と投降を勧告した

だが、ノールヴェエは

「投降なんかするか!! あたしは兵器だ！ 兵器なら兵器らしく、最後まで戦う!!」

と答えた

それを聞いたティアナは

「違うっ!!」

とノーヴェエの腹部に、蹴りを叩き込んだ

その一撃に、ノーヴェエは咳き込みながら後退した

だが、その距離をテイアナは詰めて

「貴女達は、兵器なんかじゃない……確かに、少し特殊な生い立ちかもしれない……だけど、貴女達は人間よ……人間として、生きていける……」

と言って、銃口を突き付けた

そして、再び

「お願いだから、投降して……」

と告げた

その言葉を聞いて、ノーヴェエは両手を突き涙を流した

無限の欲望

スバルとティアナ、エリオとキヤロがそれぞれ戦っていた時、フェイトはシャツハ及びヴェロツサの二人と合流

スカリエツテイのアジトに突入した

そしてある程度進むと、ヴェロツサは別行動を始めた

ヴェロツサは稀少^{レアスキル}技能や魔法の特性上、単独行動を得意としている

だから、一人で行動した方がいい結果になると判断したのだ

そして別れた後、フェイトとシャツハの二人は更に奥へと向かった

そうして暫く進むと、広い通路に出たのだが、その両側に人が入ったポットが見えた

その一つに歩み寄ったシャツハは、思わず顔をしかめて

「これは……」

と言葉を漏らした

すると、フェイトも同じようにポットに近づいて

「ドクターの人体実験の被害者でしょう……」

と言いながら、ポットの表面を撫でた
そして

「バルディツシユ」

と愛機を呼んだ

するとバルディツシユは

《生態反応はありません》

と簡潔に答えた

その直後だった

二人の頭上の天井が一部崩落し、ガジェットⅢ型を含めた数機が瓦礫と一緒に落ちてきた

それを見た二人は、即座に散開離脱しようとした

だが、そんなシャツハの足首を地中から出てきた手が掴んで妨害してきた

しかしシャツハは、慌てることなく

「ヴァインデルシャフト!!」

と愛機に、カートリッジを一発ロード

手が出てきた床に、攻撃を放ち大穴を空けた

そして散開離脱し、襲撃してきたガジエツトを全て撃破したフエイトは

《シスター・シャツハ！ 大丈夫ですか!?》

と念話で呼び掛けた

すると、シャツハは

《瓦礫で掠り傷を負いましたが、問題ありません。目の前の戦闘機人を捕縛したら、すぐに向かいます》

と答えた

そんなシャツハの前には、座り込んでいる戦闘機人

セインが居た

セインが座り込んでいる理由だが、先ほどシャツハの足首を掴んで妨害したのは彼女だ

だがその妨害を、まさか床を打ち抜くことで解除するとは予想していなかったのだ

セインの予想としては、精々が多少暴れる程度だった

だがまさか、床を打ち抜くという力業をしてくるとはと、予想外の事態から座り込んでしまったのだ

だが、彼女とて戦うために産み出された戦闘機人

セインは頭を振ると、立ち上がって構えた

しかし、実を言えば相手が悪かった

確かに戦闘機人だが、セインは偵察目的に調整された、いわゆるサポート役だ
それに対して、シャツハは聖王教会騎士団の中でも手練れの陸戦AA+というニアS
ランクの騎士なのだ

その実力は、陸戦という限定のみだが、シグナムと互角の試合が出来るほどだ
事実、セインは終始シャツハに押されることになる

そしてフェイトは、奥から靴の音が近づいてきていることに気付き、視線をそちらに
向けた

そして姿を見せたのは、長い紫色の髪に金色の目

そして、白衣を着た男だった

その男こそが、今起きている事件の首謀者

広域次元犯罪者として指名手配されている、通称ドクター

ジェイル・スカリエツティだった

スカリエツティは背後に、トーレとセツテの二人を伴って現れた

そして、恭しく

「予想より早かったが、ようこそ。時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウン……私
が、ジェイル・スカリエツティだ」

と名乗った

その三人を睨みつつ、フエイトは構えた
そして、長年の因縁の戦いが幕を開ける

金色の意志表示

「ジエイル・スカリエッツィ……」

フェイトは苦々しい表情を浮かべながら、スカリエッツィを睨んだ

しかしスカリエッツィは、そんなフェイトを無視して

「フェイト・テストロツサ……私が初期の初期に提唱した人造魔導師の技術を使い、プレシア女史が産み出した……」

と語り出した

「しかし、プレシア女史が当時欲していたのは、不慮の事故に巻き込まれて死んだ一人娘……アリシア・テストロツサだった……だが、失敗……記憶の転写は出来ていたが、差異が生まれてしまった……それ故、与えられた名前は当時の企画名……プロジェクトF A T Eから取った、フェイトという名前だった……」

スカリエッツィが語る度に、フェイトは怒りで頭が沸騰しそうになった

だが、自身に冷静になるように言い聞かせた

執務官になってから、フェイトは様々な犯罪者を捕まえてきた

その中で、色んな犯罪者が居た

自分の戦闘力に自信があり、真正面から向かってくる者

自分はまったく動かず、部下やまったく関係ない者を実働者として操る者

そして、スカリエツテイのように科学者として武器や兵器を開発し、騒動を起こす者

そしてスカリエツテイのようなタイプは、話術で相手の冷静さを奪って撃退・撃破を

狙ってくる

だから重要なのは、冷静さを保つことだ

「さて、君が怒っているのは、母親に無茶な命令をして事故を引き起こした会社か……はたまた、自身を省みずに人造魔導師計画で娘を甦らせようとした母親か……それとも……」

「全部だ……と、言っておく」

スカリエツテイが最後まで言う前に、フェイトはそう告げた

プレシアは危険だと警告したのに、無茶な実験をして死者多数を出した企業

そして、病気に侵されながらも治療せずに、愛娘を甦らせようと実験を繰り返した
母親^{プレシア}

そしてなにより、人の命を何とも思わず、人造魔導師計画という狂気の計画を提唱したスカリエツテイ

それらに、フェイトは怒っていた

勿論だが、P・T事件ジュエルシードが終わった後に、その企業と改めて裁判をして勝訴

企業からの謝罪と、莫大な慰謝料を貰った

病気に關してはフェイトが涙ながらに訴えて、プレシアが生きる意志を見せたことで、明久が古代魔法ザ・ワールドで治した

なお、病気に關して明久は

『生きる意志を示さなくても、無理矢理治してたね！ フェイトが泣くし、プレシアさんへの罰も含めてね！』

と後に語っている

なおその時、明久の額には血管が浮き上がっていたという

どうやら、娘たるフェイトを泣かしたことを怒っていたらしい

そのことから、明久は怒らせたらいけないという不文律が、出来たとか……

閑話休題

「しかし、こちらに來たのは二人だけか……たった二人で來るとは、予想外だったね

……」

スカリエッティがそう言うと、周囲に凄まじい数のガジェットが姿を現した

その数は、数える気すら起きない

更に、スカリエツティの後ろから二人の戦闘機人が姿を見せた。それは以前、六課隊舎に向かおうとしたフェイトを、二人掛かりとは言え、終始押しつた二人だった。

以前の交戦時に、名前は把握している

ガツシリした体格の女が、トーレ

両手に巨大なブーメランを持ち、長い茶髪の女がセツテ

その二人が、スカリエツティの後ろに立った

そして、少し前にスバルからもたらされた情報

コピー因子

全員ではないようだが、一部戦闘機人は黄昏因子のコピーを保有している

「さあ、執務官殿……一人で来たことを、後悔するように」

スカリエツティはそう言うと、金属質なグローブを装着した

それを見たフェイトは、バルディッシュを収納

右手を掲げて

「来て……私は、ここに居る！ スケイス!!」

その手に、巨大な鎌を顕現させた

それは、フェイトの意志表示だった

黄昏因子には、非殺傷設定などない

太古の昔では、殺し合いが当たり前だったのだ

だからそれは、殺してでもこの事件を終わらせるといふ、フェイトの固い意志の現れだった

そしてその鎌を、スカリエツテイに向けて

「覚悟するのは、貴方達です……この事件、必ず六課が止めます！」
と宣言したのだった

ミッド上空戦

フェイトがスカリエツティと対峙していた、ほぼ同時刻

ミッド市街地上空では、航空魔導師達が夥しい数のガジェットと交戦しており、その全体指揮を、はやてが執っていた

「右翼の103は急速反転して、一気に展開！ 左翼の93と挟撃！ 187は急上昇して、ゆりかごのガジェット射出口に集中射撃！」

『了解！』

『お前ら、103と息を合わせろ！ 味方撃ちなんて、ダサイマネはすんじゃねえぞ!!』

『撃ちまくれ!!』

はやての指示に従い、複数の部隊が機敏に動き始めた

すると、近くで戦っていたのはから

『はやてちゃん！ ゆりかご右上方、ガジェットが異様に密集してて、第19隊が押さ
れるー!』

と報告がされた

それを聞いたはやては

「了解や！ 第19隊！ 今から広域殲滅魔法をやるから、500後退!!」

と言うと、杖を高々と掲げた

そして

「闇に、沈め……デアボリック・エミッション!!」

と魔法を発動させた

すると、音声通信で

『八神二佐、助かりました！ これより、攻勢に出ます!』

と告げられた

それを聞いたはやては

「了解！ ただし、無理は厳禁や！ 誰か怪我したら、即座に後退するんや!!」

と言って、自分に向かってきたガジェットに対して、ブラッディダガーを放って、撃

破した

そして、小声で

「戦力が足らん……集まった魔導師達で、随時部隊は構成され、逐次投入されとるが……

圧倒的に足らん……」

と言った

そもそも、戦力差が開いてる

それは、理解していた

だが、予想よりも開いていた

予想よりも、ガジェットの数が多いのだ

もしかしたら、予備や旧式も投入したのかもしれない

「だからって、諦めてたまるかいな！ 私らが諦めたら、誰がミッドを守るんや!!」

はやてがそう言った直後、焰の砲撃が戦域を走った

そして

『その意気です、はやて』

となのはによく似た声が、通信で聞こえた

それに続くように、水色の雷光が、縦横無尽に駆け抜けた

それに遅れて、幾つも爆発が起きた

すると

『そうだよ！ ようは、あのガラクタが出てくるより多く撃破すればいいだけ!!』

とフェイトに似た、快活な声

その二つの声を聞いて、はやてが

「シユテル！ レヴィ!!」

と嬉しそうに、二人の名前を呼んだ
そして

「つて、地上本部に迫ってたガジェット郡はどうしたんや？」

と問い掛けた

すると、二人は

『それでしたら、こちらは陸士108部隊が迎撃に来てくれました。何やら、血気盛んでしたが……』

『こっちは、武装隊55隊が来た！ 確か、ゼスト？ の仇！ とか、言ってた！』
と告げた

どうやら、代わりの部隊が戦っているようだ

それも、相当士気が高いようだ

だが、予期せぬオーバーSランク魔導師達の合流

それに、はやては笑みを浮かべて

「二人は各自の自由判断で、好きに攻撃！ 派手に暴れて!!」

と指示を下した

それは、指示と呼べないかもしれない

だが、はやてはそれが最善だと判断した

シユテルとレヴィの二人は、歴戦の高ランク魔導師達である

その判断力は、一般魔導師達とは比較にならない

ならば、下手に拘束するよりも、自由に戦わせるほうが良いだと判断したのだ

はやての指示に、二人は斉唱で返答しつつ、攻撃を開始

それを視界のに納めつつ、はやては

「ここからが勝負処や！ 精鋭と名高き、航空魔導師隊総員！ 全員気張るんや！ あ

のガラクタ共を、鉄屑にしたれ!!」

と声を張り上げた

まだ、戦いは序盤なのだから……

内部に突入

「もう、何機撃破したかなあ……」

「七十辺りまでは数えてたが、途中で諦めたよ、アタシは」

なのはの呟きに、ヴィータが呆れた様子でそう言った

「どうやら、ガジェットの数に呆れているようだ」

しかし、その気持ちにはなのはも同意しなかった

「いくらなんでも、数が多すぎだった」

歴戦の二人でも、その数には辟易していた

そこに

『高町一尉、ヴィータ二尉！　こちら、第29臨時部隊！　敵巨大船内への突入口を確保

しました！』

と通信が入った

それに重なり

『両名は、ゆりかご内部に突撃！　中に居る被害者の保護と被疑者の確保を!!』

とはやてから、指示が下された

「了解！」

「了解!!」

なのはとヴィータの二人が返答した直後、シユテル、レヴィ、幸村の三人が素早く布陣

ガジェットに対して、猛攻を開始した

「行つて！ 二人共！」

「ここは、私達が引き受けます！」

「あのクソ医者から、あの子を助けてください！」

という三人に、なのはとヴィータはサムズアツプと返答

第29臨時部隊が確保した突入口から、ゆりかごに突撃した

その瞬間、二人が展開していた飛行魔法の効果が失われ、二人は落ちそうになった

だが二人は、慌てずに飛行魔法を再展開し、出力を上げた

そうして二人は、ゆっくりと着地した

「なるほど……AMF濃度が、桁外れに濃いんだね……」

「ああ……こりゃ、下手したら魔力が直ぐに切れるぞ……」

二人は、飛行魔法の効果が失われた原因を、察していた

ゆりかご内のA^{アンチ・マギリング・フィールド}M Fの濃度が桁外れに高いのだ

AMFというのは、魔力の結合を阻害して、魔法の発動を妨害する技術である。今までも、ガジェットがAMFを発動していたが、二人には対して効果が無かった。恐らくは、今までものガジェットの戦闘データから、二人ですら魔法が発動しづらいAMF濃度を割り出して、ゆりかご内部に展開したのだろう。

こうなると、幾ら保有魔力量が多い二人でも、長時間の戦闘は難しくなってしまうだろう。

だからだろう、なのはは

「ヴィータちゃん、ちよつと待ってて」

と言った

そして、自身の内側に意識を向けて

「お願い、来て……私は、ここにいます！」

と自身の内に居る存在に、呼び掛けた

「フィドヘル!!」

その名前を呼ぶと、なのはの手に鉄扇が現れた

それを見たヴィータは

「それで、どうするんだ?」

と問い掛けた

するとなのはは

「こうするの……アプコーブ！ アプコーマ！」

と魔法を発動した

「ん？ ……体が、軽い？」

「うん！ 身体強化魔法を重ね掛けしたんだ」

ヴィータの疑問の言葉に、なのはは笑みを浮かべた

それは、ザ・ワールドの強化魔法である

ミッドとベルカにも、強化魔法はある

しかし、自身に対して負担が大きいのばかりなのだ

なのはも、過去の失敗からそれを学んでおり、最近は負担の少ない強化魔法の開発に

も携わっていた

しかし、どうにも上手く行っていないかった

そこに知ったのが、明久がよく使っていたザ・ワールドの強化魔法だった

それを知ったなのはは、カイトに問い掛けてみた

『私でも、ザ・ワールドの強化魔法を使えるの？』

なのはのその問い掛けに、カイトは

『黄昏因子を保有したのなら、使える筈だよ』

と答えた

それを聞いたなのは、明久とカイトにその強化魔法の呪文を聞き、何回か試したのだ

そうすることで、新しい強化魔法開発に活かせればと思った

それがまさか、ここで生きるとは、なのはは思っていなかった

「更に……サラサラっ」と

なのははそう言っ、広げた鉄扇の表面に文字を書いた

内容は

《白き魔法使いと鉄槌の騎士への妨害を無くす》

と

《白き魔法使いと鉄槌の騎士に付与した強化魔法を切るまで継続》

だった

「おお？ 気だるさが、消えた……」

「うん！ AMFを無効化したの！ 色々試したんだよ、これ？」

ヴィータが体の調子確かめて言う、なのはは笑みを浮かべながら、そう告げた

それもまた、予言者の効果の検証結果だった

フィドヘルを得てからなのは、何が出来るか色々試したので

その結果から、出来ることを把握

今活かしているのだ

「さてと……先に進まないといけないけど……」

「かなり広いからな……迷いそうだ」

二人がそう言った時、通信ウインドが開き

『高町一尉！ ヴィータ二尉！ ゆりかご内部のスキャンが完了しました！ そちら

に、転送します！』

と通信士が、告げてきた

その直後、二人の前にゆりかごの内部構造データが表示された

それを見た二人は

「これは……」

「見事に、真反対だな……」

と呟いた

それは、内部をスキャンした結果から予想された、エンジンルームと玉座の間の位置

だった

エンジンルームは最下層の一番後方に対して、玉座の間は一番上の最前だった

「アタシがエンジンルームに行つて、エンジンを破壊してくる……なのは、ヴィヴィオを助けてこい」

「うん、分かつた……ヴィータちゃん。無理しちや、ダメだからね？」

なのはがそう言うと、ヴィータはグラーフアイゼンをなのはに突き付けて

「なのはが言うな。なのはが一番、無理してきたじゃねえか」

と言つた

それを聞いたなのはが苦笑いを浮かべると、二人は拳を軽くぶつけてから動いたそれぞれの目的を、果たすために

攻防と逮捕

「吹き飛ばす！ ジャガーノート!!」

デИАーチエの放った魔法により、大量のガジェットが吹き飛んだ。しかし、それを上回る数が地上本部目掛けて殺到する。

それを見たデИАーチエは、舌打ち混じりに

「ええい！ いい加減にしつこいわ!!」

と怒声を張り上げて、更に魔法を発動

多数のガジェットを撃破した

そこに、二人の少女

アマタとキリエが現れて

「デИАーチエ！ 第318陸士隊から、避難完了の報告がされました！」

「それと一緒に、ユーリが第901陸士隊の援護に回ったわ！」

と報告してきた

それを聞いたデИАーチエは

「よし、分かった！ 他の陸士隊には、死力を尽くして民間人の保護と避難誘導を最優先させよ！ 飛行隊には、小隊単位で遊撃を繰り返すように厳命！ 上空から、陸士隊の援護をさせよ！」

と言つて、新たに広範囲空間殲滅魔法を発動

地上本部を攻撃しようとしていたガジェットを、殲滅した

そして

「お前達は以後、私の援護よ！ あのガラクタ共を、これより先に進ませるな！」

とアミタとキリエに、指示を下した

「了解！」

「はいはい！」

二人は返答すると、両手のバリアント・ザツパーをクルクルと回しながら戦闘を開始した

それを端目に、ディアーチエは

「鬱陶しいわ！ このガラクタ共が!!」

と怒声を張り上げて、接近してきたガジェットII型を、杖で殴り壊した

そして、自動追尾式の誘導弾を発射

その時、頭上を一人のコートを着た男が通過していった

「今のは……」

それを見送ったディアーチエは、目を細めて

「過去の、清算か……」

と呟いた

場所は変わり、スカリエッティの地上アジト内部

そこでフェイトは、二人の戦闘機人と交戦していた

とはいえ、既に一人

セツテは、壁にめり込んで戦闘不能になっていた

やったことは、至極単純

一気に肉薄し、鎌をバットよろしく、豪快にフルスイングした

ただ、それだけ

しかしその一撃で、防御に使ったエツジブルーメランを粉碎し、セツテを壁に叩き付けたのだ

それにより、セツテは戦闘不能

トーレと激しい機動戦闘を、繰り広げていた

「ぐうっ!!」

「っあっ!!」

トールはフェイトの一撃を、手首の専用武装で防御した

だが、フェイトはそのまま離脱しつつ、一撃を叩き込んだ

その一撃で、トールは一度バランスを失ったものの、優れた体幹で直ぐに体勢を建て直した

そして、スカリエツテイに向かおうとしたフェイトを見つけ

「ライド・インパルス!!」

と自身の能力を発動

フェイトに一気に迫り、攻撃を繰り出した

しかしフェイトは、背後からの不意打ちの一撃を、鎌を背中側に回して防御蹴りを繰り出した

その一撃にトールは、自身も蹴りを当てることで防御と兼ねて、一度距離を取った

そして再び、トールとフェイトの機動戦闘が開始された

二人は狭い洞窟内を、縦横無尽に駆けながら攻撃を互いに繰り出した

そして幾度目かは不明だが、二人は交差した

その直後、トールの専用武装が破損

それに動揺し、トールは一瞬固まった

だがその一瞬の間を見逃さず、トールに肉薄

鎌を繰り出し、床に叩き付けた

「後はあ!!」

床に叩き付けたトーレが戦闘不能なのを確認し、フェイトはスカリエツティを睨んだ。しかしスカリエツティは、不敵な笑みを崩さずに手を動かした。

それにより、フェイトを捕まえようと、様々角度からバインドがフェイトに伸びていく。

だがフェイトは、それを機動で回避か鎌で無効化

スカリエツティに、振り下ろした

その一撃を、スカリエツティは受け止めて

「ああ、素晴らしい……」

とフェイトを見ながら、眩き始めた

そして、狂気に染まった目を輝かせて

「その力……古代魔法……欲しかったなあ!」

と言った

「その力……長時間は使えまい……君はここで、足止めだ!」

スカリエツティがそう言った直後、フェイトはスカリエツティの両手を蹴りあげて、体を独楽のように回転させて

「はあああああ!!」

と気合いの声と共に、鎌でスカリエッティを打ち付けた

その一撃で、スカリエッティは柱に叩き付けられた

フェイトは荒く呼吸しながら、ゆっくりとスカリエッティに歩み寄り

「広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ……貴方を、逮捕します」

と宣告した

男達

なのは達がゆりかごに突入した頃、時空管理局地上本部のある一室

そこでは、二人の男が質疑応答していた

一人は、時空管理局地上本部の中将

レジアス・ゲイズ

そしてもう一人は、そのレジアス・ゲイズの嘗ての友人

地上本部の武装隊でも、以前は切り札の一人だった男

名前は、ゼスト・グランガイツ

「答えろ、レジアス……嘗ての約束は、嘘だったのか……」

ゼストはそう言うと、懐から一枚の写真を取り出して、レジアスの机の上に投げた

それは、二人が若い時に撮った写真だった

互いに、正義と友情を誓った日に撮った写真

ゼストは現場で

レジアスは上層部で

互いに信じ、誓った正義の為に全力を尽くすと約束した
だがある日から、すれ違いが起き始めた

その矢先に、ゼストは一度死んだ

スカリエツティのアジトの一つに、部隊を率いて突入

中で戦闘機人と交戦、チンクに手傷を負わせたが、部下を庇って負傷

そして、全滅した

その後、そのスカリエツティの手により偽りの命が与えられて、蘇った

部下の娘たるルーテシアと引き合わされて、行動を共にするように言われた

せめて、そのルーテシアを守ろうと

そしてルーテシアを守りつつ、今日という日を迎えた

「俺達が誓った正義は、何処に行った……」

ゼストの静かな問い掛けに、レジアスは写真に触れて、答えようとした

だが

「がっ!?!」

そんなレジアスの胸元から、鉤爪が出てきた

「レジアス!?!」

その凶行を行ったのは、レジアスの背後に居た女性下士官だった

「父さん!？」

予想だにしなかった光景に、オーリスは目を見開きながら駆け寄ろうとした
だがオーリスは、その女性下士官に蹴り飛ばされた

「貴様、何者だ!？」

その蹴りからゼストは、その女性下士官が普通の事務官ではないと看破

デバイスを構えた

すると、まるで水鏡のように女性下士官の姿が揺れた

そして現れたのは、ピッチリとしたボディスーツを着た一人の女だった

首もとには、IIという数字が彫られた金属プレートがあつた

「戦闘機人か……!？」

「初めまして……騎士ゼスト……私は、戦闘機人の二番目……ドゥーエと申します」

ゼストが睨むと、女

ドゥーエは恭しく、頭を下げた

そして、まるでゴミを見るかのような目付きで、レジアスを見下して

「私はドクターより、邪魔な者達と、最早役に立たない者を始末しに参りました」

と答えた

邪魔な者達というのは、時空管理局の最高意思決定機関

最高評議会である

最高評議会というのは、時空管理局の創設に携わった三人だ

だがその正体は、脳髓だ

時空管理局は、百年以上の歴史を誇る機関である

つまりは、その三人も百歳以上ということになる

その三人は、その過程の中で肉体を捨てた

そして脳髓だけで生きながらも、裏から時空管理局を操ってきた

それは、《自分達が居なければ、次元世界は平和にならない》と思い込んでいたからだ

嘗ては三人も、平和と正義の為に立ち上がったのだろう

しかし、長い年月がそんな彼等を変えてしまった

長い年月の間に、彼等は自分達が居なければ、次元世界は平和にならないと思うよう

になり、その為に非合法な手段を取るようになってしまった

まさしく、手段と目的が入れ替わってしまったのだ

そんな三人だが、自分達の命が尽き掛けることに気づいた

だから、人造魔導師計画を使って、過去に実在した一人の研究者を生み出した

開発コード、アンリミテッド・デザイア無限の欲望

与えた名前は、ジェイル・スカリエツィ

そのスカリエツティにより、人造魔導師計画の完成度はより高まり、何よりも戦闘機人計画の技術的難関を、スカリエツティは解決した

だがその頃から、スカリエツティは最高評議会の指示を無視し始めた

その対策を決めようとした矢先に、地上本部襲撃事件が発生

そして今日、ドゥーエによって殺されてしまったのだった

「騎士ゼスト……貴方も、ドクターの指示に従っていただきます」

ドゥーエはそう言つて、鉤爪をレジアスから抜いた

レジアスは、血を吐き出しながら

「ゼスト……俺は……俺は……」

と言つて手を伸ばしたが、そこでこと切れた

それを認めるいたゼストは、俯いて

「俺は、何時も遅かった……遅すぎた……！」

と呟いた

その時、廊下を走っていたシグナムは魔力の高ぶりを感じた

「急がなくては！」

シグナムはそう言うのと、走る速度を上げたのだった

騎士

地上本部の廊下を進み、シグナムはある部屋に入った

そこは、時空管理局地上本部中将、レジアス・ゲイズの執務室

その部屋に入ったシグナムは、驚きで固まった

その部屋には、二つの遺体が有った

一つは、その執務室の主たるレジアス・ゲイズ

もう一つは、ボディースーツを着た金髪の女

ドゥーエだった

(レジアス中将の傷は……あの女の爪か……)

レジアスの胸部の傷を見て、シグナムはレジアスの死因を察した

そして、ドゥーエの死因たる傷を見て

「これは、貴方が？」

とゼストに問い掛けた

ドゥーエの死因は、胸部の刺創だった

そしてその証拠に、ゼストの持つ槍から血が滴っていた
すると、ゼストは

「そうだ……俺が遅すぎたから……こうなった」

と声を震わせながら、返答した

それを聞いたシグナムは、数瞬目を閉じると

「騎士ゼスト……ご同行願います」

と投降するように勧告した

しかしゼストは、槍を持つ手に力を入れて

「すまないが、それは出来ない……」

と言って、シグナムと相対

槍を構えた

それを見たアギトは

「旦那!？」

とゼストに近づこうとした

だが

「来るな、アギト!!」

ゼストはそれを、声で止めた

「俺にはまだ、やるべきことが残っている……それまで、止まる訳にはいかん！」
ゼストはそう言って、シグナムを睨んだ

それに対し、シグナムは

「やめてください、騎士ゼスト！ 偉大な先輩ある貴方とは、戦いたくない！」

と言った

実はゼストは、シグナムが所属する武装隊の先達だったのだ

それをシグナムは、過去のデータから調べあげた

だがゼストは

「どっちみち、俺の命は長くない……」

と言った

気付けば、ゼストの口端から血が流れている

それも、赤黒い血だった

「騎士ゼスト……」

その血を見て、シグナムはゼストの命が風前の灯火だと気付いた

だからこそ、シグナムは構えた

同じ騎士として、最後の相手になるつもりなのだ

「参ります……我が名は、夜天の王、八神はやての騎士……烈火の将、シグナム!!」

「……ゼスト・グランガイツ……」

二人は互いに名乗ると、同時に武器を構えた

そして、少しの間沈黙が続く

「オーバードライヴ!!」

「紫電……一閃!!」

戦いは、一閃で終わった

ゼストの一撃は、シグナムの髪留めと肩アーマーを吹き飛ばした

それに対してシグナムの一撃は、ゼストを右肩から左腰に掛けて斬っていた

「旦那!」

倒れたゼストに、アギトは涙を流しながら近づいた

「アギト……俺がロードで、すまなかったな……」

「そんなこと言うなよお……」

ゼストの言葉を聞いて、アギトは涙を流しながら首を左右に振った

そして

「旦那は……立派な騎士で、自慢のロードだった……だから、そんなこと言うなよお

……」

と言った

そんなアギトを、ゼストは撫でながら

「お前は、以後……シグナムをロードとしろ……」

と言った

「旦那!？」

「シグナムの魔力光は……アギトのに近い……更に、シグナムは炎を使う……親和性は、高い筈だ……」

アギトは驚くが、ゼストは自身を静かに見つめるシグナムを見ながら、そう言った
そして

「騎士シグナム……」

とシグナムを呼んだ

呼ばれたシグナムは、片膝を突いた

するとゼストは、右手の指輪を外して

「この中に……スカリエッティ達の出来る限りのデータが、入っている……」

とシグナムに差し出した

それを、シグナムは受け取り

「確かに、預かりました」

と告げた

それを、聞いて

「出来れば、ルーテシアも助けたかったが……」

と悔しそうに言った

それを聞いたシグナムは

「その少女ならば、私の部下達が保護しました……ご安心ください」

と教えた

それを聞いて、ゼストは

「良かった……」

と窓から、空を見上げた

そして、最後に

「お前達は……間違うな……その歩む道を……」

と言って、永遠の眠りに就いたのだった

突破と怒りの鉄槌

「流石に、最少だけ撃破して進む……って訳には、いかないね」

《そのようです。敵の密度が、異様に高いです！》

と言ったのは、ゆりかご内部の通路を進んでいたなのはとその愛機のレイジングハートだ

なのはが進む通路の先には、所狭しとガジェットが展開し、攻撃してくるそれをなのはは、防御しつつ魔力弾で撃破していく

だが、レイジングハートの言う通りに、敵の密度が余りにも濃かった撃破した傍から、新しいガジェットが出現してくる

もう既に、何機撃破したのか覚えていないだが、数などはどうでもいい

「今は、王の間に進むのが最優先……それに、レイジングハート？」

《探索は順調です……約三割完了しました》

なのはの問い掛けに、レイジングハートはそう答えた

実は、ヴィータと別れた時に索敵スフィアを幾つか放っていたのだ

その目的は、このゆりかご内部に居るだろうある敵の搜索だった

それは、フェイトからの通信で判明したことだった

スカリエツティは、自身の作品であるナンバーズ12人の子宮に、人造魔導師計画の技術を使つた自身のコピー胎児を入れていたので

しかもその胎児は、一ヶ月もすれば出産出来て、一年もすればスカリエツティ本人と同じ思考をするようになる

つまりは、一人も逃がす訳にはいかなのである

既に、残るのは後二人

その二人は、ゆりかご内部に居ると予測されている

ならば、逃がす訳にはいかない

一人でも逃がせば、また大規模事件に繋がるのは明白なのだから
「そのまま、搜索を続行！ 私のサポートは、最低限でいいから!!」

《了解！ 必ず見つけます！》

そう言った直後、なのはは自身の直感に従って構えた

そして

「エクセリオンバスター!!」

砲撃を放った

その先には、巨砲

イノーマス・カノンを構えたデイエチの姿があった

しかもなのはが撃つと同時に、デイエチも砲撃を放っていた

二人の砲撃は、通路の中間地点で激突

一瞬の抵抗の後、なのはの砲撃がデイエチの砲撃を飲み込んで、デイエチに直撃した
「ば、バカナ……このAMF濃度の中で……カートリッジも使わずに……っ!？」

スカリエツティ達の事前予測では、ゆりかご内部に展開されているAMFにより、突
入出来るのは最低でもAランクまで

しかも突入出来ても、カートリッジ等を使わなければ、長時間の戦闘や高い威力の攻
撃は無理だとしていた

だがなのはは、その予測を覆して砲撃してきた

しかも、一瞬で溜め終えてだ

「これが……オーバーSランク……!？」

とデイエチが呟いた時、なのはが近づき

「動けないだろうけど、拘束させてもらうね」

と言って、バインドを施した

そして

「後で、搬送する局員が来るから……それまで、大人しくしててね」

と言って、奥に進んだ

それを見送り、デイエチは僅かに身動きして

「……ダメか……」

と声を漏らした

どうやら、バインドをほどこうとしたようだが、諦めたらしい

そして、大人しく寝転がり

「……までか……」

と呟いた

同時刻、下層では

「うしつ……ここまで、問題なしだな……」

とヴィータは、自身のコンデイションを確認していた

ここまで被弾らしい被弾は無く、無傷で進めた

そしてヴィータは、ポケットの中から予備のカートリッジを取り出すと

「カートリッジも、残弾はまだまだある……余裕で行けるな」

と頷いて、ポケットに仕舞った

そして軽く体を動かして

「しっかし、古代魔法は凄えな」

と呟いた

高濃度でのAMF展開域だというのに、ヴィータは殆ど負担を感じていなかったそれはやはり、なのはが施した強化魔法が理由だろう

だからとはいえ、油断は出来ない

今居るのは、敵の本拠地とも言えるゆりかご内部

気を抜いていたら、何が起きるかは分からないのだ

そう意識して、ヴィータは深呼吸した

その瞬間、ヴィータは嫌な予感がして、グラフ・アイゼンを伸ばしながら振り回した

そして背後で、硬い何かに当たる音が響いた

「つぶね!! 見えない奴が居たか!」

ヴィータはそう言って、一気に移動した

その数秒後、ヴィータの居た場所の周囲で、空間にノイズが走った

(光学迷彩つてやつか……)

とヴィータが思った直後、それは姿を現した

まるでカマキリを彷彿させる、ガジェットだった

それを見た瞬間、ヴェータの中に凄まじい熱が広がった

それは、怒りから来る熱

だが同時に、歓喜した

「アハハハハハハ……っああああ!!」

最初は笑い声を挙げて、一瞬にしてそのガジェットに肉薄

雄叫びを挙げながら、グラーフ・アイゼンを振り下ろした

その一撃で、一機のガジェットは両断された

潰れたのではなく、両断

それは、余りにも振る速度が早かった故だった

風どころか、金属すらも断ち切る程にグラーフ・アイゼンを早く振るつたのだ

「あたしの前に、姿を現してくれて、ありがとうよ……おかげで、てめえらをぶつ壊せるんだからなああああ!!」

何せ、そのガジェットは今から数年前に、なのはと明久に重傷を負わせたガジェットの同型に間違いなかったからだ

そのガジェット

仮称、ガジェット0型

正に、ヴィータにとっては憎い敵だった

「今からてめえらを……」機残らずぶっ壊してやらああああ!!」

ヴィータはそう言って、ガジェットを全て撃破するために暴れ始めたのだった

優勢

「よし、自爆システムも止まった……」

と汗を拭いたのは、コンソールから手を離れたフェイトである

スカリエッツィの地上アジトを攻撃し、陥落させたフェイト達だったが、その直後に自爆システムが作動したのだ

普通だったら脱出すれば済む話だが、この地上アジトには、スカリエッツィの実験で亡くなった人達の遺体やまだ生きている人達が居た

フェイトはその遺体や、生きている人達を遺族や親族の下に返したいと思ったのだ

だからバルディッシュの演算能力と、シャーリーに協力してもらい、その自爆システムを止めたのである

「ありがとうね、バルディッシュ、シャーリー」

『いえいえ』

《お気になさらず》

フェイトの感謝の言葉に、シャーリーとバルディッシュはそう答えた

そして、壁際で拘束されているスカリエッティに振り向き

「貴方達の企みも、ここまでです。貴方の仲間達は、私の仲間達が続々と捕縛しています」

と宣告した

すると、スカリエッティは笑ってから

「確かに……私の娘達は捕まってきたようだね……今、クアットロも捕縛寸前らしい」

と言った

それを聞いたフェイトは、片眉を上げた

スカリエッティには、詳細な戦況を教えていない筈だと

だがその時、それまで髪に隠れていたらしい小型の通信機が右耳に装着されていることに気付いた

「いつの間にか?！」

フェイトはそれを奪うと、地面に叩き付けた

しかし、スカリエッティは笑いながら

「ゆりかごはどうやら止められるようだが、RA……リバー・ス・アバター計画は、止められんよ!!」

と言った

「リバース・アバター計画!」

フェイトが驚いていた同時刻、ゆりかご内部

「はあ……はあ……はあ……」

主機関部屋前の廊下を、傷だらけのヴィータが歩いていた

その傷からは、激戦だったことが伺える

しかし、やはり歴然の猛者だけはある

全て、致命傷は避けていた

そして、ヒビだらけになったアイゼンを見て

「アイゼン……自己修復、行けるか?」

と問い掛けた

すると、アイゼンは

《《行けます!》》

と答えて、カートリッジを一発ロードした

アイゼンやレヴアンティンはアームドデバイスであり、バルディツシユのようなイン

テリジェントデバイスではない

しかし、管理局に勤めて約10年

その間に、幾度となく改修を繰り返してきた

それにより、幾つか前には無かった機能を有した

まず一つ目は、カートリッジの装填方法の変更

以前は一発ずつ手詰め式だったが、弾倉式に変更された

これにより、装弾数の増加による経戦能力の向上と弾切れ後の装弾のタイムロスの減

少

これは、戦闘面に大きなプラスである

そして何より、デバイスの修復機能である

カートリッジを一発使用して、デバイスの損傷を修復するのである

これは、ヴィータの力が向上し続ける力にアイゼンの強度が追い付かないことからの

改善策だった

勿論だが、強度の向上も行い続けている

これにより、ヴィータは以前より長い時間戦えるようになっていた

それらにより、ヴィータは主機関部屋前に到着した

自身の怪我は、ポケットの中から包帯を取り出して、軽く止血を行い対処

そして、巨大なドアを見て

「ぜえりゃああ!!」

と喚声を上げながら、アイゼンを叩き付けた

その一撃で、ドアは粉碎

ヴィータは、中に入った

そして見えたのは、巨大な四角形の駆動炉だった

それからは、凄まじい魔力が漏れてきている

「いっつか……」

それが間違いなく駆動炉だと確信し、ヴィータはアイゼンを握り直した

そして、キツと駆動炉を睨んで

「ぶっ壊す!!」

と飛びかかったのだった

再び場所が変わり、ゆりかごの中間層の管制室

そこでは、クアットロが焦っていた

「エース・オブ・エースやあのチビ騎士が強いことは知ってたけど……!!」

そう言ったクアットロの前には、コンソールの他に幾つかのウィンドウが開いていた

そのうちの二つは、ゆりかご内部の戦いが映されていた

片方は先ほどのヴィータだが、もう片方はなのはが映されていた

なのはが戦っているのは、クアットロが精神操作で操っているヴィヴィオだ

しかし、その姿は変わっている

ヴィヴィオは幼い見た目から、なのはと同年位の見た目になっている

これは、ヴィヴィオに施された強化施術も関係しているが、一番大きいのは聖王システムだろう

聖王システムというのは、適合率の高い人物を核にして、死ぬまで戦わせるといいうシステムである

その適合率が高ければ高いほど、戦う聖王の戦能力が高くなる

そしてヴィヴィオは、最後の聖王

オリヴィエのクローンである

オリヴィエの適合率は、歴代聖王家の中でも最高峰と言われていた

その戦能力は、文句なしのオーバースランク

クアットロの計算では、高濃度AMF下ではヴィヴィオの圧勝の筈だった

しかし現実には、違った

なのはは、研ぎ澄まされた戦技でヴィヴィオを押ししていた

「こんな筈では!?!」

そしてクアットロは、あるミスをしていた

なのはの戦い方が、時間稼ぎだと気づかなかつたのだ

気づいていれば、脱出することを考えていたかもしれない
ゆりかごの陥落が、近づいていた

破壊

「畜生……固すぎるだろうがよ……」

と呟いたのは、駆動炉の破壊を試みていたヴィータだ

しかしその体は、更に血に濡れていた

それは、最初に一撃を入れた後だった

駆動炉を守るためだろう、スファイアが出現

ヴィータに、砲撃を放った

ヴィータは一度駆動炉の破壊を止めて、そのスファイアの破壊に動いた

しかし、スファイアは膨大な数が展開

その全てを破壊するのに、被弾と時間を重ねた

だがヴィータは、己の技量の全てを發揮して、スファイアを全て破壊

その後、駆動炉の破壊を再開した

だが、何度打ち込んでも、駆動炉にはヒビ一つ入らない

「だけどよ……諦めるわけには、いかねえんだ……だから、アイゼン!!」

《了解!!》

ヴィータの呼び掛けに答えて、アイゼンは一気にカートリッジを四発ロードしたその直後、アイゼンは一気に巨大化

それを視界の端で確認しながら、ヴィータは跳びあがり、魔力で足場を形成し着地
駆動炉を狙い

「ぶち抜けええええ!!」

と叫びながら、振り下ろした

ヴィータが振り下ろしたアイゼンは、先端に出来たドリルで駆動炉をガリガリと音を立てながら削り続けた

だが、駆動炉表面で爆発が起きて、ヴィータは吹き飛ばされた

「がはっ!？」

吹き飛ばされたヴィータは、足場から落下

地面に叩きつけられた

そして駆動炉は、無傷だった

それを見て、ヴィータは

「なんでだ……なんで壊れねえ!!」

と叫んだ

その目端からは、涙が溢れてきていた

今ヴィータの脳裏には、外で奮闘している仲間達の姿が見えた

「あたしがこれを壊さないと、皆が助からないんだ！ だからああああああ!!」

ヴィータがそう叫ぶと、アイゼンは残ったカートリッジを全てロード

先ほどより高く跳んで、足場を形成し着地

「うああああああ!!」

と叫びながら、アイゼンを振り下ろした

アイゼンは先よりも、力強く駆動炉に攻撃を加えた

だがこの時、限界が来た

いくら継戦能力が高くて、限界は訪れる

特にヴィータは、全身の怪我を魔力を使って止血

更に、ここに至るまで夥しい数のガジェットやスフィアを破壊してきた

結果、カートリッジは今装填していた弾倉が最後だった

「ああああああ!!」

ヴィータは叫んでいたが、アイゼンは先端からヒビが広がっていき、砕けた

それと同時に、ヴィータの膝から力が抜けて、ヴィータは落ちた

「はやて……皆……ごめん……!」

落ちながらヴィータは、仲間達に謝罪した

だが

「謝る必要なんて、ないよ」

と優しい声が聞こえて、ヴィータを受け止めた

「は……………やて……………リイン……………アインス……………」

そこには、リインと融合したはやてとアインスが居た

「鉄槌の騎士、ヴィータと鉄の伯爵、グラフ・アイゼンがこんな姿になるまで奮闘したんだ……………」

「それで壊せない物なんて、あるわけがないやろ……………」

アインスとはやてがそう言った直後、駆動炉にヒビが少しずつ広がっていく

そして、三人が見ている先で、駆動炉は碎け散った

ヴィータの奮闘は、決して無駄ではなかったのだ

着実に、戦況という天秤は傾いていった

管理局の優勢に

最終決戦 1

「……ようやく、見つけたよ」

と言ったのは、ヴィヴィオと戦っていたなのはだ

そしてなのはの近くに、探していた敵

クアットロの位置が表示されたウインドウが、開かれた

『ま、まさか……ずっと私を探しながら!?!』

「ヴィヴィオとの戦いは、時間稼ぎに徹してた……」

なのははそう言うのと、クアットロが居る場所に向けて杖を向けた

玉座を正面にして、左斜め下39度に

『む、無理だわ! ここまで、何枚の壁が有ると!?!』

「あれ……知らないの? 私の得意技……」

クアットロの言葉に、なのはは自身でも驚く程に無感情にそう言っていた

そしてクアットロは、思い出した

なのはの得意技

『か、壁抜き!?!』

そうしている間にも、溜まり続ける魔力
そして

《主、充填完了しました。何時でも》

とレイジンググハートが告げた

それを聞いたなのはは、コクリと頷いて

「貴女がしてきた罪……償ってもらおうよ」

と言った

そして

「ダイバイン……バスター!!」

なのはの砲撃が放たれて、クアットロに向かった

放たれた砲撃は、易々と幾重もの壁を貫通

そして、クアットロの居る管制エリアに到達し

『い、イヤアアアアアア!?!』

逃げようとしたクアットロに、直撃した

それを確認したなのはは、動きを止めたヴィヴィオに相對した

場所は変わり、スカリエツィ地上アジト付近

「お疲れ様です、テストロッサ執務官。後は我々が」
「お願いします」

遅れてやってきた管理局の護送部隊に、フェイトやシャツハ、ヴェロッサは捕縛した
戦闘機人やスカリエツティを引き渡した

その直後、全体を凄まじい魔力が覆った

「つつ!?!」

「この魔力は!?!」

護送部隊の局員ですら、その圧倒的魔力に気付いた

そしてフェイトは、反射的に頭上を見上げた

遙か上空に見えたのは、揺らめく蒼い焰

それを見たフェイトは、思わず

「スカリエツティ! 貴方は、まさか!?!」

とスカリエツティを睨んだ

するとスカリエツティは、笑い声を漏らしながら

「どうやら、クアットロも捕まったようだね……」

と呟いた

そして、続けて

「私達全員は捕まったが、まだ計画は終わっていない……RA計画……リバーズアバター計画は、止まらんよ！」

と告げた

「リバーズアバター計画!?!」

「クツクツク……破壊神と称された化物……クビア……さあ、目覚めるがいい!!」

とスカリエツテイが言った直後、空間が割れた

そして空間の割れ目から、それが姿を現した

その存在は、巨大な異形だった

蛸と龍が混じったような見た目

だが、その巨体からは禍々しき力が溢れていた

その異形が吼えると、空気が震えた

今ここに、次元世界を賭けた戦いが幕を開く

クビア

「な……」

「あれは、まさか……神話にその名を記す……クビア？」

それを見上げたヴェロツサは驚愕し、シャツハは呆然としていた
シャツハは真面目な修道騎士であり、歴史や伝説も勉強していた

その中に、一つの神話があった

それは、古代ベルカよりも遙かに昔

アルハザードが実在したとされる時代

その時代に信奉されていた、創生神アウラ

その対の存在、破壊神クビア

その二つの存在は、永い間争い続けた

アウラは、世界を守るために

クビアは、全てを破壊するために

『地上に展開している聖王教会騎士団並び、時空管理局の全員に通達！ あのクビアに、

総力を挙げて攻撃せよ！　今は、所属のことは忘れろ！　決して、少数で攻撃するな！』

と言ってきたのは、宇宙に展開した時空管理局次元航行艦隊の提督

クロノ・ハラオウンだった

『次元航行艦隊は、ゆりかごを撃破し次第支援砲撃を行う！　総員、気力を振り絞れえ！！』

クロノのその言葉の後、先に航空部隊が動いた

ベルカ騎士が斬り込み、管理局魔導師達が砲撃を放った

攻撃が当たる度に、巨体のどこかで爆発が起きる

しかし、クビアに傷は無い

そこに、地上から砲撃が放たれる

それは、ガジェットスの迎撃を行っていた魔導師達だった

例え微々たる攻撃でも、ダメージを与える

決して、無力ではないと信じて

「撃ちまくれえ！！」

「あの化け物を、地上に来させるなあ！！」

その号令を受けて、砲撃部隊は更にその砲撃の密度を上げる

その密度の砲撃は、普通の相手ならば即座に撤退を選択していただろう

だが、そこに居るのは普通ではない

破壊神、クビア

攻撃は命中しているのに、明確にダメージを負った様子はない

「ダメです！ あいつの質量が、大きすぎる?!」

「諦めるな！ 我々が諦めたら、誰があのかげ物を止められるんだ!!」

一人の局員が言った言葉に、一人のベルカ騎士がそう言っただけ

その騎士とて、クビアに明確なダメージを与えられていないのは承知している

だが、諦めたら世界が終わる

そういう確信があった

そこに

『こちら、次元航行艦隊！ これより、クビアに対して砲撃を行う！ 射線上の部隊は退

避せよ!!』

と通達がされた

それを聞いた攻撃部隊は、クビアから離れた

その直後、遙か上空から光の雨が降った

衛星軌道に展開している、次元航行艦隊からの砲撃だった

その砲撃は、なのはのデイバインバスターに匹敵する魔力を込められていた

普通ならば、相手を十分に倒せる威力だ

だが、相手たるクビアは普通ではない

僅かに身じろぎするだけで、大したダメージになっていなかった

「この、化け物がああああああ!!」

一人の局員が、そう吼えながら両手に持っていた杖で砲撃の乱打を放った

その時だった

クビアが、口を開けて

『』

嗚哮を挙げた

その直後、近くで攻撃をしていたベルカ騎士達から力が抜けて落ちた

「おい!?!」

「どうした!?!」

それを受け止めた局員達は、ベルカ騎士の顔を覗きこんだ

そして、理解した

「なっ……」

「し、死んでる……!?!」

そのベルカ騎士達は、全員息絶えていた

クビアは、ただ咆哮を挙げただけ

それだけなのに、数十人のベルカ騎士達が死んだ

「畜生があああああ!!」

それに怒ったらしい局員の一人が、砲撃を放った

その砲撃は、クビアの頭部に直撃

それでようやく、クビアは体を下に向けた

そして、口を開けた

その口の中に、眩い光が集まっていく

「諦めるか！ 諦めて、たまるかああああ!!」

局員はそう吼えながら、クビアを睨んだ

そこに、希望が到来する

「ランセオル・ク雷帝招来！」

巨大な雷球が、クビアに直撃

クビアは、初めて明確なダメージを負った

その局員は、雷球が来た方向を見た

そこには、金色の閃光が居た

否、それだけでなく、今この世界に居る最高峰の魔導師とベルカ騎士達が居た

「あ、ああ……」

その局員だけでなく、大多数の局員やベルカ騎士達が感涙の涙を溢した
機動六課戦力だけでなく、ダークマテリアルズも揃っていた

ここから、狼煙が上がる

開戦

「皆、最後の二仕事や……辛いかもしれへんが、いくで!!」

はやてがそう言った直後、集結した六課全員とダーククマテリアルズは動いた

「あのデカブツ、古代魔法での攻撃が有効打のようだが、大威力の魔法ならばどうか!？」

デИАーチエはそう言うと、大規模魔法

ドウム・ブリンガーを発動した

展開された夥しい数の劍群が、次々とクビアに殺到する

劍群が命中し、クビアは咆哮を上げながら態勢を崩す

それを狙い、フエイトが

「ランセオル・ク雷帝招来!!」

と十数本の雷撃を、クビア狙い放った

そこに、蒼い炎が走った

「つつ!？」

「まさか!？」

それを見たなのはとフェイトは、上空を見上げた

そしてクビアの真上に、それは居た

再会を果たした時のように、機械の仮面を着けた明久が

「明久……」

「また、操られて……」

その姿を見て、フェイトとなのはは絶望した

今の戦況で、明久が敵に回っている

クビアだけでも、相当に厄介である

だというのに、明久も敵に回っている

助けたいが、そちらに意識を割けばクビアの攻撃を受けてしまう

だから、取れる選択は非常に限られてしまう

「……皆、本気で行くよ……」

はやての言葉に、全員が振り向いた

すると、はやては

「本気で行って、すぐに明久君を無力化するんや……そして、クビアに戦力を集中させる

……それしか、方法は無い……」

と言って、明久を見上げた

すると、明久が大剣を構えた

どうやら、臨戦態勢のようだ

「フェイトちゃんとなのはちゃん、シャマルが明久君と交戦！ 他はクビアに集中攻撃！

！ 行くで!!」

『了解!!』

はやての指示に従い、全員は動き出した

なのはとフェイト、シャマルの三人が明久と交戦を開始

他のメンバーは、クビアに集中攻撃を開始した

「アキ君！」

「なんとか、無力化を!!」

「支援は、任せて!!」

シャマルはそう言うのと、明久を見つめて

「誘惑ノ恋人」

と唱えた

その直後、明久の動きが鈍くなった

誘惑の恋人、マハ

その特技は、混乱させること

それは、相手が機械に操られていようが効果は出る

その証拠に、操られている明久の動きが劇的に鈍くなった

「今のうちに！」

「あの仮面を！」

それを見た二人は、明久に対して攻撃を放った

しかし、混乱していても動きは研ぎ澄まされていた

明久はフェイトが振り下ろした鎌を、素手で掴むとなのはの方に投擲

ぶつかって動きを止めた二人に、魔力弾を放った

「なのは、動かないで!!」

自分達に迫る魔力弾を見ると、フェイトは鎌を回して防御した

避けきれないと悟ったからだ

直撃は防いだが、凄まじい衝撃と熱が二人を襲う

「つつう?!」

しかし、やはり混乱しているのだろう

追撃を仕掛けるタイミングで、動かない

「やり辛い……」

「けど、やらないと……!」

二人はそう言うと、明久に迫った
最終決戦は、幕を開いた

憑神

戦いが始まって、しばらく

明久やクビアとの戦いは、熾烈を極めていた

クビアは最初の一撃以降、魔法が効かなかった

そして明久は、蒼炎を使った防御が突破出来なかった

「前より、厚い!!」

「多分、戦闘データから強化してあるんだよっ!」

フェイトの言葉に答えながら、なのはは砲撃を放った

だがその一撃を、明久は容易く回避

追尾式の蒼炎弾を、十数発放った

それを見たなのはは、即座に同数の魔力弾を形成

放った

二つの魔力弾は空中でぶつかり、凄まじい爆発を起こした

だが、爆煙の中から数発の蒼炎弾が出てきた

どうやら、迎撃に失敗したようだ

しかし、その蒼炎弾は

「スファイアプロテクト！」

シヤマルが展開した四角形の障壁により、防がれた

「ありがとう、シヤマル！」

「大丈夫よ！ 来るわ!!」

フェイトは感謝の言葉を言うが、シヤマルは魔力糸を張って構えた

その魔力糸を切り裂きながら、明久が突っ込んできた

狙いは、なのは

「させない!!」

そう思ったフェイトは、横から鎌を振り下ろした

だが次の瞬間、その鎌は三股の短剣で防がれた

「つつ!？」

大剣を右手に持ちながら、左手に短剣を持っていることに驚き、フェイトは僅かに固

まった

だが、その隙を突かれてフェイトは蹴り飛ばされた

「ぐう!？」

「フエイトちゃん！ つぁ!？」

驚いたのはだったが、眼前に明久が迫り、大剣を振り上げていることに気付き、間一髪で障壁を展開

防いだ

「つつ……一撃が、重いつ!!」

明久の一撃の威力は高く、なのは自慢の障壁にヒビが入った
それを見たなのは

「バースト!!」

と障壁を、爆発させた

これは、緊急時に使うプロテクションバーストだ
相手が近接戦闘型だと、結構重宝する魔法である

その爆発を至近距離で受けた明久は、大きく吹き飛ばされた
そこに、シャルルの魔力系が絡み

「せえ……のー!」

とシャルルは、思いきり振り回した

振り回した先には、太い木があった

シャルルは容赦なく、その木に明久を叩きつけた

（ごめんなさい、明久君！ 後で、治療してあげるから!!）

シヤマルは心中で謝りながら、更に明久を振り回した

だが途中で、明久は魔力糸から脱出

右手を掲げた

その直後、明久の周囲に数多の木槍が出現

それを、高速で射出した

それを見たシヤマルは、その射線上に一気に障壁を展開した

だが木槍が触れた瞬間、容易く貫通された

「いけない！ 障壁貫通が付与されてるわ！ 全力で回避して!!」

シヤマルの言葉を聞いて、なのはとフェイトは全力で回避

しかし、外れた木槍が着弾した場所には巨大なクレーターが出来た

当たったら、無事では済まなかったのは明白である

眼下では、直撃はしていなかったが、幾多の管理局員や騎士達が倒れていた

それを見たフェイトは

「総員、この場所から出来るだけ離れなさい！ ここは、私達が引き受けます!!」

と声を張り上げた

「り、了解！」

一人が返答し、近くの仲間と一緒に倒れた仲間達の救助に向かった

そしてフェイトは、明久に向き直り

「止めるよ、明久……！」

その決意と共に、全身に魔力を走らせた

明久を倒すために、切り札を発動させた

「スケイス……私の体を、使って!!」

スケイスの技能を、自身に宿らせた

次の瞬間、明久の目前にフェイトが迫っていた

そしてフェイトは、鎌を振り下ろした

その一撃は、明久が構えた短剣で防がれたが、次の瞬間には蹴りが明久の腹に叩き込まれていた

それが、フェイトの最後の切り札

憑神である

「行くヨ……明久……」

黒く染まった目で、明久を睨んだ

明久が態勢立て直した直後、フェイトは再び肉薄

怒濤の連撃を繰り出した

その速さには、なのはとシヤマルですら目視できなかつた
「は、速すぎるっ!」

「これが、憑神……!」

二人は、憑神のことはフェイトから聞いていた
その力のことも

「アアアアアアア!!」

フェイトは雄叫びを上げながら、鎌を振り続けた
その速度はもはや、残像すら残すほどだ

その速度に、明久の防御すら追いつかなかつた

気づけば、被弾が増えていき

「貫ツタ!!」

明久が持っていた双剣は、弾かれていた
そしてフェイトは

(ごめん、明久! 致命傷は避けるから!!)

と、両足を狙った

だがその時、明久の体が動いて、胴体に直撃した

「ナッ!」

フェイトが驚いていると、明久の顔から機械式の仮面が落ちた
その下から見えたのは、悲しげな表情だった

「ごめんね、フェイト……辛い役割を強いる……」

「もしかして……最初から……？」

フェイトが涙を流していると、明久は血を吐き出し

「これで……条件は揃った……後は……お願い……」

と言って、消えた

死の恐怖

「条……件……？」

明久が消えた後フェイトは、呆然としていた

そこに、通信ウィンドウが開き

『フェイト……ようやく、頼まれた資料が見つかった……再誕に関する資料……』

とユーノが言ってきた

それは、頼んだフェイトも半ば忘れかけていたことだった

『解説に時間が掛かった……その資料には、再誕の他にクビアのことも書かれてあった

……』

「クビア……」

ユーノの言葉を聞いたフェイトは、他のメンバーが抑えているクビアを見上げた

その禍々しき神を

『まず、再誕は世界を有るべき姿に戻すための鍵……そして、その鍵を使えるのは死の恐

怖だつてこと……』

「……………私？」

ユーノの言葉を聞いて、フェイトは思わず首を傾げた
するとユーノが

『うん……………死の恐怖が再誕を取り込み、破壊神クビアに挑む……………八相の力を束ねし時、破壊神は消え去る……………そう書かれてる』

と言った

それを聞いたフェイトは、一度は消した鎌を再展開

そして、クビアを見上げて

「明久は……………これのことを言ってたんだ……………だから、わざと……………」

と言いながら、涙を流した

そこに、なのはとシャマルが近づき

「フェイトちゃん……………」

「無理は、しないでね……………」

と優しく声をかけた

二人は、フェイトが明久に恋していたことを知っている

だが、今の状況ではそう言うしかなかったのだ

なにせ、まだ危機は続いているのだから

「行こう、二人とも……あの太古からの破壊神を……倒すんだ……！」

フェイトはそう言うのと、クビア目掛けて飛んだ

そして

「ああああああ!!」

と雄叫びを上げながら、鎌を叩き付けた

その一撃、もし普通の相手だったら、一撃で決着が着いていただろう

しかし相手は、太古からの破壊神クビア

普通ではないのだ

フェイトの攻撃だけでなく、全員の攻撃がクビアに当たっていないなかった

「何かに、阻まれてる!？」

「魔法も、物理も同時に!？」

以前のゴレの時は、対物理と対魔障壁が一瞬で切り替わって防がれていた

だが、クビアは違う

魔法も物理も、同時に防がれていた

つまり、今使える攻撃は全て効いていないのだ

「どう、すれば……!？」

とフェイトが歯噛みした

その時だった

《今こそ、我等が力……集う時!》

と黄昏因子を宿した全員から、力が溢れた

「こ、これは……!?!」

「さっきの、フェイトちゃんの……憑神?」

そう驚いていたのは、直接フェイトの憑神を見たのはとシヤマルだった

そして、この時になってフェイトは気づいた

「皆の力が……私に!?!」

その場に居る八相の力が、フェイトに流れ込んでいた

その力を感じて、フェイトは

「今なら……もう一度使える!」

と確信した

憑神の消費は激しく、一度使えば魔力が回復するまでは使えない

しかし、今のフェイトには他の黄昏因子から流れ込んできていた力が満ちていた

だから

「私は……ここに居る……スケーイス!!」

今ここに、人智を越えた戦いの幕が開く

憑神・オーバーロード

フェイトが叫んだ直後、フェイトを中心に結界が展開された
黄昏空間が

その中に居るのは、黄昏因子適合者とクビアだけ
そしてそこから、劇的な変化が起きた

フェイト以外の適合者達の体が、透け始めたのだ
普通ならば、慌てるどころだろう

しかし、ある確信があった

大丈夫だと

そして透けた全員から出た光が、フェイトに集まっていく

それが集まる度に、フェイトの体から止めどない力が溢れる

その力を、フェイトは必死に制御していた

頭の中に浮かび上がる形に

その間、クビアも黙っていたわけではない

クビアの下部から、卵に数本の足が生えたような物体が現れた

ソレの名前は、クビア・コア

クビアが作り出す分身体だ

数は一体だけだが、対魔障壁が展開されていて、並の魔導師では太刀打ち出来ないそのクビア・コアは、ゆつくりとフェイトに迫った

だが次の瞬間、クビア・コアが展開していた障壁が砕け散った

その原因は、撃ち込まれた拳

半透明になったスバルが繰り出した拳が、クビア・コアの障壁を破砕したのである
そしてそのクビア・コアに、今度は砲撃が直撃

吹き飛ばした

その砲撃は、なのはが撃ったものである

その直後、フェイト以外の全員の姿が消えた

そしてフェイトは、クビアを睨み

「お前は……ここで、終わる!!」

と叫んだ

その直後、フェイトの体から凄まじい光が溢れた

そして光が収まった直後、そこには約5mに達する巨体が居た

右手には鎌を持つ、まるで悪魔のような見た目の巨体が

『憑神・オーバーロード!!』

それが、黄昏因子の最終切り札

スケイスを依り代として、全ての黄昏因子を束ねた姿

そしてフェイトは、一気にクビアに向かった

確かに、悲しみがある

だがそれに止まっては、明久に申し訳がたない

明久は何時も、誰かのハッピーエンドのために奔走していた

その明久が、自分を犠牲にした

だったら、悲しむのは後にする

今は、クビアを倒すことこそが何よりも大切なのだ

でなければ、世界が崩壊する

『ああああアアアアア!!』

フェイトは雄叫びを上げながら、クビアに鎌

死ヲ刻ム者を振り下ろした

流石に、一撃で障壁は砕けない

だが、それはフェイトにも予想出来ていた

だから、連続で鎌を振り回した

一撃入る度に、手応えが増していく

しかし、クビアも無抵抗ではない

雄叫びを上げると、至るところから生えている触手の先端から、砲撃を放った

それをフェイトは、得意の機動で回避しつつ、回避しきれないのは死ヲ刻ム者で弾いた

(不思議だ……こんな巨体なのに、何時も通り……うん、何時もより早く動ける)

普通、体が大きくなると動きは鈍くなりやすい

中には例外的に、巨体なのに動きが早い生物も居る

フェイトの元々の身長は、女性の中では高い約175cmになる

しかし今は、約三倍の約5m

そうなれば、重量の増加から機動性は大幅に落ちてしまう

それどころか、体が何時もより軽く、早く動く

その理屈は、フェイトには分からない

だが、だからこそ、今日の前に居るクビアに、負ける気がしないのだ

砲撃を無傷で切り抜けたフェイトは、一気に接近し、死ヲ刻ム者を連続で叩きつけたその時、左腕が動き

『振動拳!!』

左拳を、障壁に叩き込んだ

その攻撃は、本来ならばスバルの固有技だ

それがなぜ、フェイトに使えるのか

その理由は、フェイトには分からない

しかし、それすらどうでもいい

フェイトは、次々と攻撃を繰り返した

『ヘイムダル!!』

次に放ったのは、はやてが使う古代ベルカ式魔法のヘイムダルだった

クビアを上回る巨大な氷の塊がクビアの真上に現れて、クビアに落下を始めた

それに気づいたクビアは、先程フェイトに放った砲撃を氷塊に対して収束させて放つ

た

その威力は、なのはのスターライトブレイカーを上回っていた

その威力に、氷塊は砕け散った

だが

『ヘイムダル・ファランクスシフト!!』

即座に、同系統のより攻撃に特化した魔法に組み直した

砕け散った氷塊は、まるで氷の槍のようになってクビアに雨霰と降り注いだ

その直後、何かが砕け散る音が響き渡った

クビアが展開していた障壁が、砕け散ったのだ

それを聞いたフェイトは、クビアに肉薄し

『リングバインド!!』

様々な色のバインドで、クビアを拘束した

更に

『スターライト……ブレイカー!!』

なのはの切り札たる、スターライトブレイカーを至近距離で放った

その衝撃に、フェイトの体も震える

しかし、フェイトは止めなかった

確実に、クビアを倒すために

怒涛の攻撃

普通ならば、フェイト一人では使えず、魔力が切れている

だが、今の彼女は一人であり、一人ではない

他の黄昏因子の使い手達の想いと力が、全て集まっていた

それが、不可能を可能にしていた

アウラ

憑神・オーバーロードの力を使い、フェイトは全力で攻撃を繰り返した。攻撃が当たると、クビアが雄叫びを上げる。それはもしかしたら、絶叫なのかもしれない。しかし、それで止まるわけにはいかない。

『アアアアアアアア!!』

フェイトはクビアに負けない雄叫びを上げながら、鎌を振り下ろした。その直後、まるでガラスが砕け散った。

否、それは不可視化していた強力な障壁だった。

その一枚で、クビアは魔法を防いでいたのだ。

個人の砲撃だけでなく、艦艇の砲撃までも。

並大抵の防御力でないことが伺える。

『まだだああああ!!』

障壁を割ったとはいえ、気を抜くことは出来ない。

フェイトはクビアに鎌を叩き込もうとした

だがその時、そのフェイトに夥しい数の触手が繰り出された

その攻撃をフェイトは、体を横にして回転させて回避しつつ、鎌を振り回した

それで、次々と触手が切り裂かれていく

しかし、触手の数が多すぎた

数本の触手が、フェイトに直撃

フェイトは、まるで砲弾のように地面に激突した

普通だったら、いくらバリアジャケットを展開しているとは言えども、フェイトは行動不能に陥るダメージは間違いない

だが、土煙を突き破って

『倒れるかああああああ!!』

とフェイトが現れた

そしてフェイトは、クビアが触手で形成した壁を両断

『フォトンランサー・ジェノサイドシフト!!』

彼女の使う魔法を、より攻撃に特化した魔法を展開した

展開する魔力球の数は100を越している

『ファイア!!』

フェイトが指示した直後、魔力球から次々と電気の槍が発射される
その発射感覚は、まるで機関銃のよう

轟音と共に放たれた電気の槍は、次々とクビアに命中
クビアを、煙が覆っていく

しかしそれでも、フェイトは攻撃の手を緩めない

否、緩める理由が無い

今フェイトの中には、黄昏因子適合者達も居る

その全員の意志だった

目前に居る災害を、^{クビア}撃破すると

『アイバイン・バスター!!』

フォトンランサー・ジエノサイドシフトを放ちながら、フェイトは右腕をクビアに突
き付けた

するとその右腕の先から、なのはの代名詞とも呼べる砲撃が放たれた

その砲撃は、煙の中に浮かんでいたクビアに命中

クビアの外殻に、ヒビを入れた

そして、それをフェイトは見逃さなかった

そのヒビに、攻撃を集中させた

だが、クビアも受け身だけではない

大きく口を開き、そこに光

魔力を集めていき、破壊の一撃を放った

その一撃は、電気槍を巻き込みながらフェイトに迫った

デストラクター・ディザスター

それが、クビアの放った砲撃の名前

幾つもの国を、一撃で吹き飛ばした破壊の一撃

それをフェイトは

『スターライト……ブレイカー!!』

なのは最強砲撃で、迎撃した

ちやうど中間でぶつかる、二つの砲撃

その威力の凄まじさは、周囲に撒き散らされる衝撃波が物語っている

衝撃波だけで、遺跡が吹き飛んでいく

その時、大爆発が起きた

あまりの威力に、クビアですら僅かに押された程だ

そして爆発の威力が収まった時、クビアの周囲に50近くのフェイトの姿があった

流星のクビアも、何れが本物かは一瞬では気づかなかつたらしい

クビアが迷っている間に、そのフェイト達
分身が、一斉に爆発した

それは、ティアナの幻術を使った爆撃

一人であつて、一人ではない

それが、今のフェイトの強みだった

『兜割り!!』

大爆発の直撃とほぼ同時に、クビアの頭に一撃が叩き込まれた

その一撃で、クビアは頭部にキズを負った

しかし、致命傷ではない

それを証明するように、クビアは触手を振るつた

その触手を回避しつつ、フェイトは

『あいつの弱点は……!』

と呟いた

その時だった

『モルガナの小さな子らよ……今こそ、旧き神を終わらせる時です』

と頭の中に、声が聞こえた

『つつ!?!』

フェイトが驚いていると、クビアも動きを止め、上を見ていた

フェイトも上を見ると、宙に一人の美少女が居た

夢い印象を抱かせる、一人の美少女だった

しかし、夢い印象と同時に神々しさも感じた

『貴女は……』

『我が名は、アウラ』

フェイトが呆然と眩くと、美少女

創造神アウラは、そう名乗った

エピソードグ 決着の刻

『モルガナの小さき子らよ……かの旧き破壊神を、終わらせるのです……』
『アウラ……』

フェイトがアウラの名前を呼ぶと、クビアが動いた
クビアは魔力砲を、アウラに放った

しかしアウラのまえに、鏡が出現し無効化した
だが、するのは無効化か防御だけ

アウラ自らは、攻撃はしない

『そうか……アウラは、戦う力を持たない……だから、蒼炎騎士団を！』
神とて、万能ではない

フェイトはそれに気付いて、クビアに攻撃した

古代魔法、雷帝招来

そのの、重ね掛け

本来は、不可能な重ね掛け

だが、フェイトはそれを為した

高速並行詠唱

現代魔法に於いても、高等技能

それを為して、雷帝招来の重ね掛けという離れ業を成功させた

巨大な雷球と落雷が命中し、クビアは今ままで一番大きな咆哮を上げた

その隙に、フェイトはアウラに接近した

『ようやく会えましたね、今代の因子の使い手達よ……今こそ、悠久に続きし争いを終わらせるのです……』

アウラはそう言うと、フェイトの額に唇を当てた

その直後、フェイトの左手手首にそれが現れた

明久がしていたのと、瓜二つの花弁のような腕輪が

『黎明の腕輪……それを、貴女に託します……それを以て、終わらせてください……』

そう言った直後、アウラは消えた

その使い方は、今なら分かる

頭の中に、使い方が流れ込んできた

だが、同時にリスクも

使う度に、体の中に悪意が流れ込んでくる

悪意に負ければ、暴走してしまう

歴代の腕輪の使い手たる蒼炎の担い手は、それを耐えてきた人々の悪意を、その身に取込み込んで、その身で封印してきた

『……明久……どれだけ耐えてきたの……』

フェイトが記憶してる限り、明久は最近、短期間に腕輪を使っていたそれが、どれほど苛んでいたのだろうか

分からないが、今は

『クビアを、倒す!!』

フェイトがそう言った時、クビアは魔力砲を放ってきた

フェイトはそれを、螺旋機動で回避

鎌を振るった

その一撃は、クビアを縦に切り裂いた

その直後、フェイトの耳にガラスが砕けるような音が聞こえた

『今!!』

フェイトは左手を突き出して、クビアに狙いを定めた

そして

『データ……ドレイン!!』

クビアに、データドレインを放った

管に貫かれて、クビアは全身にヒビが入っていく

それはまるで、風化していく岩石のように

そして、最後に頭にヒビが入った直後に、クビアの体が崩れ始めた

フェイトはそれを見ながら、長い永い間続いた旧き戦いが終わったと確信した

その時だった

一つになつていた全員が、元に戻った

そして、全員の耳に大鐘楼の音が聞こえた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は流れて、新暦76年1月

J S事件は、終息が宣言された

それと同時に、数多くの管理局高官達が逮捕された

様々な汚職が発覚したからだ

違法研究、冤罪による邪魔者排除、賄賂、違法献金 e t c ……挙げたらキリが無かつ

た

その中で、ある一人の管理局員の名誉回復裁判が行われた

その結果、その管理局員は過去の降格処分を取り消し

そして、今回の事件の解決のために命を賭したとして、三等空佐の階級が与えられたこの裁判を開いたその提督は

『今後二度と、間違った判断がされないことを切に願います』
と告げた

しかし、管理局は暫くの間は態勢の見直しと再編に奔走するしかなかった
だがその間、ある正義を掲げる一団がミッドチルダを護り続けた

その名は、蒼炎騎士団

嘗て存在し、世界を護り続けた最強の騎士団が、現代に甦った

その構成員は、約20人程

しかし、その内7人は不思議な力を宿していた

古代魔法を司る力を……

この者達がどうなったのかは、分からない……